本に曰く無明熏習に依て起する所の識をば凡夫の能知にもあらず、亦二乘の智慧の所覺にもあらず、謂く菩薩に依らば初めの正信より發心觀察し、若し法身を證せば少分知ることを得、乃し菩薩究竟地に至るまで知り盡くすこと能はず唯佛のみ窮了す、何を以ての故にこの心は本より已來自性清淨なれども而も無明あり、無明の爲に染せられて其の染心あり、染心ありと雖も常恒に不變なり、この故に此の義は唯佛のみ能く知りたまへり、所謂心性は常に念無きが故に名けて不變と爲す、一法界を達せざるを以ての故に、心に相應せずして忽然として念を起すを名けて無明と爲す。染心とは六種あり、云何が六と爲す、一には執相應染、二乘の解脫と及び信相應地とに依て遠離するが故に。二には不斷相應染、信相應地に依て方便を修學し漸漸に能く捨てゝ淨心地を得て究竟して離るゝが故に。三には分別智相應染、具戒地に依て漸く離れ乃至無相方便地にして究竟して離るゝが故に。四には現識不相應染、色自在地に依て能く離るゝが故に。五には能見心不相應染、心自在地に依て能く離るゝが故に。六には根本業不相應染、菩薩盡地に依り如來地に入ることを得て能く離るゝが故に。一法界を了せざる義とは信相應地より觀察學斷し淨心地に入て隨分に離るゝことを得、乃至如來地にして能く究竟じて離るゝが故に。相應の義といふは、謂く心と念法と異なり、染淨の差別に依れば知相と緣相と同なるが故に。不相應の義とは、謂く卽心と不覺と常に別異なし、知相緣相に同せざる故に。又染心の義とは、名けて煩惱碍と爲す、能く眞如根本智を障ふるが故に。無明の義とは名けて智碍と爲す、能く世間の自然業智を障ふるが故に此の義に云何が染心に依り能見し能現し妄に境界を取て平等の性に違するを以ての故に、一切の法は常靜にして起相あること無くとも無明不覺にして妄に法と違す、故に世間の一切の境界の種種の知に隨順することを得る能はざるを以ての故に。

論じて曰く卽ちこの文の中に故に五門あり、云何が五とする、一には擧人顯示殊勝門、二には顯示深緣決疑門、三には擧障示治配當門、四には顯應不應差別門五には立二碍別障用門なり、これを名けて五と爲す。第一の門の中に則ち三人あり、云何が三とする、一には分滿俱絕の人、邪定の凡夫と一切の二乘とは愚癡深きが故に、智慧劣なるが故に、本の如し、無明熏習に依て起するところの識は凡夫の能く知るにもあらず、亦二乘の智慧の覺すのところにもあらざる故に。二には有分無滿の人、五十位の人は始覺の般若は未だ圓滿せざるが故に、本の如し、謂く菩

薩に依るに初め正信より發心觀察し若し法身を證するに少分知ることを得、乃し菩薩究竟地に至るまで知り盡くすこと能はざる故に。三には有滿無分の人佛果の位の中には大圓鏡智偏く現前するが故に、本の如し、唯佛のみ窮了したまへり、故にこれを名けて三と爲す、已に擧人顯示殊勝門を說きつ。次に顯示深緣決疑門を說かん、この中には二意あり、云何が二とする、一には常無常門、二には無常常門なり。常無常門といふは自相本覺の心は無始より來た決定常住にして體性不變なれども無常にあらざる時なく、變化にあらざる處なきが故に、本の如し、何を以ての故に是の心本より已來自性淸淨なれども無明あり、無明の爲に染せられて其の染心あるが故に、無常常門といふは此の本覺の心は無始より來た常恒に無常に常恒に變異なれども常住にあらざる時なく不變にあらざる處無きが故に、本の如し、染心ありと雖も常恒に不變なるが故に。この故に此の義は唯佛のみ能く知りたまへりとは、惣じて殊勝を結す、これより已下は更に二句を以て上の二句を釋す文相見つべし。已に顯示深緣決疑門を說きつ。次に擧障示治配當門を說かん、卽ち此の門の中に自ら二意あり云何が二と爲る、一には隨轉對治分位門、二には根本對治分位門なり。隨轉對治門とは六種の隨相はその次第の如く發心を初と爲し妙覺を後と爲して應に隨つて離るゝが故に、本の如し、染心には六種あり、云何が六とする、一には執相應染、二乘の解脫と及び信相應地とに依て遠離するが故に廣說乃至、六には根本業不相應染、菩薩盡地に依て如來地に入ることを得る時に能く離るゝが故に、根本對治門とは大力無明は極喜を初めとし妙覺を後として應に隨つて離るゝが故に、本の如し、一法界を了せざる義とは信相應地より觀察學斷して淨心地に入るときに隨分離るゝことを得、乃至如來地にして能く究竟して離るゝ故に極喜地の中の根本隨相對治の形相當に如何が別つべき、謂く後得智の所斷をば名けて無明とし及び正體智の所斷をば名けて隨相とす、是くの如く知るべし、極喜を說くが如く上の一切の地も亦復かくの如し、已に擧障示配當門を說きつ。次に顯應不應差別門を說かん、云何が名けて相應の義とするや、相應の義といふは、所謂心品と及び念法と異なり、云何が心品と、所謂本覺隨染の心なり、云何が念法と、所謂直に無明に依り生長する妄法なり、何を以ての故に名けて相應とする、謂く相に力を與ふるが故に、是くの如くの二法を何が故に異と名くる、本各別なるが故に、本の如し、言く相應の義とは謂く心と念法と異の故に念法の依は染なり、心品の依は淨なり、是くの如く二依各各差別なること猶

し水火の如きのみ。何が故にか相應の義を成ずといふ、知相と緣相と合して契同するが故に。云何が名けて知相契同とする、心品と念法と相捨離せず和會して轉ずるが故に。云何が名けて緣相契同とする、是くの如くの二品は所緣同なるが故に本の如し、染淨の差別に依て知相と緣相と同なるが故に大本金剛三昧契經の中に是くの如くの說を作す、三種の相は同なり異の故に同を成ず、若し同ならば不同なるが故に、若し爾らば何が故にか部宗契經の中に是くの如くの說を作す、三種の麁染は二義の故に轉ず、云何が二轉、一には相違轉、二には隨順天乃至廣說、上に逆ひ下に順じて是くの如くの說を作す、別の意趣なし、不相應の義は相應と相違せり審に觀察すべし、已に顯應不應差別門を說きつ。次に立二碍別障用門を說かん。彼の煩惱碍は多く散動の性なり、この眞如智は直に寂靜の性なり、是くの如く相違せり、故に立て丶障と爲す、本の如し、又染心の義とは名けて煩惱碍と爲す、能く眞如根本智を障ふるが故に彼の智慧碍は漠冥の性なり、是の作業の智は聰明の性なり、是くの如く相違せり、故に立て丶障と爲す、本の如し、無明の義とは名けて智碍と爲す、能く世間の自然業智を障ふるが故に、此の義に云何ん下は其の因緣を顯示す、審に思擇すべし、二障二碍と復何の別かあるや。二障門を立つることは一向斷に據り、二碍門を立つることは斷不斷に據る、是くの如く知るべし、是くの如く觀ずべし、上より已來は因緣殊勝擇分已んぬ。

釋摩訶衍論卷第四　終

釋摩訶衍論卷第五

龍樹菩薩造

これより已下は生滅の相の差別を顯示す。

本に曰く復次に生滅の相を分別すとは二種あり、云何が二とする、一には麁は心と相應するが故に、二には細は心と相應せざるが故に、又麁が中の麁は凡夫の境界なり、麁が中の細と及び細が中の麁は菩薩の境界なり、細が中の細はこれ佛の境界なり、此の二種の生滅は無明の熏習に依て而も有り所謂因より緣に依る、因に依るとは不覺の義の故に、緣に依るとは妄に境界と作るの義、故に若し因滅すれば則ち緣滅す、因滅するが故に不相應の心滅し、緣滅するが故に相應の心滅す。問うて曰く、若し心滅すといはば云何が相續せん、若し相續すといはゞ云何が究竟滅と說かん。答へて曰く言ふ所の滅とは唯し心相の滅の滅にして心體の滅にあらず、風は水に依て動相あり、若し水滅すれば則ち風斷絕して依止するところ無けん、水滅せざるを以て風相相續す、唯し風滅するが故に動相隨つて滅すとも是れ水の滅にはあらざるが如く、無明も亦爾なり、心體に依て動す、若し心體滅せば則ち衆生斷絕して依止する所なけん、體滅せざるを以て心相續することを得、唯し癡滅するが故に心相隨つて滅すとも心智の滅にはあらず。

論じて曰く卽ちこの文の中に自ら五門あり、云何が五とする、一には標釋俱成示相門、二には率相屬當假人門、三には顯示麁細所依門、四には本覺對治次第門、五には發起問答決疑門なり。

標釋俱成示相門と言は麁重生滅は心と相應するが故に、微細生滅は心と相應せざるが故に、云何が名けて麁重生滅と爲る、當に何の識とか而も相應するや、謂く末が末の故に分別事識と而も共に相應するが故に。云何が名けて微細生滅とする、當に何れの識とか而も不相應なるや、所謂末の故に三位の本識と而も不相應なるが故に。馬鳴菩薩は何れの經本に依てこの解釋を作りたまふ、謂く楞伽經なり。彼の契經の中に如何が說くや、謂く一本の分流楞伽契經の中に是くの如くの說を作す、爾の時に大慧菩薩摩訶薩また佛に白して言さく世尊諸識に幾種の生住滅かある。佛大慧に告げたまはく諸識に二種の生住滅あり思量の所知にあらず、諸識に二種の生あり、謂く流注生及び相生、二種の住あり謂く流注住及び相住、二種の滅あり謂く流注滅及び相滅なりと。又一本の分流楞伽契經の中に是くの如く

の説を作す、大慧諸識に二種の滅あり、何等をか二とする、一には相滅、二には相續滅、二種の生あり何等をか二とする一には相生、二には相續生、二種の住あり何等をか二とする、一には相住、二には相續住、又大本楞伽契經の中に是くの如くの説を作す、爾の時に文殊師利、佛に白して言さく世尊もろ〳〵の心識の法に幾くの無常の相かある。佛、文殊に告げたまはく若し第一有の細識には上品の非離生滅あり、若し中傳縛の細識には中品の非離生滅あり、若し遠傳縛の細識には下品の非離生滅あり、若し遍分別の麁識には分離面鏡の生滅ありと、是くの如くの三本楞伽契經の中には何の義をか明さんとする、麁重微細二種の生滅の差別の相を顯示せんと欲ふが爲の故に、契經の中に於ては唯し名字を出して其の義を示さず、この義を以ての故に、馬鳴菩薩は契不契を分つて麁細二種の生滅を顯示したまふ本の如し。復次に生滅の相を分別すとは二種あり、云何が二とする、一には麁は心と相應するが故に、二には細は心と相應せざるが故の故に、已に標釋俱成示相門を説きつ。

次に率相屬當假人門を説かん、この中の假人に卽ち三種あり、云何が三とする、一には不退の凡夫、二には分清淨者、三には滿清淨者なり、これを名けて三と爲す、初人は何れの相應を以てか而も自境界とするや。謂く執相應染を以て自境界とするが故に、本の如し、又麁が中の麁は凡夫の境界の故に、中人は何等の染を以てか而も自境界とするや、謂く後の二の相應と初めの二の不相應と及び業識の一分とを以て自境界とするが故に、本の如し、麁が中の細と及び細が中の麁とは菩薩の境界の故に、後人は何れの不相應染を以てか自境界とするや、謂く俱合動相の一分と及び獨力業相の全分とを以て自境界とするが故に、本の如し、細が中の細はこれ佛境界の故に、已に率相屬當假人門を説きつ。

次に顯示麁細所依門を説かん、この中の所依に卽ち二種あり云何が二とする、一には通、二にはこれ別なり、通とは二種の生滅は皆無明を以て所依とするが故に、別とは二種の生滅はその次第の如く各因と及び緣とを所依とするが故に、本の如し、この二種生滅は無明熏習に依て而も有なり、所謂因に依り緣に依る、因に依るとは不覺の義の故に、緣に依るとは妄に境界を作すの義の故の故に、今この論文は何れの經に依てか起する、謂く楞伽經なり、彼の契經の中に如何が説くや、謂く分流楞伽契經の中に是くの如くの説を作す、大慧不思議熏と及び不思議變とはこれ現識の因なり、取種種塵と及び無始妄想熏とはこれ分別事識の因なりと、又

大本楞伽契經の中に是くの如くの說を作す、復次に不離染の因とは可思議不可思議熏と及び可思議不可思議變となり、復次に分離染の因とは種種の猛風と妄想現鏡識となり乃至廣說何れの法をか名けて不思議熏とする、所謂これ根本無明何の義を以ての故にか不思議と名くる、謂く甚深なるが故に、云何が甚深なる、謂く金剛已還の一切衆生はこの處を了せず、この故に名けて不思議熏と爲す、熏の如く變も亦爾るが故に、大本經の中に是くの如くの說を作す、可思議不可思議とは金剛還上の人に就くが故に、已に顯示麁細所依門と說きつ。

次に本覺對治次第門を說かん、謂く本覺智は根本無明を始と爲し滅相を終りと爲して其の次第の如く漸く對治するが故に然もこの中の斷は無明を捨てざるを以て其の斷と爲す、斷除を以て而も斷とするにはあらざるが故に、若し爾らば云何が斷の義成ずるや、謂く煩惱を斷ずるの心を斷除して起せざるが故にこれを本覺治道の次第と名く、本の如し、若し因滅すれば則ち緣滅す、因滅するが故に不相應の心滅す、緣滅の故に相應の心滅の故に、已に本覺對治次第門を說きつ。

次に發起問答決疑門を說かん、卽ちこの門の中に自ら二意あり、云何が一一とする、一には兩難閉開門、二には開通決疑門なり、文相見つべし、本覺の明智、根本無明を斷ぜば三種の細染永滅して起せじ。已に三細無くは六麁の心亦起すること能はじ、三六種の心永滅して起せずば本覺性智、自有なること能はじ、所以何となれば三六種の心は但し無明のみにあらず亦本覺と俱なり、眞妄和合するを三六の心と名くるが故に、然も若し三六の心滅すと言はゞ本覺同く滅して所有無けん、豈に本覺の心而も相續することを得て耶定に至るといふことを得べけんや、故に問うて曰く若し心滅すれば云何が相續すと言ふ、卽ちこれ初開なり、若し本覺はこれ功德の法にして非斷の法なれば常恒に相續して斷絕なしと言はば、豈に三六種の心永滅して起せずといふことを得べけんや、故に若し相續すといはば云何に究竟滅すと說かん、則ちこれ第二の關なり、これより已下は釋を作して疑を決す文相明かなるが故に重釋を須ひず、上より已來生滅の相の決擇分已んぬ、これより已下は染淨の相熏相生して斷絕せざる義を顯示す。

本に曰く復次に四種の法の熏習の義あり、故に染法淨法起して斷絕せざる云何が四とする、一には淨法名けて眞如と爲す、二には一切の染因名けて無明と爲す、三には妄心名けて業識と爲す、四には妄境界所謂六塵、熏習の義とは世間の衣服は實に香無けれども若し人香を以て熏習するが故に則ち香氣あるが如し、此れも

亦是くの如し、眞如淨法は實に染無くとも但無明を以て熏習するが故に則ち染相あり無明の染法は實に淨業なけれども但眞如を以て熏習するが故に則ち淨用あり、云何ぞ熏習して染法を起して斷ぜざる所謂眞如の法に依るを以ての故に無明染法の因あるを以ての故に卽ち眞如を熏習す熏習を以ての故に則ち妄心あり、妄心あるを以て、則ち無明を熏習す、眞如の法を了せざるが故に不覺の念を起し妄境界を現ず妄境界染法の緣あるを以ての故に則ち妄心を熏習すその念をして着せしめ種種の業を造り一切の身心等の苦を受けしむ、この妄境界熏習の義に卽ち二種あり、云何が二とする、一には念を增長する熏習、二には取を增長する熏習、妄心熏習の義に二種あり、云何が二とする、一には業識根本熏習能く阿羅漢辟支佛、一切菩薩に生滅の苦を受けしむるが故に、二には增長分別事識熏習能く凡夫に業繫の苦を受けしむるが故に、無明熏習の義に二種あり、云何が二と爲す、一には根本熏習能く業識を成就する義を以ての故に、二には所起見愛熏習能く分別事識を成就する義を以ての故に云何が熏習の淨法を起して斷ぜず所謂眞如法あるを以ての故に能く無明を熏習す、熏習の因緣力を以ての故に則ち妄心をして生死の苦を厭ひ涅槃を樂求せしむ、この妄心に厭求の因緣あるを以ての故に卽ち眞如を熏習して自ら己が性を信じ心の妄動を知り、前の境界無く遠離の法を修し如實を以て前の境界なしと知るが故に、種種の方便を以て隨順の行を起して取らず念はず乃至久遠熏習力の故に無明則ち滅す、無明滅するを以ての故に心起することあること無し、起することなきを以ての故に境界隨つて滅す、因緣俱に滅するを以ての故に心相皆盡くるを涅槃を得て自然の業を成ずと名く、妄心熏習の義に二種あり、云何が二とする一には分別事識熏習もろ〳〵の凡夫二乘人等に依るに生死の苦を厭ひ力所能に隨つて漸く無上道に趣向するを以ての故に、二には意熏習謂くもろ〳〵の菩薩發心勇猛にして速に涅槃に趣くが故に眞如熏習の義に二種あり云何が二と爲す、一には自體相熏習、二には用熏習、自體相熏習とは無始世より來た無漏の法を具す、用熏習とは備に不思議の業あつて境界の性と作る、この二義に依て恒常に熏習す、熏習力あるを以ての故に能く衆生をして生死の苦を厭ひ涅槃を樂求せしむ、自ら己身に眞如の法ありと信じ發心し修行す、問うて曰く若し是くの如くの義をば一切衆生に悉く眞如あつて等しく皆熏習す、云何が有信無信無量に前後に差別ある皆一時に自ら眞如の法ありと知つて方便を勤修して等しく涅槃に入るべし、答へて曰く眞如は本より一にして無量無邊の無明あつて本よ

り已來自性差別にして厚薄不同なるが故に、過恒河沙等の上煩惱無明に依て起して差別あり、是くの如く一切煩惱は無明に依て起されて前後無量の差別なるを唯し如來のみ能く知りたまふが故に、又もろ〳〵の佛法は因あり緣あり因緣具足し乃し成辨することを得、木の中の火の性はこれ火の正因なり若し人知ることなきが如く衆生も亦爾なり、正因熏習の力ありと雖もといはば是の處り有ることなきが如く方便を假らずして能く自ら木を燒く若し諸佛菩薩善知識等に遇うてこれを以て緣と爲し能く自ら煩惱を斷ぜずして涅槃に入るといはば則ち是の處り無し、若し外緣の力ありと雖も內の淨法の未だ熏習の力あらざるものは亦究竟して生死の苦を厭ひ涅槃を樂求すること能はず、若し因緣具足する、所謂自ら熏習の力あり又諸佛菩薩等の慈悲願護の爲の故に能く厭苦の心を起し涅槃ありと信じて善根を修習す、善根を修することと成就するを以ての故に則ち諸佛菩薩の示敎利喜に値うて乃し能く進んで涅槃の道に趣向す、用熏習のもの卽ちこれ衆生の外緣の力なり、是くの如く外緣に無量の義ありとも略說に二種あり、云何が二とする、一には差別緣、二には平等緣、差別緣とはこの人は諸佛菩薩等に依て初發意に始めて道を求むる時より乃し佛を得るに至るまで中に於て若しは見、若しは念、或は眷屬父母諸親と爲り、或は給使と爲り、或は知友と爲り、或は怨家と爲て或は四攝を起し乃し一切の所作の無量の行緣に至るまで大悲熏習の力を起して能く衆生をして善根を增長し若しは見、若しは聞、利益を得しむるを以ての故に、此の緣に二種あり云何が二とする、一には近緣速に得度するが故に、二には遠緣久遠に度することを得るが故に、この近遠の二緣を分別するに復二種あり、云何が二とする、一には增長緣、二には受道緣なり、平等緣とは一切の諸佛菩薩は皆頓つて一切衆生を度脫せんと、自然に熏習して恒常に捨てず同體の智力を以ての故に應に見聞すべきに隨つて作業を現ず、所謂衆生三昧に依て乃し平等に諸佛を見まつることを得るが故に、この體用熏習を分別するに復二種あり、云何が二とする、一には未相應、謂く凡夫二乘初發意の菩薩等は意と意識との熏習を以て信力によるが故に修行す、未だ無分別心の體と相應することを得ざるが故に、未だ自在業の修行、用と相應することを得ざるが故に、二には已相應、謂く法身の菩薩は無分別心、諸佛の智用と相應することを得唯し法力に依て自然に修行して眞如を熏習し無明を滅するが故に、復次に染法は無始より已來熏習して斷せず乃し佛を得るに至て後に則ち斷あり、淨法熏習は則

ち未來に斷盡あることなしこの義に云何が眞如の法は常に熏習するを以ての故に安心則ち滅すれば法身顯現して用熏習を起すが故に斷あること無し。

論じて曰く則ちこの文の中に自ら五門あり、云何が五とする、一には惣標綱要門二には立名略示門、三には通釋熏習門、四には分剖散說門、五には盡不盡別門なり、第一の門の中に自ら六意あり、云何が六とする、一には相待相成似有意謂く染淨の諸法は皆ことゞく相待して而も成立することを得て唯し自建立の法あることなきを顯示せんと欲ふが故に、二には本無性空非有意謂く染淨の諸法の種種の名字は本無の中に於て權假に建立して一切皆悉く自名にあらざることを顯示せんと欲ふが故に、三には相待相成顯空意、謂く染淨の諸法は相觀に由るが故に本より已來自體あること無く自性空なることを顯示せんと欲ふが故に、四には自然虛空無碍意、謂く一切の諸法は有と非有とにあらざるが故に自然作の空なり、碍と無碍とにあらざるが故に常に無障碍を作す義を顯示せんと欲ふが故に、五には非作非造自然意謂く一切の諸法は有佛無佛に相熏相生して斷絕無き義法爾道理として性是くの如くなることを顯示せんと欲ふが故に、六には不守自性無住意、謂く一切の諸法は緣起陀羅尼を作す義を顯示せんと欲ふが故に惣じて是くの如く等の無量の義を標す、故に名けて惣標綱要門と爲す、本の如し、復次に四種の法の熏習の義あり、故に染法淨法起して斷絕せざる故に、已に惣標綱要門を說きつ。

次に立名略示門を說かん、この門の中に於て卽ち二門あり、云何が二とする、一には淨眞法相門、二には染妄法相門なり、言ふところの眞とは自性淸淨本覺藏智なり、言ふところの妄とは離脫體相本上の無明なり、染妄門の中に則ち三種あり云何が三とする、一には無明、二には業識、三には境界なり、一眞三妄是くの如くの四法は能く熏事を作す、本數の名字なり、今此の文の中には一を擧げたり、後に中有を幷兼することあり審に觀察すべし所以何となれば一切の染法は皆悉く熏習のことあるが故に、本の如し、云何が四とする、一には淨名、名けて眞如と爲す、二には一切の染因名けて無明と爲す、三には妄心名けて業識と爲す、四には妄境界所謂六塵の故に已に立名略示門を說きつ。

次に通釋熏習門を說かん、この門の中に於て卽ち二門あり、云何が二とする、一には比量譬喩善巧門、二には法喩合說安立門なり、比量譬喩善巧門とは譬へば衣服は本より已來た亦芬香も無く亦鄙香も無く一向無記なり、而も士夫の衆あつて班多伽耶娑叉提鄔林に入る時には會末那提を以て熏習するが故に而も穢香あり梵檀

只多那林に入る時には陀摩鍵多を以て熏習するが故に而も香氣あるが如くなるが故に、本の如し、世間の衣服は實に香なけれども若し人香を以て熏習する故に香氣のあるが如し、故に法喩合說安立門とは、勝義の道理も亦復是くの如し、自性淸淨無漏の性德は無始より來た一向明白にして亦垢累もなく亦染汙もなし、而も無明を以て而も熏習するが故に則ち垢累あり、無明藏海は無始より來た一向闇黑にして亦智明も無く亦白品もなし、而も本覺を以て而も熏習するが故に、則ち淨用あり、是くの如くの染淨は但し之假立なり染も實の染にあらず淨も實の淨にあらず皆これ幻化なり、實の自性なし、本の如し、これも亦是の如し眞如の淨法は實には染なけれども但無明を以て熏習するが故に染相あり、無明の染法は實に淨業はなけれども但眞如を以て熏習するが故に則ち淨用あり故に已に通釋熏習門を說きつ。

次に分剖散說門を說かん、この門の中に於て卽ち四門あり云何が四とする、一には黑品相熏有力門、二には白品相熏有力門、三には發起問答決疑門、四には擧緣廣說開通門、第一の門の中に則ち二門あり、云何が二とする、一には惣問惣答顯宗門、二には歸惣作別散說門なり、第二の門の中にもこの二門を具せり審に觀察すべし。第四の門の中に自ら二門あり、云何が二とする、一には惣標軌則決定門、二には因緣各示生解門なり、その次第の如く說相見つべし、云何が熏習起染法不斷とは則ちこれ惣門なり、謂く通惣して一切の黑品の相熏相生して斷せざる義を問ふが故に、これより已下は卽ち惣答分なり、卽ち此の答說分の中に就いて淨妙藏より乃し麁熏に至るまで、本を背き末に向つて漸次に轉勝する其の次第を說けり、說相の次第審に觀察すべし、根本無明は自ら有なること能はず、當に眞如に依て方に止住することを得べし、所以何となれば眞如の性は虛空界の如く至部實主として障碍及び無障碍の中に於て爲に歸依と作つて所碍なきが故に、本の如し、所謂眞如の法に依るを以ての故に無明にあるが故に、此の如くの無明は自所を得已んぬれば氣力殊勝功能自在にして能く眞如を熏じて妄法と作さしめ不了の相を增し闇鈍の用を加ふること譬へば愛父のもろ〳〵の男女を生ずるが如し、本の如し、無明染法の因あるを以ての故に卽ち眞如を熏習す、熏習を以ての故に則ち妄心あるが故に、是くの如くの微細業識の妄心は無明に因るが故に自體生じ已んぬれば還つて無明を熏じて能く增長せしむること譬へば生子の能生の父を養ふが如し、是くの如くの熏力更に轉增するが故に平等の如理と圓滿の一心とに通達することを能はざるが故に、轉識の惑念を起し現相の妄境を生じて生死の海更に深く

涅槃の岸いよ〳〵高し、本の如し、妄心あるを以て則ち無明を熏習す、眞如の法を了せざる故に不覺の念起り、妄境界を現ずる故に是くの如くの境界の風還つて現識の海を熏じて七識の波浪を起す、此の識、境界の塵を樂著し彼の境面たり識眼の前に向つて通じて諸惡の業を造り具に一切の苦報を受けて三有の輪循環し四毒の賊浪起す、本の如し、境界染法の緣あるを以ての故に卽ち妄心を熏習す、その念をして著せしめ、種種の業を造り、一切の身心等の苦を受くる故に已に惣問惣答顯宗門を說きつ。

次に歸惣作別散說門を說かん、此の門の中に就いて卽ち三重あり、云何が三と爲る、一には境界、二には妄心、三には無明なりこれを名けて三と爲す、是くの如くの三種各二あるが故に卽ち六數と成る、その次第の如く初を以て後と爲し、後を以て初と爲して漸次に顯示す、初重云何ん、此の妄境界に如實熏習の力あるが故に法執の念を增し、如有熏習の力を有するが故に人執の着を長ず、人法二執具足して起るが故に過於恒沙の上煩惱の類皆こと〴〵く發起す、この故に名けて境界熏習と爲す、本の如し、此の妄境界熏習の義則ち二種あり、云何が二とする一には增長念熏習、二には增長取熏習の故に、中重云何ん、業識の妄心に上熏の力あるが故に已に出離を得たる三乘の聖人に而も能く變易の細苦を受けしめ、下熏の力あるが故に未だ出離を得ざる一切の凡夫に而も能く分段の麁苦を受けしむこの故に名けて妄心熏習と爲す、本の如し、妄心熏習の義二種あり、云何が二とする一には業識根本熏習能く阿羅漢辟支佛の一切の菩薩生滅の苦を受くるが故に、二には增長分別事識熏習能く凡夫業繫の苦を受くるが故の故に、後重云何ん無明住地は自體本の故に能く初末を熏じて成就することを得しめ、通達遍の故に能く事識を熏じて成就することを得しむ、何が故にか唯し初後をあげて中間を顯はさゞる、二意あるが故に、云何が二とする、一には有成就意、二には空成就意なり、云何が名けて有成就意とする、中空の無をあげて邊得の有を擧げて中有を顯すが故に、云何が名けて空成就意とする、中空の無をあげて邊空を顯はすが故に、後の義云何ん、契經の中に於て是くの如く說くが故に當に何れの契經ぞや、謂く熏習契經なり、彼の契經の中に如何が說くや、謂く熏習契經の中に是くの如くの說を作す、轉識現識末那の三識は無明に從つて而も成就を得るにはあらず、所以何んとなれば、根本無明は唯し邊成就にして、中成就にはあらず、この文の後の義は直に彼の經を釋す、この故に明に知んぬ、此の義成ずることを得、本の如し、無明熏習の義に二種

あり、云何が二とする、一には根本熏習能く業識を成就する義を以ての故に、二には所起見愛熏習能く分別事識を以ての故に、已に黑品相熏有力門を說きつ。次に白品相熏有力門を說かん、云何が起淨法を熏習して斷ぜざるとは卽ちこれ惣問なり、謂く通惣して一切の白品の相熏相生して斷ぜざる義を問ふ故に、これより已下は卽ち惣答分なり、卽ちこの答說分の中に就いて自ら二熏あり、云何が二と爲す、一には無始自然熏、二には始有建立熏なり、無始熏とは、無始より已來因果の二位あるが故に始有熏とは修力に因るが故に、因果の二位あるが故に、本因果とは其の相云何ん、謂く無始より來た三賢十聖の位あるが故に三身四德の果あるが故に、始因果とは其の相云何ん、今修行するとき方に乃ち無始の十地あるが故に、本有の因果を顯すが故に、本因果とは次第云何ん、無始より來た十種の本覺の眞智及び十種の如實法界となるを以ての故に能く十種の枝末の無明を熏じ一種の法界心あるを以ての故に能く根本無明を熏習するが故に、これを本地と名く本の如し所謂眞如法あるを以ての故に能く無明を熏習する故に、始因果とは次第云何ん、謂く未だ十信の位を得ずと雖も而も本熏習の力を以ての故に則ち自心の中に生死の苦を厭ひ涅槃の樂みを求む此の力を以ての故に而も卽ち眞如の性を熏習し自ら佛性を信じて十信の位に入り、心の虛妄を知て十解の位に入り境界の空を知て十行の位に入り、出向の法を修して十向の位に入り如實般若を以て境界空を知るが故に無量の方便をもて法界性に隨順する行を發起して涅槃をも取らず、生死をも念せず極喜地に入り乃し金剛に至る、久遠より熏習するが故に解脫道を發して無明頓に斷ず根本盡くるが故に枝末皆無なり、本末の黑品、所有なきが故に法身涅槃を得て應化の業用を成ずるが故に、これを始地と名く本の如し、熏習の因緣力を以ての故に則ち妄心をして生死の苦を厭ひ涅槃を樂求せしむ、この妄心に厭求の因緣あるを以ての故に、卽ち眞如を重習し自ら己が性を信じ心の妄動を知り、前の境界なし遠離の法を修す、實の如く前の境界なしと知るを以ての故に種種の方便を以て隨順の行を起して不取不念なり、乃至久遠熏習力の故に無明則ち滅す、無明滅するを以ての故に心起ることあることなし、起ることなきを以ての故に境界隨つて滅す、因緣俱に滅するを以ての故に、心相皆盡くるを涅槃を得て自然の業を成ずと名くる故に、已に惣問惣答顯宗門を說きつ。次に歸惣作別散說門を說かん、此の門の中に就いて則ち二門あり。云何が二とする、一には妄染熏習門、二には淨法熏習門なり。染法門の中に卽ち二種あり云何

が二とする一には是れ麁、二にはこれ細なり、言ふ所の細とは十一末那なり、意識熏とは其の相云何ん、四十心の凡夫と及びも言ふ所の麁とは卽ちこれ意識なり、ろ〳〵の二乘とは意識の中の本覺の智分を以て意識の中の無明の癡分を熏じて生死の苦を厭ひ、涅槃の樂を欣ひ漸漸轉勝して佛道に向ふ故に本の如し、妄心熏習の義に二種あり、云何が二と爲る、一には分別事識熏習もろ〳〵の凡夫二乘人等に依るに生死の苦を厭ひ、力の所能に隨つて漸く無上道に趣向するを以ての故の故に、十一末那熏習の義とは其の相云何ん、初の聖地より乃し金剛に至るまでその次第の如く淸淨分を以て染汚分を熏じて無上菩提の道に證入するが故に菩薩無明を斷ずるに等しきを以ての故に本の如し、二には意熏習、謂くもろ〳〵の菩薩發心勇猛にして速に涅槃に趣くが故に、已に妄染熏習門を說きつ。次に淨法熏習門を說かん、この門の中に就いて自ら二門あり云何が二とする、一には惣標門、二には開釋門なり。惣標門とは惣じてその名を標す、本の如し、眞如熏習の義に二種あり、云何が二とする、一には自體相熏習、二には用熏習の故に、開釋門の中に自ら二門あり、云何が二とする、一には法身自然熏習門、二には應化常恒熏習門なり、言ふ所の法身熏習門とは本覺性智は無始より來た功德を圓滿し智慧を具足して自自、自を作して他力なきが故に本の如し、自體相熏習とは無始世より來た無漏法を具するが故に、言ふところの應化熏習門とは是くの如くの本覺、過恒沙の無量無邊不可思議の種種の業用を發して一切衆生のもろ〳〵の心相の中に應に隨つて敎化して一切の惡を斷じ一切の善を修し百行の因を具し萬德の果を滿たしむるが故に本の如し、用熏習とは備に不思議の業あつて境界の性と侔る故に、是くの如くの二門は相捨離せず一切の時に於き一切の處に於て常恒に熏習して信を起し解を生じ修行を建立し不轉を造作し正後地に到り眞俗の境に達して無碍ならしむるが故に本の如し此の二義に依て恒常に熏習す、熏習力あるを以ての故に能く衆生をして生死の苦を厭ひ涅槃を樂求せしむ、自ら己身に眞如の法ありと信じて發心修行の故に、了なり、已に白品相熏有力門を說きつ。次に發起問答決疑門を說かん、この決疑門は義理解し難く文敎更に閉ぢたり釋を作つて散ずるにあらざるよりは、定めて通ずる人無く明了なること能はじ、この故に今更に種種の釋を作して具足し開示して行者の心を曉さん、その次第の如く問答の相審に觀察すべし、一切衆生に皆本覺あり、あるひは衆生數に而も本覺

なし皆理あるが故に所以何となれば大覺尊者是くの如く說きたまふが故にこの義如何ん、一切衆生は無始より來た本覺を具足し、無始より來た本覺なしと云ふが故に若し初門に依らば一切衆生に悉く本覺あり、是くの如くの本覺は唯しこれ一體にしてもろ〳〵の衆生に遍するか一一の衆生各覺ありや、一切衆生には唯し一覺のみあつて別覺なきが故に、若し爾らば衆生は唯しこれ一なるべし、所有の本覺一なるが故に本覺は非一なるべし能有の衆生は多なるが故にこの事爾らず、所以何となれば意趣別なるが故に、謂く本覺の心は平等の性なるが故に異種なること能はず一切衆生は差別の性なるが故に同種なること能はず異なること能はざるが故に一なり、同なること能はざるが故に多なり、若し爾らば此の文云何んが通せんや、謂く馬鳴尊者の大宗地玄文本論の中に是くの如くの說を作す。譬へば虛空の中、淸淨の滿月輪は獨一にして二體なけれども諸の衆生の種種の心相〻が如く、本覺も亦是くの如し、獨一にして二體なけれども遍く千器に現はるの中に遍せり、譬へば一段の雲の彼の滿月輪を覆へば千器のもろ〳〵の月輪みな隱沒して現ぜざるが如く無明も亦是くの如し、唯し一體にして二つ無けれども遍くもろ〳〵の衆生に到つて能く熏習の事を作すと、二義あるが故に相違の過なし、云何が二とする、一には自宗決定、二には引攝決定なり、自宗決定といふは同一相續の義を顯示するが故に、引攝決定といふは差別相續の義を顯示するが故に、彼の玄文論は初めの義を顯さんが爲め、是の起信論は後の義を顯はさんが爲なり、この義を以ての故に相違の過なし、この故に馬鳴尊者の虛空地地論の中に是くの如くの說を作す。

譬へば蓮葉を以て器の月輪を覆ふに而も餘器の月輪は終に隱れずして現前する如く、無明も亦是くの如し、惑人の覺を覆ふとき、已覺の人の本覺をば終に隱覆することを能はずと、この文は何の義を明さんとする、差別相續の義を顯示せんと欲ふが爲の故に、また次に文殊師利論議第一神力殊勝慈悲圓滿虛空功德契經の中に是くの如くの說を作す、無量無邊の無明煩惱の障あつて、遍く衆生の身に到つて能く障礙のことを作すと。この文は何の義を明さんとする、謂く精進修行の義を顯示せんと欲ふが故に、云何が顯示する謂く衆生あつて是くの如くの念を作す若し無明の體唯これ一種にして一切のもろ〳〵の衆生に遍せば無明は唯一なり、衆生は衆多なり、斷除すべきこと易し何ぞ敢勞を須ひて修行すべきや、如世間の相を見るに多人一事を作す之を難しとするに足らずとおもうて勤めて修行せず、

かくの如くの懈怠癡の衆生を對治せんと欲ふが爲の故に、如來說いて無量無邊の無明あつて能く佛性を覆ふとのたまふ、此の義を以ての故に一無明の義而も成立することを得、若し爾らば一衆生の煩惱盡くすときの中に餘の一切衆生も皆こと〴〵く亦盡くすべし、所以何となれば、唯一の無明なるが故に若し一人斷ずる時に餘人斷ずること能はずば同一の無明と言ふことを得べからず、また次に衆生界斷絕の過失あるが故にこの事爾らず無明は一なりと雖も相續別なるが故に其の相云何ん、頌に曰く。

譬へば夜闇は一なれども遍く十室の中に到る、一室の闇を滅する時に餘滅すと言ふべからざるが如し。

論じて曰く夜闇は一なりと雖も而も能く遍く十室の中に到る、闇一なれば室一なりと亦言ふべからず、室十なれば闇十なりと亦說くべからず、一室の中に於て人明燈を以て室の中を照らすに闇盡く滅して餘なし、明圓に顯れて遍く一室の中を照らすに闇盡く滅して餘なければ九室の中の闇もと〴〵く滅して餘なしと亦ふべからず、餘の九室の闇具にあつて滅せざれば燈一室を照すに闇滅せずとは亦說くべからず無明煩惱も亦復是くの如し夜闇と云ふは無明に喩ふ、十室といふは衆生の身に喩ふ、明燈といふは智慧に喩ふ、この故に當に知るべし無明は一なりと雖も相續別なるが故に斷と及び不斷と各各不同なり、若し一衆生の煩惱盡くすとき餘のもろ〴〵の衆生斷ずること能はずといふは煩惱未盡の衆生の身中の本覺の佛性は無明の爲に覆はれ、煩惱已盡の衆生の身中の本覺の佛性は無明の所覆已に盡く出離せり、障を離れたる佛性と障へられたる佛性と天殊地別なり、何が故にか今同一の佛性その體を分たずして諸の衆生に徧ずといふや、本覺の佛性は虛空界に等して遍せざるところ無く、至らざるところ無く、通ぜざるところ無く、當らざるところ無し、平等平等一味一相にして差別あること無し、而も無明藏の中の本覺の佛性は染の爲に覆障せられ、法界の外の本覺の佛性は染覆を離れたりといはばこれ俱に攀緣慮知の心現量の境界なり、これ自性中實の理心にあらずこの故に當に知るべし、佛性の理は唯しこれ一種にして等くして差別なし、この故に馬鳴尊者の大宗地玄文本論の中に是くの如くの說を作す。

月輪は千器に顯るれども若し濁水の器あれば現ずれども而も分明なるにあらず、若し淸水の器あれば圓かに顯れて而も明了なり、晦明不同なりと雖も唯し一の滿月輪なり、本覺も亦是くの如し、一切衆生に無始より來た皆本覺あつて捨離する

時なし、何故にか衆生先に成佛するあり、後に成佛するあり、今成佛するあり、亦勤行あり、亦不行あり、亦聰明あり、亦闇鈍ありて無量差別なる、同く一覺あらば皆悉く一時に發心修行して無上道に到るべし、本覺の佛性強劣別の故に是くの如く差別なるか、無明煩惱厚薄別の故に是くの如く差別なるか、若し初めの如くいはば此の事則ち爾らず、所以何となれば本覺の佛性は過恒沙のもろ〳〵の功德を圓滿して增減なきが故に、若し後の如くいはばこの事亦爾らず、所以何となれば一地斷の義成立せざるが故に、是くの如くの種種の無量の差別は皆無明に依て住持することを得、至理の中に於て關ると無し而已、若し是くの如くならば一切の行者一切の惡を斷じ一切の善を修め十地を超え無上地に到つて三身を圓滿し四德を具足す、是くの如くの行者は明とやせん無明か、是くの如くの行者は無明の分位にして明の分位にあらず、若し爾らば淸淨本覺は無始より來た修行を觀たず、他力を得るにあらず性德圓滿し本智具足亦四句を出づ亦五邊を離れたり、自然の言も自然なること能はず淸淨の心も淸淨なること能はず絕離絕離せり是くの如くの本處は無明の邊域にして明の分位にあらず、若し爾らば一法界心は百非に非ず千是を背けり、中にあらず中にあらざれば天と背けり天を背きぬれば演水の談足斷えて止り審慮の量手亡うして住す、是くの如くの一心は明とやせん無明か、是くの如くの一心は無明の邊域にして明の分位にあらず、三自一心摩訶衍の法は一も一なること能はず、能入の一を假る、心も心なること能はず能入の心を假る、實に我の名にあらざれども而も我に目く、亦自の唱にあらざれども自に契へり、我の如く名を立つれども而も實の我にあらず、自の如く唱へを得れども而も實の自にあらず、玄玄として又玄なり、遠遠として又遠なり、是くの如くの勝處は明とやせん無明か、是くの如くの勝處は無明の邊域にして明の分位にあらず、不二摩訶衍の法は唯これ不二摩訶衍の法なり、是くの如くの不二摩訶衍の法は明とやせん無明か、已に有覺門を說きつ。

次に無覺門を說かん、何が故にか一切衆生に本覺あること無きや、本覺無きが故に何が故にか本覺無きや、衆生無きが故に何が故にか衆生無きや本覺無きが故にこの二門を率ゐて廣く通達すべし、本の如し、問うて曰く若し是くの如くの義なら、ば一切衆生に悉く眞如あつて等しく皆熏習す云何なるか有信無信無量前後の差別ある、皆一時に自ら眞如法ありと知て方便を勤修し等しく涅槃に入るべしや、答へて曰く眞如は本より一なれども無量無邊の無明あつて本より已來自性差別に

して厚薄不同なるが故に、過恒河沙等の上煩惱、無明に依て起して差別我見愛染の煩惱、無明に依て起して差別あり、かくの如くの一切の煩惱の無明に依て起すところの前後無量の差別をば唯如來のみ能く知りたまふが故の故に、已に發起問答決疑門を說きつ。

次に擧緣廣說開通門を說かん、この門の中に就いて卽ち二門あり、云何が二とする、一には惣標軌則決定門、二には緣相散示生解門なり、第一の門に於て卽ち三種あり、云何が三とする、一には法體說、二には譬喩說、三には契合說なり、またもろ〳〵の佛法は因あり緣あり因緣具足して乃し成辯することを得とは卽ちこれ法說なり、謂くもろ〳〵の佛法は當に因緣を待て自立の法なし所以何となれば法爾を以ての故に言ふところの因とは本覺の性種なり、言ふところの緣とは權實の別用なり、この二事を以ての故に諸法成立することを得、審に觀察すべし、已に法說を說きつ。

次に喩說を說かん、木中の火性の如きこれ火の正因なり、若し人知ること無く方便を假らずして能く自ら木を燒くと云はば是の處あること無けんが如しとは、卽ちこれ喩說なり、この中の譬喩に則ち四種あり、云何が四とする、一には木喩、二には火喩、三には人喩、四には燒喩なり、言ふところの木とは染法に喩ふ、言ふところの火とは智慧に喩ふ、いふところの人とは衆生に喩ふ、いふところの燒とは對治に喩ふ、第一の譬喩その意云何ん、所謂阿梨羅掩尸木に卽ち五事を具す、云何が五とする、一には根原深固にして能く超過するものなし。二には幹枝花葉乃至菓實に利銛剡を生ず。三には香氣極めて穢れたり。四には毒の虫樂着す。五には眷屬無盡なりこれを名けて五と爲す、無明染法も亦復是くの如し、根本無明は甚深廣大にして能く過ぎたるもの無きが故に、一切種種の枝末不覺迷惑の過失量あることなきが故に、第二の譬喩その意云何ん、所謂伏火に卽ち七事あり、云何が七とする、一には乾亡の義、能く木を枯らし乃し死に至らしむるが故に。二には生長の義、能く寒氣を碍へて生ずることを得しむるが故に。三には莫測の義、所を知らざるが故に。四には隱藏の義、見ること能はざるが故に。五には出現の義、火炎を出すが故に。六には隨有の義、木に隨つて有なるが故に。七には隨無の義、木に隨つて無なるが故に、これを名けて七と爲す。本覺の般若も亦復是くの如し染法を熏習して盡滅に至すが故に熏を受けて流轉するが故に所住の處不思議なるが故に無明藏の中に密に隱沒するが故に、具足して出現すること所餘なきが故に

染の有無に隨つて覺有無なるが故に。

第三の譬喩その意云何ん謂く假人者に三種あるが故に、云何んが二とする、一には婆羅羅利多提假人、二には那尸阿多羅假人なり、彼の第一の人は卽ち五事を知る云何が五事とする、一には出火の木を知り、二には攢轉の木を知り、三には漸頓の時を知り、四には止住のところを知り、五には成就の次でを知る、是れを名けて五と爲す、若し第二の人は此の事を知らざれば終に火を得ず、修行の諸人も亦復是くの如し、亦方便あると方便無きとの故に。

第四の譬喩その意云何ん、謂く火、木を燒くに卽ち三事あり、云何が三とする、一には捨利作鈍の事、謂く火燒き已んぬればもろ〳〵の剡木等害すること能はざるが故に。一には捨異作同の事、謂く鈍に作し已んぬれば都合して灰なるが故に。三には背末還本の事、謂く相を同うし已成ぬれば地と等しきが故にこれを名けて三とす。治道の次第も亦復是くの如し、訓く障を斷ずるが故に、理を證得するが故に、一心に皈するが故に、已に喩說を說きつ。次に合說を說かん、この合說の中に則ち二門あり云何が二とする、一には惣說、二には別說なり、惣說といふは所爲を惣する故に本の如し衆生も亦爾るが故に。別說といふは所爲を別するが故に、この別說、中に卽ち三門あり、云何が三とする、一には緣闕單因無力門、二には因闕單緣無力門、三には因緣具足圓成門なり。緣闕單因無力門とは譬へば木中の火性は本より已來伏藏の火ありと雖も而も方便を假らざれは以て火を得ること無きが如く、是くの如く無明藏中の如來の性は本より已來自性淸淨心ありと雖も而も修行の功を待たざれば以て佛を得ること無きが故に、本の如し、正因熏習の力ありと雖も若し諸佛菩薩善知識等に遇ひたてまつりて之を以て緣とせずして能く自ら煩惱を斷じ涅槃に入らんものは則ち是の處り無けん、故に因闕單緣無力門とは譬へば人あつて方便を具すと雖も而も彼の木中に若し火性なくば終に火を得ざるが如く、是くの如く一切の行者修行の無量の方便を具すと雖も而も衆生の心中に若し本覺の佛なくば終に佛を得ざるが故に、本の如し、若し外緣の力ありと雖も而も內の淨法の未だ熏習の力あらざるものは、亦究竟じて生死の苦を厭ひ涅槃を樂求すること能はざるが故に、因緣具足圓成門とは譬へば木中に火性あり亦方便を具すれば火炎出現して木を燒くに餘なきが如く、因緣具足するものも亦復是くの如し、內の中に本覺の火性あり、外の中に修行の功能を具すれば百行の因を圓かんじ、萬德の果を滿じて三智俱に行じ、四德雙べて開く、本の如し、若し因緣

具足すとは所謂自ら熏習の力あり、又諸佛菩薩等の慈悲願護を爲すが故に能く厭苦の心を起し涅槃ありと信じて善根を修習し善根を修すること成就するを以て則ち諸佛菩薩の示教利喜に値うて乃し能く進んで涅槃の道を趣向するが故に、已に惣標軌則決定門を說きつ。

次に緣相散示生解門を說かん、この門の中に就いて則ち二說あり、云何が二とする、一には惣說、二には別說なり、惣說の中に就いて卽ち二意あり、云何が二とする、一には能緣、二には所緣なり、能緣といふは卽ち應化身なり、能く衆生の爲に成覺の境界を造作するが故に、本の如し、用熏習者の故に。所緣といふは則ち衆生界なり、一切諸佛の所化の徒なるが故に、本の如し、則ちこれ衆生の外緣の力の故に。別說中に就いて卽ち二門あり、云何が二とする、一には有簡擇緣、二には無簡擇緣なり、本の如し、是くの如くの外緣に無量の義あり、略說に二種あり云何が二とする、一には差別緣、二には平等緣の故に、言ふところの有簡擇緣とは卽ち二意あり、云何が二とする、一には能緣の人、二には所緣の境なり、能緣の人とはその分齊云何ん、所謂發心を以て其の初と爲し如來の地を以て其の後と爲して能く此の緣を作る、所緣の境とは其の分齊云何ん、所謂邪定不定の二の衆生に通ずるが故に、復次に正定聚に通ずるが故に、本の如し、差別緣とは此の人は諸佛菩薩等に依て初發意に始めて道を求むる時より乃し佛を得るに至るまでなり、中に於て若しは見、若しは念、或は眷屬父母諸親となり、或は給使と爲り、或は知友となり、或は怨家と爲り、或は四攝を起し乃し一切所作の無量の行緣に至るまで大悲熏習の力を起すを以て能く衆生をして善根若しは見、若しは聞得利益を增長せしむる故の故に、これより已下は善根の已成熟と未成熟との差別を明す、謂く衆生あつて善根已に熟すれば應化の身卽便ち時に應じて速に得度せしめ、亦衆生あつて善根未だ熟せざれば應化の身時節久遠にして得度せしむ、本の如し、この緣に二種あり云何が二とする、一には近緣速に度することを得る故に、二には遠緣久遠に度することを得る故の故に、これより已下は近遠の緣に於て各の二緣を開いて果果の差別の相を顯示す、云何が二とする、一には增因緣、二には增果緣なり、增因緣とは彼の二種の緣は各各に十地萬行を增長するが故に、增果緣とは彼の二種の緣は各各に如來の地に圓滿の果を增長するが故に、本の如し、この近遠二緣を分別するに復た二種あり、云何か二とする、一には增長行緣、二には受道緣の故に、已に有簡擇緣を說きつ、次に無簡擇緣を說かん、この文の中に

就いて卽ち二門あり、云何が二とする、一には惣、二にはこれ別なり、惣說の中に平等緣とは一切諸佛菩薩は皆一切衆生を度脫せんと願ふ、自然に熏習して恒常に捨てずといふは卽ちこれ慈悲願力の緣なり、所謂一切諸佛菩薩は一切時に於き一切處に於て常恒に一切無量のもろ〳〵の衆生の中に熏習して而も能く境と作て伏藏の善根の氣を發起して常に捨てざるが故に、同體智力を以ての故に、見聞すべきに隨つて作業を現ずとは卽ちこれ實行なり、所謂應化の上佛は隨轉自在無碍の力を以ての故に、時に隨ひ處に隨ひ宜しきに隨ひ事に隨ひ樂に隨つて順順如如に八種の利益の業を顯示して衆生を敎化して餘あること無きが故に所謂衆生三昧に依て乃し平等に諸佛を見たてまつることを得る故とは卽ちこれ佛を觀ずる正法を顯示す謂く一切諸佛の衆生界の中に出現したまふこと譬へば角中の毛の如し重重無數なるが不可說劫に於て是くの如く無量無邊ありと雖も而も若し奢摩他を修せざれば終に佛を見ず、この故に發心已去の一切のもろ〳〵の菩薩等は三昧力を以て諸佛法性の身は平等平等にして差別あること無く、同一眞如同一法身なりと觀見して、異をも唯し自と見、我と自と別なること無し、この故に說いて平等見佛故といふ、已に惣說門を說きつ。次に別說門を說かん、この門の中に就いて卽ち二門あり、云何が二とする、一には未入正位、二には已入正位なり、云何が名けて未入正位とする、謂く十信の凡夫と一切の二乘と三賢の菩薩等とは未だ正體智を得ず未だ如理を證せざるが故に、本の如し、この體用熏習を分別するに復二種あり、云何が二とする、一には未相應、謂く凡夫二乘初發意菩薩等は意と意識との熏習を以て信力に依るが故に修行す、未だ無分別心の體と相應することを得ざるが故に、未だ自在業修行の用と相應することを得ざるが故の故に。云何が名けて已入正位とする、謂く十地の菩薩は內に正智を得、外に後智を得て一分の智用如來と等し、唯し本熏力を以て自然に修行して眞如を增長し能く無明を滅するが故に本の如し、二には已相應、謂く法身の菩薩は無分別心を得て諸佛の智用と相應し唯し法力に依て自然に修行して眞如を熏習して無明を滅するが故に、已に分別散說門を說きつ。次に盡不盡別門を說かん、この門は何の義を明さんとする、一切の妄法は道理にあらざるが故に無始無終なり、一切の淨法は道理に契ふが故に有始無終なることを顯示せんと欲ふが爲の故に、復次に眞妄の二法は極めて相違するが故に俱行せざることを顯示せんと欲ふが爲の故に、復次に眞妄二法は勝劣あることなし、其の體相等しうして廣狹あること無く其の作業同な

ることを顯示せんと欲ふが爲の故に、本の如し、復次に染法は無始より來た熏習して斷せず乃し佛を得るに至つて後に則ち斷あり、淨法熏習は則ち未來に斷あることなし、この義に云何ん、眞如の法は常に熏習するを以ての故に妄心則ち滅すれば法身顯現して用熏習を起すが故に斷あるなきが故に。

釋摩訶衍論卷第五終

釋摩訶衍論卷第六

龍樹菩薩造

上より已來は染淨の諸法の相熏相生して斷絶せざるの義決擇分已んぬ、これより已下は分明に生滅門の中の三種の大義を顯示す。

本に曰く復次に眞如の自體相とは一切の凡夫と聲聞と緣覺と菩薩と諸佛とに增減あることなし、前際の生にもあらず、後際の滅にもあらず、畢竟常恆なり、本より已來性に自ら一切の功德を滿足せり、所謂自體に大智慧光明の義あるが故に遍照法界の義の故に、眞實識知の義の故に、自性淸淨心の義の故に、常樂我淨の義の故に、淸凉不變自在の義の故に、是くの如くの過於恒沙を具足す、離せず、斷せず、異ならざる不思議の佛法を乃至滿足して少たるところあること無き故に名けて如來藏と爲す、亦如來法身と名く、問うて曰く、上に說きつる眞如は其體平等にして一切の相を離れたりと、云何が復體に是くの如くの種種の功德ありと說くや。答へて曰く、實にこのもろ〳〵の功德の義ありと雖も差別の相なく等しく同じく一味にして唯し一眞如なり、此の義に云何ぞ分別なく分別の相を離るゝ

を以て是の故に無二なり、また何の義を以て差別を説くことを得る、業識生滅の相に依て示すを以てなり、これ云何が示すや、一切の法は本來唯心にして實に念なし而れども妄心あつて覺らず念を起してもろ〳〵の境界を見るを以ての故に無明と説く、心性起らざるは卽ちこれ大智慧光明の義なるが故に、若し心見を起せば則ち不見の相あり、心性、見を離んぬれば卽ちこれ遍照法界の義の故に、若し心動あれば眞の識知にあらず自性あること無し、常にあらず樂にあらず我にあらず淨にあらず、熟惱衰變して則ち自在にあらず乃至具に過恒沙等の妄染の義あり、この義に對するが故に心性、動なければ過恒沙等のもろ〳〵の淨功德の相義示現することあり、若し心起あつて更に前の法を見て念ずべきもの則ち少たるところあるなり、是くの如くの淨法の無量の功德は卽ちこれ一心にして更に念ずるところ無し、是の故に滿足するを名けて法身如來の藏と爲す。復次に眞如の用とは所謂諸佛如來本因地に在して大慈悲を發しもろ〳〵の波羅蜜を修し衆生を攝化し大誓願を立つること盡く等しく衆生界を度脫せんと欲うて亦刼數を限らず末來を盡くすまでに一切衆生を取ること己身の如くなるを以ての故に、而れども亦衆生の相を取らず、此れ何の義を以て謂く實の如く一切衆生と及び己身と眞如平等なりと知ればなり、是くの如くの大方便智あるを以て無明を除滅し本法身を見、自然に不思議の業種種の用あり、卽ち眞如と等しく一切處に遍せり、又用相の得べきことあること無し、何を以ての故に謂く諸佛如來は唯これ法身なり、智相の身なり、第一義諦にして世諦の境界あること無し、施作を離れたり、但し衆生の見聞に隨つて益を得る故に說いて用と爲す、此の用に二種あり、云何が二とする、一には分別事識に依る、凡夫二乘の心の見る所のものは名けて應身と爲す、轉識の現と知らざるを以ての故に外より來ると見て色の分齊を取て盡く知ること能はざるが故に。二には業識に依る謂くもろ〳〵の菩薩は初發意より乃し菩薩究竟の地に至るまで心の所見なるものを名けて報身と爲す、身に無量の色あつて色に無量の相あり、相に無量の好あり所住の依果にも亦無量種種の莊嚴あり、示現する所に隨つて卽ち邊あること無し、窮盡すべからず分齊の相を離れたり、その所應に隨つて常に能く住持して毀せず失せず是くの如くの功德は皆諸波羅蜜等の無漏の行熏と及び不思議熏との成就する所なるに無量の樂相を具足する故に說いて報身と爲す、又凡夫の所見はこれ其の麁色なり六道の各見不同なる種種の異類に隨つて受樂の相にあるざるが故に說いて應身と爲す。復次に初發意の菩薩等の所見は深

く眞如の法を樂信するを以ての故に少分而も彼の色相莊嚴等のことは來もなく去もなし、分齊を離るゝことを唯し心に依て現じて眞如を離れずと見知す、然れども此の菩薩は猶自分別す、未だ法身の位に入らざるを以ての故に、若し淨心を得れば所見微妙にしてその用轉勝せり、乃至菩薩地盡にこれを見ること究竟せり、若し業識を離れぬれば則ち見相なし、諸佛の法身は彼此の色相迭相に見ることあること無きを以ての故に、問うて曰く若し諸佛の法身は色相を離れたりといふは云何が能く色相を現ぜん、答へて曰く卽ちこの法身はこれ色の體なるが故に能く色を現ず所謂本より已來色心不二なり、色性卽ち智なるを以ての故に色體形なければ說いて智身と名く、智性卽ち色なるを以ての故に說いて法身と名く、一切處に遍じて現ずるところの色は分齊あること無し、心に隨つて能く十方世界は無量の菩薩に無量の報身無量の莊嚴各各差別にして皆分齊無くして相妨せざることを示す、此れは心識の分別の能く知るにあらず、眞如自在用の義なるを以ての故に。

論じて曰く卽ちこの門の中に自ら三門あり、云何が三とする、一には顯示自體大義門、二には顯示自相大義門、三には顯示自用大義門なり、初の大義の中に卽ち二門あり、云何が二とする、一には人平等門、二には時不轉門なり、これを名けて二となす、中の大義の中に卽ち三門あり、云何が三とする、一には圓滿功德門、二には問答決疑門、三には別釋廣說門なりこれを名けて三と爲す、後の大義の中に自ら六門あり、云何が六とする、一には本願無盡門、二には離相不著門、三には能所平等門、四には無相現應門、五には隨見麁細門、六には問答決疑門なりこれを名けて六と爲す、今當に釋を作して其の次第の如く分明に散說すべし、大聰明のもの審に思擇すべし、また次に眞如自體相とは卽ちこれ總じて體相の二義を標す、これより已下は別釋散說なり、初めには體大を說く、云何が名けて人平等門と爲す、謂く眞如の自體は五人に通じて平等平等にして差別なきが故に、云何が名けて五種の假人とする、一には凡夫、二には聲聞、三には緣覺、四には菩薩、五には如來これを名けて五と爲す、是くの如くの五名人は自らこれ五なれども眞は自ら唯一なり、所以何となれば眞如の自體は增減あることなく、亦大小無く亦有無なく亦中邊なく亦古來なし本より已來一自ら一を成し同自ら同を作し異を厭ひ別を捨つ、唯し一眞なるが故にこの故に諸法眞如一相三昧契經の中に是くの如くの說を作す、譬へば金剛をもて五趣の像を作るが如く、五人平等も亦復是

くの如し、諸人の中に於て増減あることなきが故に、本の如し、一切の凡夫と聲聞と緣覺と菩薩と諸佛とに増減あること無し故に云何が名けて時不轉門とする、謂く眞如の自體は、自然常住、決定不變にして三際にも動せず、四相にも遷らず、寂滅の又寂滅、眞實の又眞實なるが故に、本の如し、前際の生にもあらず後際の滅にもあらず畢竟常恒の故に、已に顯示自體大義門を說きつ。次に顯示自相大義門を說かん、圓滿功德門とは、その相云何ん、謂く眞體の中には一切の功德を圓滿して少けたるところなきが故に、何等の功德ぞ、所謂六種性義の功德なり、云何が六とする、一には大智慧光明の義、本覺の般若は能く無明の闇夜を除くが故に契經の中に於て廣大圓滿殊勝般若實智光明性義と名く。二には遍照法界の義、本覺の般若は一法界の源を照達するが故に、契經の中に於ては周遍通達一法界藏自然性義と名く。三には眞實識知の義、本覺の般若は虛假の解量を遠離する故に契經の中に於ては離妄想解決定了知實際實性性義と名く。四には自性淸淨心の義、本覺の般若は無量の性功德自然本有にして他力を得るにあらず塵累を遠離して中實に契ふが故に契經の中に於ては本有明白離邊中中性義と名く。五には常樂我淨の義、本始の二覺は無始より來た四鄭を遠離して四種の自然の德を圓滿するが故に、契經の中に於ては如來正覺自然德遠離炎幻不修行性義と名く。六には淸涼不變自在の義、二種の本覺は譬へば明鏡の南北の相の隨と違とを具する如くなるが故に、契經の中に於ては具足隨順逆違無碍陀羅尼全遍性義と名く、これを名けて六となす、本の如し、本より已來唯し性に自ら一切の功德を滿足せり、所謂自體に大智慧光明の義あり故に遍照法界の義の故に、眞實識知の義の故に、自性淸淨心の義の故に、常樂我淨の義の故に、淸涼不變自在の義の故に、廣大圓滿自性本德契經中に是くの如くの說を作す、自性の功德の本數の名に十七ありとは初の二の中に於て各二種を開き、次の二の中に於て各三種を開き、後の二の中に於て其の次第の如く四と三とを開くが故に、また次に淸淨心地無垢陀羅尼契經の中に是くの如くの說を作す、自性の功德の本數の名に二十五ありとは最後の一の中に十一を開くが故に是くの如くの三數の別相云何ん、馬鳴菩薩の摩訶衍論の本數の名字は名略義廣の總持の相を顯示せんと欲ふが爲めの故に、是の故に散を攝して惣立して六と爲す、また次に所依の別本惣持して說くが故に、また次に名字數多なれば眞實に迷ふが故に此の義を以ての故に惣立して六と爲す、十七といふは名字云何ん、一には大智慧の義、二には大光明の義、三には遍一法界の義、

四には照一法界の義、五には眞實の義、六には識の義、七には知の義、八には自性の義、九には清淨の義、十には心の義、十一には常の義、十二には樂の義、十三には我の義、十四には淨の義、十五には不の義、十六には變の義、十七には自在の義なり、これを十七と名く。二十五といふは名字云何ん、所謂前の數の不の功德の中に八種を開くが故に、變の功德の中に二種を開くが故に、二變といふは一には上流轉變、二には下流轉變なり、八不といふは中觀論の中に分明に說くが如し、已に有名數量功德分を說きつ。次に無名過量功德分を說かん、本覺體の中の自性の功德無量無邊にして言量を離れ心行をも過ぎたり、何の義を以ての故にか數量を止めて是くの如くの剖を作すや、本有の功德は量ることあることなしと雖も三數に出でず、故に本を擧ぐのみ、本の如し、是くの如くの過於恒沙を具するが故に、是くの如くの無量無邊の功德は各各別別に體相ありや、唯し一心量にして別の法體無く、唯し一心量にして終に心を離れず、所以何となれば心法は一なりと雖も而も二種の陀羅尼自在の用あるが故に、云何が二とする、一には自離彼陀羅尼自在、二には彼不離自陀羅尼自在なり、これを名けて二と爲す、本の如し不離の故に、是くの如くの性德は無始より已來た一向妙有にして除遣の法に非ず、所以何となれば自性自性にして他と俱なるにあらざるが故に、本の如し、不斷の故に、是くの如くの一切の功德は唯一の自なれば一となる、終に自に異ならば一と作ること能はじ所以何となれば一法界の故に、本の如し不異の故に是くの如くの深理は一切の菩薩一切の二乘一切の凡夫にも思惟せず言にも論量せず、絕の又絕、遠の又遠なり、本の如し、不思議の故に、三人境にあらずば當に何れの人の言思の境界ぞや唯し大覺者のみ乃し自ら軌則としたまふ、本の如し、佛法の故に是くの如くの無量の性の功德は具縛地より乃し無上大覺智地に至るまで具足圓滿して少闕たるところなし、所以何となれば是くの如くの諸德は無始より來た自然本有なり緣力を假て而も建立するにあらざるが故に本の如し、乃至滿足して少けたるところあること無き故に名けて如來藏と爲す、亦如來法身と名くる故に已に圓滿功德門を說きつ。次に問答決疑門を說かん、この門の中に就いて卽ち二門あり云何が二と爲る、一には發起略問難違門、二には發起廣答解釋門なり、問者の難の意その相云何ん、謂く說文相違前後の雜亂を擧げて其の理を審にするが故に、前後の文云何んが相違する、所謂眞如決擇分の中に是くの如くの說を作して心眞如とは卽ちこれ一法界大總相法門體なり、所謂心性は不生不滅なり、一切の諸法は唯妄

念に依て而も差別あり若し心念を離れぬれば則ち一切の境界の相も無し、是の故に一切の法は本より已來言說の相を離れ名字の相を離れたり、心緣の相を離れて畢竟平等、變異あること無し破壞すべからず、唯これ一心の故に名けて眞如といひ、自相大義決擇分の中に是くの如くの說を作して本より已來性に自ら一切の功德を滿足せり、所謂自體に大智慧光明の義あり故に遍照法界の義の故に、眞實識知の義の故に、自性淨心の義の故に、常樂我淨の義の故に、淸涼不變自在の義の故に是くの如くの過於恒沙の不離不斷不異不思議の佛法を具足す乃至滿足して少けたるところあることなき義の故に名けて如來藏と爲す、亦名けて如來法身といふ、是くの如く相違するが故に以て難を爲す、本の如し、問うて曰く上に說きつ眞如は其の體平等にして一切の相を離れたり云何がまた體に是くの如くの種種の功德ありと說くや、故に已に發起略問難違門を說きつ。次に發起廣答解釋門を說かん、この門の中に就いて卽ち二門あり云何が二とする一には是總、二には是別なり、總門の中に於て卽ち二種あり云何が二とする、一は眞如總、二には生滅總なり、その次第の如く說相見つべし、答へて曰く實にこのもろ〳〵の功德の義ありと雖も而も差別の相なく等しく同く一味にして唯し一眞如とは卽ちこれ眞如總なり、謂く自相大義門の中に是くの如くの說を作して種種の德を具して恒沙に過ぎたりと雖も而もこれ生滅門の界量なり、眞如門にはあらず眞如門の中には差別の相無く平等平等一相一味にして、獨眞如淨法界を存するが故に此の義を以ての故に相違の過無し、これより已下は其の緣由を作して疑惑を決斷し分別無く分別の相を離るゝを以て、この故に無二無二とは眞如門の中には唯し同同のみあつて異異なきが故に、これより已下は生滅總を釋す、この文の中に於て卽ち二種あり云何が二とする、一には是問、二には是答、廣略あるが故に二重の問答不同なること知んぬべし、初重の問答其の相云何ん、また何の義を以てか差別と說くことを得るとは卽ち是れ開問なり、謂く若し諸法は本より以來平等平等一味一相にして獨眞理を存して二體なしといふは復何れの法の而も非平等なるあつてか之を以て依と爲して差別を建立せんと、卽ちこれ異門を擧げて以て異門を疑ふ。これより已下は以て答說を發起して此の疑を決斷す、文相見つべし、業識生滅の相に依り示すを以てなりとは卽ちこれ惣答なり謂く眞如門の中には過恒沙の一切の染法の以て所治とする無く、能治の過於恒沙の一切の淨法の以て對量とする無し、この故に眞如門の中に是くの如くの說を作して一切の諸法は平等平等一味一相にし

て、二體あること無し等といふは、而も此の生滅門の中には所治の染法無量無邊なれば能治の淨法も亦無量無邊なり、この故に生滅門の中に是くの如くの說を作して本覺の體の中に種々の德を具して無量無邊にして恒沙に過ぎたり等といふは卽ちこれ大意なり、次に當に釋を作して別々に散說すべし、言ふところの依とは卽ちこれ根本無明住地なり、一切の染法の所依なるが故に、言ふところの業とは卽ちこれ業相なり、いふ所の識とは轉等の諸識なり生滅相とは門の惣稱なり、言ふところの示とは相返して顯示す、この中の以の字は遠流して三字に至るべし、是くの如くの三法は功德の起る當に緣由なるべきが故に已に略說分を說きつ。次に廣說分を說かん、この分の中に就いて卽ち二種あり、云何が二とする、一には是問、二には是答なり、是の中には問は略し答は廣せること知んぬべし。これ云何んぞ示とは卽ちこれ詰問なり所謂その所由を詰問するが故に、これより已下は直にこの問ひを答す、この答釋の中に卽ち三種あり、云何が三と爲す、一には自宗正理、二には非道邪行、三には具擧對量なり、これを名けて三と爲す、その次第の如く說相觀つべし、一切の法は本來唯心にして實に念に無ければ卽ちこれ第一の自宗正理なり、所謂法性は無始より來た唯しこれ一心にして一一の法として而も心にあらざることなきが故に而も妄心あつて覺らず念を起してもろ〳〵の境界を見るを以ての故に、無明と說くは卽ちこれ第二の非道邪行なり、所謂惣じて本上のもろ〳〵の無明住地を擧ぐるが故に、これより已下は直に具擧對量の差別を顯す、如上所說の本覺の體の中の六相の功德は各々に何等の過患に待觀してか之を以て對と爲して建立し顯示する所謂根本無明、一心の海を熏習して業等の種々の諸識を發起し般若實智の明を隱覆して愚痴迷亂の暗を增長す、卽ちこれ不覺無明の界量なれば明これを以て對と爲す、一心の性の寂滅にして起なきは卽ちこれ本覺慧明の安立德なるが故に建立し顯示す、本の如し、心性に起なし卽ちこれ大智慧光明の義の故に。これより已下は第二の德を顯はす文相見つべし、是くの如く妄心、見を起し境に達するは一向唯し虛妄の境の中に轉じて眞實の境界に通達すること能はず、所以何となれば眞僞相違して契當せざるが故に、本の如し若し見を起せば不見の相あるが故に。これより已下は遍觀の義を明す、而して眞實心は轉見を離れたるが故に諸法を通達して至らざるところなく、當らざるところなく、盡くさゞるところなし、所以何となれば眞實智の見は能見所見の邊見を離れたるが故に、本の如し、心性、見を離んぬれば卽ちこれ遍照法界の義なるが故の故

に。これより已下は第三の德を明す所謂若し心に動轉の相あるは卽ちこれ無明習の氣なるが故に、虛妄の轉なるは明これを以て對とす、心性〔以〕靜にして喧動あること無く、正直にして顚倒の解あることなきは卽ちこれ實智の照なり、道理に隨順して倒なきをもて建立し顯示す、本の如し、若し心動あれば眞識の智にあらざるが故に。これより已下は第四の德を顯す、所謂妄法は無始より來た自體なければ明これを以て對と爲して自性淸淨の本有の功德建立し顯示す、本の如し、自性あることなきが故に。これより已下は第五の德を顯す所謂妄法は四相に遷さるゝが故に常にあらず三種の苦俱に轉ずるが故に樂にあらず二種の自在なきが故に我にあらず一道淸淨なきが故に淨にあらず此の四種の過を以て對量と爲して本覺體の中の四種の功德建立し顯示す、本の如し、常にあらず樂にあらず我にあらず淨にあらざるが故に。此れより已下は第六の德を顯す、所謂妄法は眞心を燒く故に、この故に熱と名く、又これもろ〳〵の衆生を惱亂するを以ての故にこの故に惱と名く、變壞を破滅して作さゞらしむるが故に、この故に衰變なり、この事に由るが故に一切衆生は自在を得ず、この故に亦名けて不自在と爲す、この事を待觀して以て對とするが故に淸涼不變自在の德建立し顯示す、本の如し、熱惱衰變して則ち自在ならざる故に。これより已下は無邊の功德の相の義を顯示す、所謂若し所對治の染法無量無數なれば能治の淨法も亦無量無邊なるを以ての故に、本の如し、乃至具に過恒沙等の妄染の義あり、この義に對するが故に心性、動なければ過恒沙等のもろ〳〵の淨功德の相義示現あるが故に。これより已下は圓滿の德を結す、所謂若し一心の法に動轉の相あつて更に前の境を見て緣すべきあらば能見の心、所見の境二つ差別の故に本覺の功德則ち圓滿せず而して本性の德、恒沙に過ぎたりと雖も唯一心量にして終に二體なし、所以何となれば是くの如くの諸德悉く皆各々にその體を分たず一法界に於て其の量等しきが故に、この故に圓滿自性の功德は結縛解脫の二位の中に常恒に具足するを名けて法身と爲し、如來藏と名く、本の如し若し、心起あつて更に前の法を見て念ずべきをば則ち少けたるところあるなり、是くの如くの淨法の無量の功德は卽ちこれ一心にして更に念ずるところ無し、この故に滿足するを名けて法身如來の藏と爲す故に、染淨の數量の平等の決擇は何れの契經に依てか解釋せらるゝや、所謂文殊師利善行方便相似譬喩大陀羅尼經なり、彼の契經の中に如何んが說くや、謂く彼の經の中に是くの如くの說を作す、その時に文殊師利、佛の神力を承けて卽ち嗢吒南の頌を說いて曰

く。

譬へば阿只多遮那尸帝樹の如く、その菓は多きこと無數にして表實に十等あるか染淨の數量の等しき亦是くの如く知るべし、行者この喩に依て眞妄の理を了すべし。

今この經文は何の義を明さんとするか假へば當に實を待ち眞定めて妄に賴るべし獨孤自立の法あることなきことを顯示せんと欲ふが爲の故に、いふところの表とは何れの法にか喩ふる、謂く妄法に喩ふ、妄は假にして實なきこと菓の外の如くなるが故に、言ふ所の實とは何れの法にか喩ふる、謂く眞法に喩ふ、眞は實にして假なきこと菓の中の如くなるが故に、云何が名けて十種の等とするや、一には數等表實契當して其の數等しきが故に、二には塵等表實細未の其の數量を配するに等うして差なきが故に、三には量等表實稱量するに終に差別無うして輕重等しきが故に、四には色等表實挾量するに同く白色なるが故に、五には香等表實熏習すること其の香等しきが故に、六には味等表實嚴食するに差別なきが故に、七には觸等表實身に觸るゝに等うして別なきが故に、八には本等表實同く樹木に依て出づるが故に、九には俱等表實一時にして前後なきが故に、十には同等表實終に一味なるが故にこれを十等と名く喩を擧げて法に合すること說相明なるが故に重釋を須ひず。また次に若し鈍根のもの此の事に達せざれば功德黑暗の譬喩に依て等の意を知るべし、已に顯示自相大義門を說きつ。

次に顯示自用大義門を說かん、この中に六門あり、其の次第の如く審に觀察すべし、本願無盡門といふは淸淨の僧那阿世耶廣大圓滿にして邊際なきが故に、謂くもろ〳〵の如來無量無邊不可思議不可稱量微塵劫の中に於て十方世界の微塵數量の大慈悲心海を興し十方世界の微塵數量の大圓滿因海を修し、十方世界の微塵數量の一切衆生海を攝し十方世界の微塵數量の廣大の誓願海を立て、十方世界の微塵數量の大自在果海を成ずるが故に、所以何となれば實の如く同一無異相續の義を知るを以ての故に、本の如し、復次に眞如の用とは所謂諸佛如來は本因地に在して大慈悲を發し諸の波羅蜜を修し衆生を攝化し大誓願を立つること盡く等しく衆生界を度脫せんと欲うて亦劫數を限らず未來を盡くすまでに一切衆生を取ること已身の如くなるを以ての故の故に、已に本願無盡門を說きつ、次に離相不着門を說かん、離相不着門といふは所作の中に於て所作を遠離して著を生ぜざるが故に、謂くもろ〳〵の如來は無量無邊の大悲を發して一切恒沙の衆生を攝化したま

ふと雖も而も諸の如來一一佛として而も生を攝したまふこと無きが故に、所以何となれば實の如く一切衆生と及び自身とは唯一眞如唯一法身にして增減あること無く差別なしと了知したまふが故に、本の如し、而れども亦衆生の相を取らずこれ何の義を以て謂く實の如く一切衆生と及び己身と眞如平等なるを知るが故に、已に離相不著門を說きつ。次に能所平等門を說かん、能所平等門といふは人法體用理智平等にして差別なきが故に謂く法身應化の三身及び實實假假の二理平等一體にして差別なきが故に自性の本身及び枝末の身平等一體にして差別なきが故に能證の正智と所證の如理と平等一體にして差別なきが故に、一體を以ての故に二體あること無し二體なきが故に亦一體なし、二も無く一も無ければ亦無も無し耳、この義を以ての故に自然本性に功德を具足して他力を假らず甚染極妙契經の中に是くの如くの說を作す、爾の時に文殊師利卽ち佛に白して言さく云何が名けて異異相と爲し、云何が名けて同同相と爲る、佛の言はく言ふところの異異異相とは卽ちこれ無明なり、言ふ所の同同相とは卽ちこれ明法なり、是くの如くの二法は牛の兩角の如し、對治の相にして消融の體の兩つ空絕せるが如くにはあらず、この故にこの二法を名けて非觀僞と爲す、於是に文殊師利、佛の神力を承けて卽ち座より起ちて佛に白して言さく、世尊云何が名けて非觀僞の法とする、其の相說くべしや說くべからずや、何を以てか門となして覺知すべきや、その時に世尊卽ち文殊師利に告げて言はく我れ諸の一切の契經海の中に是くの如くの說を作す、異とは無明、同とは明法なり、愚痴の凡夫を度脫せんと欲ふが爲に權にこの說を作す、而も今日汝が爲に眞實を言說せん、文殊師利、いふところの非觀僞の法とは異を同じて同に歸し、同を同じて空に歸し、空を空じて絕に歸す、乃至廣說の故に、本の如し、是くの如くの大方便智あるを以て無明を除滅し本法身を見、自然に不思議の業種種の用あり、卽ち眞如と一切處に等遍せり、故に已に能所平等門を說きつ。次に無相現應門を說かん、無相現應門といふは自性身の體は空寂にして像なけれども能くもろ〳〵の像を現ずること譬へば兎角の自體は空無なれども善能く一切の角を出生するが如くなるが故に、謂く法身の佛は唯しこれ一一なり、唯しこれ寂寂なり亦一一にあらず亦寂寂にあらず心行處滅し言語道斷せり、滅を滅し、斷を斷じて唯し阿、阿を作すが故に、所以何となれば諸佛如來は唯し自自の身にして他身なきが故に、而ももろ〳〵の衆生見聞して益を得ることは自心量の中に利益を獲得す、法身の體の中には開くこと有ること無きが故に、本の

如し、又亦用相の得べきことあることなし、何を以ての故に謂く諸佛如來は唯これ法身智相の身なり、第一義諦にして世諦の境界あること無し施作を離れたり、但し衆生の見聞に隨つて益を得るが故に說いて用の爲の故に、已に無相現應門を說きつゝ。次に隨見麁細門を說かん、此の門の中に就いて卽ち二門あり云何が二とする、一には應身用相差別門、二には報身用相差別門なり、初門云何ん所謂一切の凡夫二乘は一切の諸法は唯一心の量甚深宗なりと了達すること能はざるが故に、遍分別妄想事識に依て應化身を見、外の量解を作す、分界あることなしと通達することを能はずして轉ずるが故に、本の如し、此の用に二種あり云何が二とする、一には分別事識に依る、凡夫二乘の心の見るところは名けて應身と爲す、轉識の現と知らざるを以ての故に外より來ると見て色の分齊を取つて盡く知ること能はざるが故の故に、次の門云何ん謂ゆる解より乃し金剛に至るまで一切の菩薩は明了に一切の諸法は唯一心量の甚深の宗なりと通達するが故に、彼の業識に依て報身の佛を見、唯識の解を作す、依正分際なしと通達するが故に、本の如し、二には業識に依る謂くもろ〳〵の菩薩は初發意より乃し菩薩究竟の地に至るまで心の所見なるものを名けて報身と爲す、身に無量の色あり、色に無量の相あり、相に無量の好あり、所住依果にも亦無量種種の莊嚴あり、示現する所に隨つて卽ち邊あること無し窮盡すべからず分際を離れたり、其の所應に隨つて常に能く住持して毀せず失せざるが故に、これより已下は報應の差別の相を顯示す、いふところの報とは勝妙の因を具し極樂の果を受けて自然自在決定安樂にして苦相を遠離するが故に名けて報と爲す、本の如し、是くの如くの功德は皆諸波羅蜜等の無漏の行熏と及び不思議熏との成就する所なるに由て無量の樂相を具足する故に說いて報身と爲す、故に言ふ所の應身とは機根に隨順して而も相違せず時に隨ひ處に隨ひ趣に隨ひ出現して安樂の相にあらざるが故に名けて應と爲す、本の如し、又凡夫の所見とはこれその麁色なり、六道の各見不同なるに種種の異類に隨つて受樂の相にあらざるが故に說いて應身と爲す、故にこれより以下は更に重釋を作して前の所說を明す、所謂位位各各に佛を見ること增減別なるが故に此の義云何ん、若し三賢位の諸菩薩は眞如を信ずるが故に分に報身を見、色相の無分際の量を觀知すれども而もこの菩薩は分別の心を離脫することを能はず、所以何となれば未だ眞如の位に入ることを得ざるを以ての故に、本の如し、また次に初發意の菩薩等の所見は深く眞如の法を樂信するを以ての故に少分にして而も彼の色相莊嚴等の事は

來も無く去も無く分齊を離れて唯し心に依て現ず眞如を離れずと見知す、然れどもこの菩薩は猶自分別して未だ法身位に入らざるを以ての故の故に、若し十地を得るもろ〳〵の菩薩は其の次第の如く轉勝し究竟す、本の如し、若し淨心を得れば見るところ微妙にして其の用轉勝せり、乃至菩薩地に盡く之を見ること究竟の故に若し佛果の中には業識の本種所有なきが故に能見所見亦復空無なり、所以何となれば一切の諸佛は眞如と眞如と平等平等なり、法身と法身と平等平等なり、此くの如く彼も無く我も無く、他も無く大も無く小も無く高も無く下も無く、无も無く有も無し、戲論都盡して慮知亦空なり、唯一大空の眞如本智のみ遮伽利娑那提衣於鍵尸多陀摩宮に服し自性身に坐して獨存して無二なるが故に、本の如し、若し業識を離るれば則ち見相無し諸佛の法身は彼此の色相迭相に見ることあること無を以ての故の故に、何が故にか應身章の中に是くの如くの說を作して分別事識に依て而も彼の佛を見るといひ、報身章の中に是くの如くの說を作して業識に依て而も彼の佛を見るといふは識の麁細に隨つて所見の佛身隨つて麁細なることを顯示せんと欲ふが爲の故に、已に隨見麁細門を說きつ。次に問答決疑門を說かんこれに於て二あり、云何が二とする、一には是問、二には是答なり、答說分の中に即ち五門あり、云何が五とする、一には法身出現色相門、二には顯示智身形相門、三には顯示法身形相門、四には廣大圓滿無際門、五には不可思議殊勝門なりこれを名けて五と爲す、其の次第の如く說相觀つべし、問者の意樂その相云何ん所謂問者かくの如くの疑を作す、その法身眞實の自體に尅すれば湛湛として慮絕し寂寂として名斷えたり、色相作業誰に由てか而もあらん、無相現應決擇分の中に是くの如くの說を作して法身は無相なれども能く色相を現ずといふ、若し能く種種の色相を出現せば法身は空寂にして色像の域を離れたりと言說すべからず是くの如く疑ふが故に此の問ひを發起す、本の如し、問うて曰く若し諸佛の法身は色相を離れたりと云ふは云何が能く色相を現ぜん故に、これより已下は即ちこの疑を決す。法身出現色相門といふは自性法身は能く色相の爲に所依止と作て善く色相を出すに障礙なきが故に所以何となれば能依の色法と所依の心法とは無始より來た平等平等にして二體あるなし、唯一心量の故に、本の如し。答へて曰く即ちこの法身はこれ色の體なるが故に色を現ず所謂本より已來色心不二の故に顯示智身形相門といふは智を以て色を攝するに一一の色として智にあらざること無きが故に說いて智身と名く本の如し、色性即ち智なるを以ての故に色體形なけ

れば說いて智身と名く故に顯示法身形相門と言ふは色を以て智を攝するに一一の智として色にあらざることなきが故に說いて法身と名く本の如し、智性卽ち色なるを以ての故に說いて法身と名く故に廣大圓滿無際門といふは是くの如くの二身所現の色相は一切衆生界と一切の虛空界と一切涅槃界と一切如來界との中に等遍して通せざるところなく、至らざるところなし、亦分際なく亦障礙なく、純一純一にして相亂るるなきが故に本の如し、一切處に遍じて現ずるところの色分際あることなし、心に隨つて能く十方世界の無量の菩薩に無量の報身無量の莊嚴各各差別にして皆分際なく相妨げざることを示す故に、不可思議殊勝門といふは此くの如くの業用は甚深極妙にして獨尊殊勝なり、凡夫二乘の能く知るところにあらざるが故に、本の如し、此れは心識の分別の能く知るにあらず、眞如自在用の義なるを以ての故の故に、是くの如くの三種の甚深の大義、三種の門の中には云何が安立するか、謂く眞如門の中の三種の大義は唯し各一を立つ、雙立なきが故に、若し生滅門の中の三種の大義は三種の大義具足して雙立す、前後なきが故に之を以て別と爲す、この故に大印陀羅網譬喩契經の中に是くの如くの說を作す、

體大の義のみあつて相及び用なし、相大の義のみあつて體及び用なし、用大の義のみあつて體及び相なし、是くの如くの三大は第一の一のみあつて第二の一なし、また次に體大の義あれば當に相用あるべし、相大の義あれば當に體用あるべし、用大の義あれば當に體相あるべし、是くの如くの三大第一の一に隨つて第二の一あり相捨離せざるが故に、餘の種種の相は結總持決擇分の中に自ら當に理明かなるべし。已に顯示三種大義門を說きつ、次に門自入門破異門を說かん。

本に曰く復次に生滅門より眞如門に入ることを顯示す、所謂五陰の色と心と六塵の境界とを推求するに畢竟じて無念なり、心に形相なし、十方に之を求むるに終に不可得なり、人の迷へるが如きを以ての故に、東を謂うて西と爲し、方は實に轉せず衆生も亦爾なり、無相の迷ひの故に心を謂うて念と爲す、心は實に動せざるなり、若し能く觀察して心は起なしと知んぬれば卽ち隨順して眞如門に入ることを得るが故に。

論じて曰く今この論文は何の義を明さんとする、廣狹と大小とのもろ〳〵の異執とを對治せんと欲ふが爲の故に、云何か異執、謂く衆生あつて是くの如くの說を作す、一法界心はこれ其の本法なり亦は廣亦は大なり、眞妄二門はこれ其の末法

なり、亦は狹亦は小なりと此の執著を對治せんと欲ふが爲の故に是くの如くの說を作す、門も亦所入なり、本と量等しと、復次に眞如門の中には有爲の法の差別の相なきことを顯示せんと欲ふが爲の故に、復次に五陰を空ずる智も所空の陰の如く自體空無なり、この能空所空皆空なるを以て眞如平等の門に入ることを爲すことを顯示せんと欲ふが爲の故に、復次に生滅門は假なり、眞如門は實なることを顯示せんと欲ふが爲の故に本の如し、復次に生滅門より卽ち眞如門に入ることを顯示す、所謂五陰の色と心と六塵の境界とを推求するに畢竟じて無念なり、心に形相なし十方に之を求むるに終に不可得を以ての故に、何の義を以ての故にか譬喩門の中に東方を覺に喩へ、西方を念に喩ふる、本覺の般若を顯示せんと欲ふが爲に淸淨智慧の光明を出現して幽冥生死の暗夜を照耀すること譬へば日輪の出現し已訖つて淨光明を發して世間の闇を破するが如く無明住地種種染法の眷屬を出生して、無量の無漏の性淸淨の慧明を隱覆すること、譬へば日輪の隱沒し已訖つて大暗夜を發して分別了知の淸淨の眼を覆ひ障ふるが如くなることを、故に本の如し、人の迷へるが如く故に東を謂うて西と爲し、方は實に轉せず衆生も亦爾なり、無明の迷の故に心を謂うて念と爲す、心は實に不動の故に、これより已下は得益の相を明す、謂く衆生あつて心法は能起所起の別相あることなしと了知しぬれば、卽ち眞如隨順を成就することを得、卽ち眞如得入を成就することを得、隨順あることなければ得入無きが故に、本の如し、若し能く觀察して心は起なしと知んぬれば卽ち隨順して眞如門に入ることを得るが故の故に、已に門自入門破異門を說きつ、次に對治邪執正解門を說かん。

本に曰く對治邪執とは一切の邪執は皆我見に依る、若し我を離んぬれば則ち邪執なし、この我見に二種あり、云何が二とする、一には人我見、二には法我見なり、人我見とはもろ〳〵の凡夫に依る、說くに五種あり、云何が五とする、一には修多羅に如來の法身は畢竟寂寞なること猶し虛空の如しと說くを聞く、著を破せんが爲と知らざるを以ての故に、卽ち虛空はこれ如來の性なりと謂へり、云何が對治する、虛空の相はこれ其の妄法なり體無にして不實なり、色に對するを以ての故にこの可見の相あつて心をして生滅せしむ、一切の色法は本より來たこれ心なるを以て實に外色なし若し色無くんば虛空の相もなけん、所謂一切の境界は唯心なれども妄起の故に有なり、若し心妄動を離んぬれば則ち一切の境界滅し、唯一眞心にして遍せざるところ無し、これを如來廣大性智究竟の義といふ、虛空の

相の如くにはあらずと明すが故に。二には修多羅に世間の諸法は畢竟じて體空なり乃至涅槃眞如の法も亦畢竟じて空なり、本より已來自空にして一切の相を離れたりと說くを聞く、著を破せんが爲と知らざるを以ての故に卽ち眞如涅槃の性は唯しこれ其れ空なりと謂へり、云何が對治する、眞如法身は自體不空にして無量の性功德を具足すと明すが故に。三には修多羅に如來の藏は增減あること無し體に一切の功德の法を備へたりと說くを聞いて解せざるを以ての故に如來の藏に色心の法の自相差別ありと謂へり、云何が對治する、唯し眞如の義に依て說くが故に、生滅の染の義に因て示現して差別を說くを以ての故に。四には修多羅に一切の世間の生死の染法は皆如來藏に依て而も有なり一切の諸法は眞如を離れずと說くを聞いて解せざるを以ての故に如來藏の自體に具に一切世間の生死等の法ありと謂へり、云何が對治する、如來藏は本より已來唯し過恒沙等のもろ〳〵の淨功德の不離不斷不異の眞如の義のみあるを以ての故に、過恒沙等の煩惱染法は唯し是れ妄有にして性自ら本無なり、無始世より來た未だ曾て如來藏と相應せざるを以ての故に、若し如來藏の體に妄法あり而も證會せしめて永く妄を息むといふは則ち是の處りなし、五には修多羅に如來の藏に依るが故に生死あり、如來の藏に依るが故に涅槃を得と說くを聞いて解せざるを以ての故に、衆生始めありと謂ひ、始めを見るを以ての故に復如來所得の涅槃にも其の終盡あつて還つて衆生と作ると謂へり、云何が對治する、如來藏は前際無きを以ての故に無明の相も亦始めあること無し、若し三界の外に更に衆生始めて起ることありと說かば卽ちこれ外道の經說なり、又如來藏は後際あること無し、諸佛所得の涅槃もこれと相應して則ち後際なきが故に。法我見とは二乘の鈍根に依るが故に、如來但し爲に人無我を說きたまふ、說いて究竟せざるを以て五陰生滅の法ありと見て生死を怖畏して妄に涅槃を取る、云何が對治する、五陰の法は自性不生にして則ち滅あること無し、本より來た涅槃なるを以ての故に、復次に究竟妄執を離ると、當に知るべし染法淨法は皆悉く相待せり自相として說くべきことあること無し、是の故に一切の法は本より已來色にあらず心にあらず識にあらず有にあらず無にあらず畢竟して不可說の相なり、而も言說あるものは當に知るべし、如來善巧の方便なり、假りて言說を以て衆生を引導す、その旨趣は皆念を離れて眞如に歸せしめんが爲めなり、一切の法を念ずれば心をして生滅せしめ實智に入らざるを以ての故に。論じて曰く卽ちこの文の中に自ら四門あり、云何が四とする、一には顯示根本

惣相門、二には顯示人見對治門、三には顯示法見對治門、四には顯示俱非絶離門なり、これを名けて四と爲す、顯示根本惣相門といふは無量無邊の過恒沙數の一切の邪道と無量無邊の過恒沙數の一切の定執とは皆我見を以て自所依と爲す、出生し增長して更に餘あることなし、此の邪執の爲に根本と作るが故に、この故に無明住地無邊際契經の中に是くの如くの說を作す、一切無量の種種の虛妄邪論の海は我見の岳を以て依と爲して而も轉ず、譬へば一切の無量無邊の種種の林樹種種の草木は皆悉く山を以て依と爲して而も轉ずるが如くなるが故に、本の如し、對治邪執とは一切の邪執は皆我見に依り若し我を離るれば則ち邪執なし、此の我見に二種あり、云何が二とする、一には人我見、二には法我見の故に、已に顯示根本惣相門を說きつ。次に顯示人見對治門を說かん、顯示人見對治門と言ふは、直に邪定聚と及び不定聚との一切の凡夫の謬執の過失を對治して勝妙の解を生せしめんが爲の故に、五種の人見して治障の別相は文相明かなるが故に、重釋を須ひず、復た次に大要無きが故に本の如し、人我見とは諸の凡夫に依て說くに五種あり、乃至廣說、又如來藏は後際あること無し諸佛所得の涅槃もこれと相應して則ら後際なきが故の故に、已に顯示人見對治門を說きつ。次に顯示法見對治門を說かん、顯示法見對治門と言ふは直に二乘の衆生の實有の過失を對治して法空の大理を成就することを得しめんが爲の故に、二種の法見の治障の別相は文相明かなるが故に重釋を須ひず、本の如し、法我見とは二乘の鈍根に依るが故に如來但爲に人無我を說きたまふ、乃至廣說則ち滅あること無し、本來涅槃なる故に已に顯示法見對治門を說きつ。次に顯示俱非絶離門を說かん、顯示俱非絶離門といふは若し衆生あつて二執を除遣して二空を證得すれば諸法は言語道斷し心行處滅し斷を斷じて照寂し、滅を滅して慮止して達する所なしと通達するが故に本の如し、また次に究竟して妄執を離るるは當に知るべし染法淨法皆悉く相待して自相として說くべきことあること無し、この故に一切の法は本より已來色にあらず、心にあらず、智にあらず、識にあらず、有にあらず、無にあらず、畢竟じて不可說の相なり、乃至廣說、心をして生滅せしめて實智に入らざる故の故に。

釋摩訶衍論卷第六 終

釋摩訶衍論卷第七

龍樹菩薩造

已に對治邪執正解門を說きつ。次に分別發趣道相門を說かん、本に曰く。

分別發趣道相とは謂く一切諸佛所證の道に一切の菩薩發心修行し趣向する義の故に略して發心を說くに三種あり、云何が三とする、一には信成就發心、二には解行發心、三には證發心なり、信成就發心とは何等の人により何等の行を修してか信成就することを得て發心に堪能なる、所謂不定聚の衆生に依る善根を熏習する力あるが故に業果報を信じて能く十善を起し、生死の苦を厭うて無上菩提を求めんと欲ひ、諸佛に値ひたてまつることを得て親承し供養して信心を修行し一萬劫を逕て信心成就するが故に諸佛菩薩敎へて發心せしめ、或は大悲を以ての故に能く自ら發心し或は正法の滅せんと欲するに因て護法の因緣を以て能く自ら發心す、是くの如く信心成就して發心を得るものは正定聚に入つて畢竟して退せざれば如來種の中の正因に住して相應すと名く。若し衆生あり善根微少にして久遠より已來煩惱深厚なれば佛に値うて亦供養することを得と雖も然も人天の種子を起し

或は二乘の種子を起す、設ひ大乘を求むるものあれども根則ち不定なり、若しは進み、若しは退く、或は諸佛を供養することあれば未だ一萬劫を逕て中らず、緣に遇うて亦發心することあり、所謂佛の色相を見て而も其の心を發し或は衆僧を供養するに因て其の心を發し、或は二乘の人の敎令に因て發心し、或は他に學んで發心す、是くの如く等の發心はことゞくく皆不定なり、惡の因緣に遇へば或は便ち退失して二乘地に墮す。また次に信成就發心とは何等の心をか發す、略して說くに三種あり、云何が三とする、一には直心正しく眞如の法を念ずるが故に、二には深心樂つて一切のもろゝの善行を集むるが故に、三には大悲心、一切衆生の苦を拔かんと欲ふが故に。問うて曰く上には法界一相佛體無二と說く、何が故に唯し眞如を念ぜずして復諸善の行を求學することを假る。答へて曰く譬へば大摩尼寶は體性明淨なれども而も鑛穢の垢あり、若し人寶性を念ずと雖も方便を以て種種に磨鍊せざれば終に淨を得ることなきが如し、是くの如く衆生の眞如の法は體性空淨なれども而も無量の煩惱の染垢あり、若し人眞如を念ずと雖も方便を以て種種に修習せざれば亦垢を以て淨を得ることなし、無量無邊にして一切の法に遍ずるを一切の善行を修して以て對治と爲す、若し人一切の善法を修行す

れば、自然に眞如の法に歸順するが故に、略して方便を說くに四種あり、云何が四とする、一には行根本方便、謂く一切の法は因緣和合して業果失せずと觀じて大悲を起しもろ〳〵の福德を修し衆生を攝化して涅槃に住せず、法性の無住に隨順するを以ての故に。二には能止の方便、謂く慚愧して過を悔い能く一切の惡を止めて增長せざらしむ、法性の諸過を離れたるを隨順するを以ての故に。三には善根を發起して方便を增長す、謂く懃に三寶を供養し禮拜し讃歎し隨喜し諸佛を勸請す、三寶を愛敬する淳厚の心を以ての故に信を增長することを得、乃し能く無上の道を志求す、又佛法僧の力に護らるゝに由るが故に能く業障を消して善根を退せず法性の癡障を離れたるに隨順するを以ての故に。四には大願平等方便所謂願を發して未來を盡くし一切衆生を化度して餘あることなからしめ、皆無餘涅槃に畢竟せしむ、法性の斷絕なきに隨順するを以ての故に、法性は廣大にして一切衆生に遍じて平等無二なり彼此を念ぜず究竟寂滅の故に菩薩この心を發すが故に則ち少分法身を見ることを得、法身を見るを以ての故に其の願力に隨つて能く八種を現じて衆生を利益す、所謂兜率天より退し入胎し住胎し出胎し出家し成道し法輪を轉じ涅槃に入る、然して是の菩薩をば未だ法身と名けず、その過去無量世より來たの有漏の業未だ決斷することは能はざるを以て其の所生に隨つて微細の苦と相應す、亦業繫にあらず大願自在力あるを以ての故に修多羅の中に或は惡趣に退墮するありと說くが如きは、それ實退にあらず、但し初學の菩薩の未だ正位に入らず懈怠なるものを恐怖し勇猛ならしめんが爲の故に、又この菩薩は一たび發心して後に怯弱を遠離し畢竟して二乘地に墮せんことを畏れず若し無量無邊阿僧祇劫に懃苦難行して乃し涅槃を得と聞けども亦怯弱せず、一切の法は本より已來自ら涅槃なりと信知するを以ての故に、解行發心とは當に知るべし轉勝なり、是くの如くの菩薩初め正信より已來第一阿僧祇劫に於て將に滿せんと欲するを以ての故に、眞如の法の中に於て深解の現前して所修に相を離る、法性は體に慳貪なしと知るを以ての故に、隨順して檀波羅蜜を修行す、法性は無染にして五欲の過を離れたりと知るを以ての故に、隨順して尸羅波羅蜜を修行す、法性は無苦にして嗔惱を離れたりと知るを以ての故に、隨順して羼提波羅蜜を修行す、法性は身心の相なくして慢怠を離れたりと知るを以ての故に隨順して毘梨耶波羅蜜を修行す、法性は常定にして體に亂なしと知るを以ての故に、隨順して禪波羅蜜を修行す、

法性は體明にして無明を離れたりと知るを以ての故に、隨順して般若波羅蜜を修行す、證發心とは淨心地より乃し菩薩究竟地に至るまで何れの境界をか證する所謂眞如なり、轉識に依るを以て說いて境界と爲す、而も此の證とは境界あることと無し唯し眞如智を名けて法身と爲す。この菩薩一念の項に於て能く十方無餘の世界に至つて諸佛を供養し轉法輪を請す、唯し衆生を開導し利益することを爲すは文字のみに依らず、或は地を超えて速に正覺を成ずることを示すことは怯弱の衆生の爲にするを以ての故に、或は我れ無量阿僧祇劫に於て當に佛道を成すべしと說くことは懈慢の衆生の爲にするを以ての故に、能く是くの如くの無數の方便を示すこと不可思議なり、而も實には菩薩種性根等しく發心則ち等しく所證亦等しく超過の法あることなし、一切の菩薩皆三阿僧祇劫を逕るを以ての故に、但し衆生世界不同なるに隨つて見聞するところあり、根欲性異なり、故に所行を示すに亦差別あり、又この菩薩の發心の相とは三種の心微細の相あり、云何が三とする、一には眞心無分別の故に、二には方便心自然に遍行して衆生を利するが故に、三には業識心微細に起滅するが故に、又この菩薩は功德成滿して色究竟處に於て一切世間最高大の身を示す、謂く一念相應の慧を以て無明頓に盡くすを一切種智と名く、自然に而も不思議の業あつて能く十方に現じ衆生を利益す、問うて曰く虛空無邊の故に世界も無邊なり、世界無邊の故に衆生も無邊なり、衆生無邊の故に心行の差別も亦復無邊なり、かくの如くの境界分齊すべからず、知りがたく解りがたし、若し無明斷ずれば心相あることなし、云何が能く了するを一切種智と名くる。答へて曰く一切の境界は本より來た一心にして相念を離れたり、衆生安に境界を見るを以ての故に心に分齊あり、安に想念を起して法性に稱はざるを以ての故に了知すること能はず、諸佛如來は見想を離れて遍せざるところなし、心眞實なるが故に、卽ちこれ諸法の性なり、自體に一切の妄法を顯照す、大智用無量の方便あつて、もろ〳〵の衆生の解を得べきところに隨つて皆能く種種の法義を開示す。この故に一切種智と名くることを得。又問うて曰く若し諸佛に自然の業あつて能く一切處に現じて衆生を利益せば一切衆生若しは其の身を見、若しは神變を覩、若しは其の說を聞いて利を得ざるなかるべし、云何が世間多く見ること能はざるや。答へて曰く諸佛如來の法身は平等に一切處に遍じて作意あることなきが故に自然と說く、但し衆生の心に依て衆生の心を現ずるは猶し鏡の如し、鏡若し垢あれば色像現せず、かくの如く衆生の心に若し垢あれば法身現せざ

るが故に。

論じて曰く卽ちこの文の中に自ら二門あり、云何が二とする、一には惣標惣說門、二には別釋散說門なり、これを名けて二とす、第二の門の中に自ら三門あり、云何が三とする、一には三種發心分剖門、二には發起問答決疑門、三には因論生論問答門なり、これを名けて三と爲す、說相觀つべし、惣標惣說門といふは卽ち此の分別發趣道相門の中には無量無邊の三世の諸佛の所誓の願海と所行の因海と所證の果海と所化の徒海とに無量無邊の三世一切の諸菩薩衆の是くの如く是くの如く如如に隨踐し順行して轉ずべきこと其の次第の如く數量を超えず位地を過ぎず趣入する義を顯示せんと欲ふが爲めの故に、復次に一切の佛の趣向なき則の如く一切の菩薩も彼の趣向あることなき則の中に於て如如に行ずることを顯示せんと欲ふが爲の故に、本の如し、分別發趣道相とは謂く一切諸佛の所證の道一切菩薩の發心し修行し趣向する義なるが故に、已に惣標惣說門を說きつ。次に別釋散說門を說かん、この中に三門ありその次第の如く審に思擇すべし、第一の三種發心分剖門の中に就いて卽ち三種あるが故に自ら三種の門あり、云何が三とする、一には信成就發心門、二には解行發心門、三には證得發心門なり、これを名けて三となす、本の如し、略して發心を說くに三種あり、云何が三と爲す、一には信成就發心、二には解行發心、三には證發心の故に、初門の中に就いて卽ち三門あり、云何が三とする、一には發起開問惣標門、二には顯示答釋廣說門、三には發起問答決疑門なり。これを名けて三と爲す、第一二の門に二種の重あり審に觀察すべし、第一の發起開問惣標門の中に就いて卽ち四の意あり、云何が四とする、一には假者意、能修の人を問ふが故に。二には行相意、所修の行を問ふが故に。三には自分意、成就を得ることを問ふが故に。四には向上意、勝進の相を問ふが故に。これを名けて四とす、本の如し、信成就發心とは何等の人に依り、何等の行を修してか信成就を得て發心を堪能するや、已に發起開問惣標門を說きつ。次に顯示答釋廣說門を說かん、此の門の中に就いて卽ち二門あり、云何が二とする、一には隨門次第答釋門、二には擧劣顯勝生解門なり、これを名けて二と爲す。隨門次第答釋門の中に就いて卽ち六門あり、云何が六とする、一には顯示修行假者門、二には自然本有熏習門、三には顯示修行功德門、四には信心成就時量門、五には顯示發心因緣門、六には顯示得益位勝門なり、これを名けて六と爲す、顯示修行假者門といふは、謂く所化の衆生は無量無邊なりと雖も而も今この處の

中には且く不定聚攝の十信の衆生を取るが故に、所以何となれば不定聚の三品の衆生を化して十種の信心を具足し成就せしめ決定して十住の菩薩の初發心住の金剛不變の位の中に安立せしめんと欲ふが爲の故に、本の如し、所謂不定聚の衆生に依るが故に。自然本有熏習門といふは、謂くかくの如くの衆生の相續の中に無始世より來た常に本覺藏の佛あつて衆生の善根を常恒に熏習して增長せしむるが故に本の如し、善根を熏習する力あるが故の故に。顯示修行功德門といふは、謂く不定聚の種種の衆生は因業果報の似有不空因緣和合の道理を信ずるが故に、十惡の過失を知て不應作の意を起し、十善の功德を觀じて當應作の意を起して繫縛地を厭ひ解脫の域を求めて漸漸に出離して菩提に向ふが故に、本の如し、業果報を信じて能く十善を起して生死の苦を厭ひ上菩提を求めんと欲ふ、諸佛に値ふことを得て親承し供養して信心を修行するに。信心成就時量門といふは謂く其の信心成就の時節の遠近の差別の相を顯示するが故に卽ちこの門の中に十五の契經各各に異說せり、云何が名けて十五の異說とする、一には一切諸法因緣無主契經の中に是くの如くの說を作す、その時に文殊師利卽ち佛に白して言さく、尊者、具縛地より不定聚に入る一切の行者は幾くの時節を經てか十種の信心具足し成就して漸漸に轉勝して不退の位定まる。於是尊者文殊師利に告げて言はく、善男子諦に聽き諦に聽き善く思ひ之を念せよ、我れ當に汝が爲に信成の時節の分際を解說すべし、善男子一切の行者具縛地より不定聚に入て一萬三千劫を經已訖て卽便ち十種の信心を成就して菩薩の初發心住に決定す。二には攝無量大乘契經の中に是くの如くの說を作す、また次に佛子信地の假名の菩薩は六萬四千劫量已に滿じて卽便ち十愛樂の心を成就して金剛地に定まる。三には惠明陀羅尼契經の中に是くの如くの說を作す、不定聚の衆生は多く八萬一千五十劫を經已訖て信心成就して不退に決定す。四には法門名字契經の中に是くの如くの說を作す、また次に信樂地の位の毛頭の凡夫は二萬六千劫を經已訖て便ち信成就して闕失する所なし。五には清淨三昧契經の中に是くの如くの說を作す、若し衆生あつて難角地に入て信心を修行せば當に九萬劫を滿足し已訖て信品成就すべし。六には金剛陀羅尼契經の中に是くの如くの說を作す、信成就の量は四萬八千六十劫量なり。七には大智慧光明契經の中に是くの如くの說を作す。また次に善男子若し衆生あつて功德善根の父母天地を成就せんと欲ふが爲には當に十刹那量を經已訖つて卽便ち信地平坦にして草なかるべし。八には實相本際決定不動契經の中に是くの如くの說

を作す、信位成就するとは信心の發起する初刹那の中に十種の信心具足し圓滿す。九には文殊師利圓滿因海大悋持契經の中に是くの如くの說を作す、三阿僧祇の大無量劫を經過し已訖つて卽便ち信位具足し成立す。十には甚深菩提因緣契經の中に是くの如くの說を作す信地を建立することは唯し三萬劫なり。十一には大方便智善巧契經の中に是くの如くの說を作す、信行の菩薩は九千劫量に成就して淸淨の信心を決定し、その思極樂なり。十二には菩薩光明遍照契經の中に是くの如くの說を作す、その時に金剛惠菩薩摩訶薩卽ち佛に白して言さく、世尊無上菩提の初めの種子地は幾くの時節を經てか決定淳熟して菩提の芽を出生し增長する。佛の言はく若し初めの種子地を成就せんが爲には當に七萬五千六十劫を經て初めの種子地を具足し建立すべし。十三には授記平等契經の中に是くの如くの說を作す、信心成就することは遠にあらず近にあらず無にあらず有にあらず高にあらず下にあらず本にあらず末にあらず去にあらず來にあらず大にあらず小にあらず三世にあらず非三世にあらず位にあらず地にあらず善にあらず惡にあらず是にあらず非にあらず言語道斷心行處滅せり、この故に名けて眞實信心と爲す。十四には如來藏本識契經の中に是くの如くの說を作す、その時に地藏菩薩摩訶薩卽ち佛に白して言さく、世尊云何が名けて廣大圓滿功德父母信地品とするや、佛の言はく十信の十信、十解の十信、十行の十信、十向の十信、十地の十信、佛地の十信乃至具縛惡種子地及び一切の二乘に皆悉く十信あり、無量無邊の一切の諸法、一一の法として十信にあらざること無し、此の義を以ての故に名けて廣大圓滿信地と爲す。十五には菩薩瓔珞大本業契經の中に是くの如くの說を作す、信相の菩薩は十千劫に於て十戒の法を行じて信成就の處に決定し安立す、これを十五の異說の契經と名く、此の如くの諸經は何の義を以ての故にか是くの如く差別なる、謂く衆生の心無量無邊にして各差別なるが故に其の心品に隨つて信の行相を說く是くの如く不同なり、審に思擇すべし、今この文の中には且く本業に依て解釋すまく而已、本の如し、一萬劫を選信心成就する故の故に。顯示發心因緣門と言ふは謂く已に信心成就せる行者第一住の心を發起せんと欲ふが爲には當に緣力を待て發起すべきが故に此の文の中に於て自ら三種あり、云何が三とする、一には勸請の因緣、二には救度の因緣、三には護法の因緣なり、これを名けて三となす、勸請の因緣といふは所謂無量無邊の一切の諸佛及び大菩薩衆種種の勝妙の敎法の契經の海を出現し信位の行者を勸請し敎化して不定地を超え不動の域

に決定し安立せしむるが故に本の如し諸佛菩薩敎へて發心せしむるが故に。救度の因緣といふは所謂無量無邊の種種の衆生の一切の苦海を緣じて之を以て因となして金剛不退廣大淸淨の大慈悲心を發起するが故に本の如し或は大悲を以ての故に能く自發心の故に。護法の因緣といふは所謂諸佛の敎法の破滅せんと欲する時種種の方便を以て宜しきに隨ひ、應に隨ひ當るに隨ひ、時に隨ひ、處に隨ひ、身命を惜まずして佛法を救護する大因緣の力の故に自ら能く金剛不退廣大淸淨の大久住の心を發起するが故に本の如し、或は正法の滅せんとするに因て護法の因緣を以て能く自ら發心の故に。顯示得益位勝門といふは所謂信成就して解を得る行者は十名を具足して退失なきが故に、云何が十となす。一には名けて無憂惱人と爲す退還して凡夫の縛煩惱地に墮する怖畏の心を遠離するが故に。二には名けて大富貴の人と爲して煩惱の荒穢を蠲除して涅槃の菓を收藏するが故に。三には名けて種性高勝人と爲す凡夫の下劣の種を遠離して已に如來の尊高の種性の中に入るが故に。四には名けて手足具人と爲す、般若の炬を執つて法界廣大の庭に遊行するが故に。五には名けて作大江水人と爲す無碍に直に薩婆若の大海の中に流入するが故に。六には名けて宮殿建立の人と爲す已に不定を超えて決定して如來家の中に安住するが故に。七には名けて眞實佛子の人と爲す、凡胎を遠離して已に聖胎に入るが故に。八には名けて大福田の人と爲す、煩惱を出離して獨淸淨なるが故に。九には名けて徒衆無量の人と爲す、法界の衆生を皆ことごとく以て自眷屬とするが故に。十には名けて無障碍の人と爲す、心に隨つて轉ずるが故に

これを名けて十と爲す、本の如し、是くの如く信心成就して發心を得るもの正定聚に入り畢竟じて退せざるを、如來種の中に住して正因と相應すと名くるなり、故に已に隨問次第答釋門を說きつ。次に擧劣顯勝生解門を說かん、この門の中に就いて卽ち二門あり云何が二とする、一には擧劣顯劣形相門、二には擧勝顯勝形相門といふは所謂善根微薄にして煩惱深厚なる凡夫の衆生は摩訶衍の因緣に値ふと雖も而も小善根の種子を起すが故に本の如し若し衆生善根微少にして久遠より已來煩惱深厚なるは佛に値うて亦供養することを得と雖も然も人天の種子を起し、或は二乘の種子を起す故に。擧勝顯勝形相門といふは所謂若し衆生摩訶衍の甚深微妙の法門を求むることあれども其の心卽便ち決定すること能はず順の因緣に値へば悅忽として若は進み逆の因緣に遇へば自然に若しは退して定心なきが故に本の如し設ひ大乘を求むるものあつて根

則ち不定にして若しは進み若しは退く故に、若し定まること能はざれば云何が名けて勝高の人とするや。定まること能はずと雖も而も望む所の法極めて勝高なるが故に、また次に妄に天人二乘の種子を起すが故に。これより巳下は信心成就の定時なきことを顯示し、十四經の意を解釋す、所謂若し衆生、諸佛を供養することあれば信心成就すること其の時不定なり、或は極極に遠く、或は極極に近く、或は中間の故に所以何となれば緣の有無に隨つて信熟生するが故に本の如し、或は諸佛を供養することあるもの未だ一萬劫を逕ず中に於て緣に遇ふ亦發心することあるが故に。これより巳下は別釋を造作して發心の因緣の相を顯示す、この文の中に於て卽ち四種の發心の因緣あり、云何が四とする、一には見佛の因緣、如來妙色の身を見るに因て而も能く廣大の心を發す、二には供僧の因緣、種種の具を以て衆僧を供養す此色相を見てその心を發す故に。三には聞法の因緣、二乘の人の敎法を見聞して其の劣の因緣に因て而も能く廣大の心を發起するが故に、本の如し、或は衆僧を供養するに因てその心を發すが故に。四には慚愧の因緣、二乘の人の敎法を見聞して其の劣なることを慚愧す此の因緣に因て而も能く廣大の心を發起するが故に、本の如し、或は二乘の人の敎令に因て心を發すが故に。四には隨兼の因緣隨他の兼心なり、

此の因緣に因て而も能く廣大の心を發起するが故に、本の如し、或は他に學んで心を發すが故に。これを名けて四とす。これより巳下はその因緣を作して十種の信心の不定聚の形相を顯示し及び前の所說の十信の決釋分を惣結す、何の義を以ての故にか十種の信品に不定の稱を立る、所謂若し順當の因緣に値へば隨つて善趣に向ひ若し逆違の因緣に遇へば惡道に趣くべし、譬へば輕毛の風に隨つて吹かれて東西に轉ずるが如くなるが故に本の如し是くの如く等の發心は悉く皆不定なり惡因緣に遇へば或は便ち退失して二乘地に墮すが故に。巳に第一重の二種の門を說きつ。次に第二重の二種の門を說かん。また次に信成就發心といふは、何等の心を發すとは卽ちこれ發起開問惣標門なり、謂く開問を發して惣じて所爲を問ふが故に、略說に三種ありとは卽ちこれ惣じて惣答を標す、云何が三とするとは卽ちこれ惣じて惣門を擧ぐ、此れより巳下は直に顯示答釋廣說門を明す、この門の中に就いて卽ち三種あり、云何が三とする、一には正智方便門、二には福德具足門、三には安樂成就門なり、これを名けて三と爲す、この三が中に於て初めは二利に通ず、中は唯し自利の後は唯し利他なり、また次に初の二は唯し自利の分、後の一は利他なり、復次に三ツ皆二に通ずるが故に皆ことゞく各各に標釋を具足せ

り、審に思擇すべし。正智方便門といふは直心なり。正體智のための有作の方便なるが故に、本の如し、一には直心正しく眞如の法を念ずるが故の故に、福德具足門といふは深心なり一切の功德の爲の有住の方便なるが故に、本の如し、二には深心樂んで一切のもろ〳〵の善行を集むるが故の故に、安樂成就門といふは悲心なり、能く一切衆生の無量の苦惱を救度して安穩廣大の樂みを得しむるが故に、本の如し。三には大悲心、一切衆生の苦を拔せんと欲ふが故の故に、已に第二重の二種の門を說きつ。次に發起問答決疑門を說かん、この門の中について卽ち二門あり、云何が二とする、一には前後相違難問門、二には開通會釋消難門なり、これを名けて二とす、前後相違難問門といふは謂く上下の二文の相違をあげて其の差別の相を難ずるが故に、云何が相違する、謂く上の文の中に是の如くの說を作して言ふ所の覺義とは謂く心體は念相を離れたり、念相を離るゝものは虛空界に等し法界一相として遍せざるところなし、卽ちこれ如來平等の法身なり、この法身に依て說いて名けて本覺といひ、下の文の中に於いて是くの如くの說を作して、二には深心樂んで一切のもろ〳〵の善行を集るが故といふ、上下の二文是くの如く相違せり、是の故に問ひを發して其の異相を難ず審に思擇すべし、已に前後相違難問門を說きつ。次に開通會釋消難門を說かん、この門の中に就いて卽ち七門あり云何が七とする、一は正答決斷彼難門、二には修善行者得益門、三には修行善巧方便門、四には顯示發心功德門、五には簡擇上下顯異門、六には通契經文決疑門、七には讚歎發心功德門なり、これを名けて七と爲す。初門の中に就いて卽ち三門あり、云何が三とする、一は開示譬喩善巧門、二には合說契當安立門、三には顯示法說生解門なり、これを名けて三と爲す、譬喩門の中に就いて卽ち四種あり云何が四とする、一には寶喩、二には性淨喩、三には垢染喩、四には人衆喩なり、これを名けて四とす、寶喩といふは謂く卽ち大摩尼珠の寶なり、是くの如くの珠寶は當に何れの處にかあるべき、是くの如くの珠寶その色如何ん、謂く深黃色なり、その身の形相當に如何んぞや、謂く方坐の如し長短なきが故に大小の相その量如何ん、謂く一丈なるが故に、かくの如くの珠寶はもろ〳〵の黃石の中に皆悉く具足して黃石として摩尼なきは有ることなし、其の止住の相次第如何ん、謂く第一には珠、第二には黃金、第三には石體なり、此の摩尼珠一丈量ならば彼の諸の黃石或は極小なるあり或は極大なるあり各各差別なり豈皆一切に遍ずといふことを得べけんや。此の

摩尼珠に殊勝の力あつて一丈量なりと雖も遍じて大中小の中に於て餘無く障碍するところなし、亦一切處に遍ずと說くことを得べし、彼の石の中に於てこの寶を有するが故に、その石の色黃なり、審に觀察すべし、これを寶喩と名く、本の如し、答へて曰く譬へば大摩尼寶の如きが故に。性淨喩といふは是くの如くの珠寶はその體性甚だ極明白にして塵累を遠離するが故にこれを名けて性淨喩と爲す本の如し體性明白の故に、垢染喩といふは是くの如くの珠寶は能く金石等の爲に障へられて明白の相を出現すること能はざるが故に、これを名けて垢染喩と爲す本の如し鑛穢の垢ある故に。人衆喩といふは謂く極めて窮貧にして極めて懈怠なるが故に寶を求めざる人と並に及び精進にして寶を樂求する人との故にこれを名けて人衆喩と爲す、本の如し、若し人寶性を念ずと雖も方便を以て種種に磨鍊せざれば終に淨を得ること無きが故に、已に開示譬喩善巧門を說きつ。次に合說契當安立門を說かん、寶喩の中に大摩尼珠といふ、當に何れの法にか喩ふべき、本覺の佛性に喩ふるが故に、所以何となれば本覺の佛性は衆生の相續の身中に隱藏せられて彼の珠に似たるが故に、黃石といふは當に何れの法にか喩ふべき一切衆生の相續に喩ふるが故に、所以何となればもろ〳〵の衆生の身に佛性を藏し裹むこと彼の石に似たるが故に。色黃といふは當に何れの法にか喩ふべき、彼の佛性の不變の義に喩ふるが故に、所以何となれば眞如佛性は堅固不改なること彼の金に似たるが故に、方坐の如くして長短なしといふは當に何れの法にか喩ふべき、眞如の法の平等にして增減なきに喩ふるが故に所以何となれば此の眞如の法は一味平等にして差別あることなきこと彼の坐に似たるが故に、一丈といふは當に何れの法にか喩ふべき、眞如の法の具足圓滿して闕失なきに喩ふるが故に所以何となれば眞如法身は萬德を具足して闕失するところなきこと彼の丈に似たるが故に、是くの如くの珠寶諸の黃石中に皆ことゞく具足して黃石として摩尼なきはあることなしと言ふは、當に何れの法にか喩ふべき、眞如の性のもろ〳〵の衆生の種種の身中に遍じて衆生として眞如本覺の性なきはあることなきに喩ふるが故に、所以何となれば此の眞如の性は不遍の過を離れたること彼の珠に似たるが故に第一には珠、第二には黃金、第三には石體といふは當に何れの法にか喩ふべき、俱有の次第の法の漸漸に麁現するに喩ふるが故に、所以何となれば本覺智より流轉して四相の海を建立するとき其の次第の如く漸漸に麁現すること彼の三に似たるが故に、此の摩尼珠に殊勝の力あつて一丈量なりと雖も大中小の中に遍じて

餘なしと言ふは當に何れの法にか喩ふべき、眞如本覺に不思議の業あつて蚊龍等の大小の身の中に遍じて妨難なきに喩ふるが故に、所以何となればこの眞如の法はその性平等にして凡聖の中に遍ずること彼の珠に似たるが故に、彼の石の中に於て此の寶を有するが故に、その石の色黄なりといふは當に何れの法にか喩ふべき、もろ〳〵の衆生ことぐく本覺あれば心相あるに喩ふるが故に、所以何となれば一切衆生に覺心あるが故に了別識あること彼の石に似たるが故に、已に寶喩合說契當門を說かん、是くの如くの珠寶は其の體性甚極明白にして塵累を遠離するといふは、當に何れの法にか喩ふべき、性淨本覺の淸淨明白にして垢を離れたるに喩ふるが故に、已に淨喩合說契當門を說きつ。次に染喩合說契當門を說かん、是くの如くの珠寶は能く金石等の爲に障へられて明白の相を出現すること能はずといふは當に何れの法にか喩ふべき、自性淸淨心の無明の爲に隱覆せられて無漏の性德を出現すること能はざるに喩ふるが故に已に染喩合說契當門を說きつ。次に人喩合說契當門を說かん、二種の人といふは當に何れの法にか喩ふべき、佛の法寶を求めて極精進する人と極懈怠の人とに喩ふるが故に、本の如し、是くの如くの衆生の故に已に合說契當安立門を說きつ。次に顯示法說生解門を說かん。この門の中に於て其の次第の如く法說合喩して行者の解を生ずること審に思釋すべし、文相明なるが故に別釋を須ひず、本の如し、眞如の法體の性は空淨なれども無量の煩惱の染垢あり、若し人眞如を念ずと雖も方便を以て種種に修習せざれば亦淨を得ることなし、垢無量無邊にして一切の法に逼せるを以て、一切の善行を修するを以て對治と爲す故に、已に正答次斷彼難門を說きつ。次に修善行者得益門を說かん、謂く若し衆生あつて一切の惡を斷じ一切の善を修すれば自然自在に眞如の珠を得、無明の闇夜を照達して疑畏するところなきが故に、本の如し、若し人一切の善法を修行すれば自然に眞如の法に歸順するが故の故に、已に修善行者得益門を說きつ。次に修行善巧方便門を說かん、この門の中に就いて故に四門あり、云何が四とする、一には一切修行根本門、二には制伏惡業不生門、三には出生善根增長門、四には誓願無邊平等門なり。これを名けて四と爲す、本の如し、略して方便を說くに四種あるが故に第一の門の中に就いて卽ち二門あり、云何が二とする、一は般若成就無住門、二には大悲成就無住門なり、これを名けて二と爲す、般若成就無住門といふは所謂一切の諸法は本より已來不生不滅畢竟寂滅にして皆所有なしと觀察して生死に住

せざるが故に、本の如し、云何が四とする、一には行根本方便謂く一切の法は自性無性なりと觀じて妄見を離れて生死に住せざるが故に、大悲成就無住門といふは所謂一切の諸法は因緣和合の故に因果空しからず業報また有なりと、無量無邊の衆生海を緣じて究竟して取攝せんが爲に涅槃に住せざるが故に、本の如し、一切の法は因緣和合して業果失せずと觀じて大悲を起し、もろ〳〵の福德を修し衆生を攝化して涅槃に住まらざるが故に、法性の無住に隨順するを以ての故にとは卽ちこれ緣を示し及び兩種の不住道の行を結す、修行の法門、量あることなしと雖も而も不住の道それ最も根本なり、この故に說いて行根本方便といふ、已に一切修行根本門を說きつ。次に制伏惡業不生門を說かん、この門は何の義をか明さんとする、行者當に慚愧等の淸淨の心品を發起して一切無量の惡作を防止し漸漸に損減して增長せしめざることを顯示せんと欲ふが爲の故に、本の如し、二には能止の方便謂く慚愧して過を悔い能く一切の惡を止めて增長せしめざる故に、法性に隨順するを以て諸過を離るる故とは惣じてその緣を結す、已に制伏惡業不生門を說きつ。次に出生善根增長門を說かん、この門は何の義をか明さんとする、行者當に一切の三寶を恭敬供養禮拜讚歎隨喜勸請して信心を增長し業障を消除して無上大菩提を志求することを顯示せんと欲ふが爲の故に、本の如し、三には善根を發起して方便を增長し謂く勤めて三寶を供養禮拜し諸佛を讚歎し隨喜し勸請するなり、三寶を愛敬する淳厚の心を以ての故に信增長することを得て乃し能く無上の道を志求す、又佛法僧の力に護らるゝに因るが故に能く業障を消す善根を退せざるが故に、法性に隨順するを以て痴障を離るゝが故にとは惣じて其の緣を結す已に出生善根增長門を說きつ。次に誓願無邊平等門を說かん、この門は何の義をか明さんとする、行者當に十方世界の塵數の廣大の誓願海を發起し、十方世界の塵數の行因海を修習し、十方世界の塵數の衆生海を攝取し、十方世界の塵數の果滿海を成就して一切皆ことゞく餘あること無きことを顯示せんと欲ふが爲の故に、本の如し、四には大願平等方便所謂願を發し未來を盡して一切衆生を化度するに餘あることなからしめて皆無餘涅槃を究竟せしむるが故に、法性の斷絕なきに隨順するを以ての故とは總じて其の緣を結す、これより已下は隨順殊勝の相を顯示す、何の義を以ての故にか四門結の中に皆ことゞく通じて隨順法性し名くる、法性の虛空はその體性廣大圓滿にして邊際あること無く、その相用無碍自在にして始終あることなし、彼の四門を修する一切の行者も亦復是くの如

し、順順如如にその阿世耶廣大圓滿にして分際なきことを顯示せんと欲ふが爲の故に本の如し、法性は廣大にして一切衆生に遍じて平等無二なり、彼此を念せず究竟寂滅故の故に、已に修行善巧方便門を說きつ。次に顯示發心功德門を說かん、此の文は何の義をか明さんとする、初發心住の菩薩は法界性の中に隨順する廣大圓滿の心を起すが故に相似の觀智、法性身を見る、法性身を見るが故に、願力自在なり、願力に由るが故に無量無邊の法界の衆生を緣じて而も大悲心を起す大悲心極めて甚深なるに由るが故に八種の安樂の化相を出現して時に隨ひ、處に隨ひ、宜しきに隨ひ、應に隨ひ、順順如如利益し安樂することを顯示せんと欲ふが爲の故に、本の如し、菩薩この心を發すが故に則ち少分、法身を見ることを得、法身を見るを以ての故に其の願力に隨ひ能く八種を現じて衆生を利益す所謂兜率天より退ると入胎と住胎と出胎と出家と成道と轉法輪と涅槃に入るとなり、故に已に顯示發心功德門を說きつ。次に簡擇上下顯異門を說かん、この門の中に就いて卽ち二門あり、云何が二とする、一には簡異地上門、二には簡異具縛門なり、これを名けて二と爲す、簡異地上門といふは謂く發心住の菩薩をば唯し幻化影相の身と名く、眞如法身の菩薩と名くることを得ざるが故に、所以何となれば此の菩薩は無始の餘業猶し未だ出離せざれば受生の處に隨つて微細の苦と相應して離れず地上の菩薩はこれと相違するが故に、本の如し、然もこの菩薩をば未だ法身とは名けず、其過去無量世より來た有漏の業未だ決斷すること能はず、其の所生に隨つて微細の苦と相應するが故の故に、簡異具縛門といふは所謂初發心住の菩薩は繫縛俱轉の業因の相無く、繫縛受生果報なきが故に、所以何となれば大願の方便を具足して轉ずるが故に、本の如し、亦業繫にあらず大願自在力あるを以ての故に已に簡擇上下顯異門を說きつ。次に通契經文決疑門を說かん。此の門の中に就いて自ら五種の各說の契經あり、云何が五とする、一には文殊師利歡喜陀羅尼契經の中に是くの如くの說を作す。その時に文殊師利卽ち佛に白して言さく、世尊常に大衆の中にして是くの如くの言を唱へたまふ。

五十の種子心は果海を莊嚴する行因の本なり、一切の行者當にこの道を經て等正覺を成ずべし、是くの如くの五十の種子心の中に幾くかこれ退分幾くかこれ定分唯し願くは世尊我が爲に解說したまへ。於是世尊卽ち文殊師利菩薩に告げて言はく、諦に聽き諦に聽き善く思ひ之を念せよ、我れ今汝が爲に分別し解說せん、善男子十種の眞地を名けて金剛般若住地と爲し、前きの四十心を名けて頗梨珠隨

轉廻向地となす、汝當に是くの如く知るべし是くの如く觀ずべし、今此の經文は何の義を明さんとする、大士の十地は已に眞證の城なれば不退分と名け、これより已前の四十種の心は未だ證智を得ざれば名けて退分とすることを顯示せんと欲ふが爲の故に。二には本覺大悲自然熏習契經の中に是くの如くの說を作す、復次に佛子汝が前の所問に云何が名けて節退相とすることは、この事殊勝にして不思議の中の不思議なるが故に愚痴の凡夫初發意の菩薩等の知ること能はざる所なり、その時に大明菩薩心を至して佛に勸請す、卽ち大明に告げて言はく善男子節退相といふは謂く信心、發心住、淨心地、金剛心の此の四處を皆名けて退分と爲す、各の彼の中間をば皆名けて不退分と爲す、この故に說いて節退相といふと、今この經文は何の義をか明さんとする、佛法の大海は廣大圓滿にして邊際なきことを顯示せんと欲ふが爲の故に。三には大證得陀羅尼契經の中に是くの如くの說を作す、十種安心は決定不退にして退失の理なし今この經文は何の義をか明さんとする、十住の菩薩は法界性の中に隨順する廣大の善根を發起するが故に決定して金剛の位に安住することを顯示せんと欲ふが爲の故に。四には五明契經の中に是くの如くの說を作す、十種の定心は退にあらず進にあらず來にあらず去にあらず出にあらず入にあらず萬德を圓滿して闕失する所なし、この故に說いて自然住心と言ふと、今この經文は何の義をか明さんとする、十住の位の中に果德已に滿して更に進む所無く、復た退く所なく自然常住にして闕事なきことを顯示せんと欲ふが爲の故に。五には菩薩瓔珞大本業契經の中に是くの如くの說を作す、諸の善男子若しは一劫、二劫乃至十劫十信を修行して十住に入ることを得、その人その時に初一住より乃し第六住の中に至るまで若し第六の般若波羅蜜多觀を修すれば現在前に、復諸佛菩薩の知識の所護に値うて出で、第七住に到て常住不退なり、この七住より以前をば名けて退分とすると、今この經文は何の義をか明さんとする、下劣懈怠の衆生を勸策して勇猛の心を增長せしめんとすることを顯示せんと欲ふが爲の故に。今この論の中には且く本業に據て會通を作す、審に觀察すべし、本の如し、修多羅の中に或は惡趣に退いて墮ることありと說くが如きは、それ實退にはあらず、但し初學の菩薩の未だ正位に入らずして懈怠なるものを恐怖勇猛せしめんが爲の故に、已に通契經文決疑門を說きつ。次に讚歎發心功德門を說かん、此の門は何の義をか明さんとする、發心の菩薩は二の怖畏を遠離して其の心決定不動なることを顯示せんと欲ふ爲の故に、云何が名けて二種の怖畏

とする、一には下生怖畏、下劣の道に生ぜんことを極めて怖畏するが故に。二には上生怖畏、殊勝の境を間て其の心怯弱して極めて怖畏するが故に此の二の怖れを離る、この故に名けて發心功德と爲す、本の如し、又此の菩薩は一たび發心の後に怯弱を遠離して畢竟じて二乘地に墮せんことを畏れず、若し無量無邊阿僧祇劫に勤苦難行して乃し涅槃を得と聞き亦怯弱せざるが故に、一切の法は本より已來自ら涅槃なりと信ずるを以ての故にとは、卽ちこれ總じて二種の功德の因緣を結す。上より已來は信成就發心決擇分已んぬ。これより已下の種種の諸門は文相明なるが故に重釋を須ひず。

釋摩訶衍論卷第七終

釋摩訶衍論卷第八

龍樹菩薩造

已に解釋分を說きつ。次に修行信心分を說かん、この分の中に就いて則ち七門あり、云何が七とする、一には能治所治契當門、二には信心品類分剖門、三には修行方便善巧門、四には廣釋魔事對治門、五には讃歎三昧功德門、六には兩輪具闕益損門、七には勸劣向勝不退門なり、これを名けて七となす、能治所治契當門とはその相云何ん、本に曰く、

この中には未だ正定聚に入らざる衆生に依る、故に修行信心分を說く。

論じて曰く、是中依未入正定聚衆生とはなるが故に。故說修行信心分とは卽ちこれ能治所化の境界その量云何ん、謂く二聚の衆生を攝するが故に、云何か二とする、一には邪定聚、二には不定聚なり、これを名けて二と爲す、所以何となれば、この二の衆生は皆ことゝく未だ正定聚に入らざるが故に、契當と言へばその相云何ん、謂く二の衆生の中に名契ふ敎說なるが故に、契相云何ん、謂く邪定聚の衆生に

被らしめんと欲ふが故に、信心門を説く、不定聚の衆生に被らしめんと欲ふが故に修行門を説く、所以何んとなれば進入の次第それ法爾の故に謂く未信の人は先づ信を起すが故にその已信の人は直に修行するが故に、

また次に通じて利益するが故に、已に能治所治契當門を説きつ。次に信心品類分剖門を説かん、

本に曰く、何等をか信心、云何か修行する、略して信心を説くに四種あり、云何が四とする、一には根本を信ず、所謂樂んで眞如の法を念ずるが故に。二には佛無量の功德ありと信じて常に念じて親近し供養恭敬して善根を發起し一切智を願求するが故に。三には法は大利益ありと信じて常に念じてもろ〳〵の波羅蜜を修行するが故に。四には僧は能く正しく自利利他を修行すと信じて常に樂んでもろ〳〵の菩薩衆に親近し如實の行を求學するが故に。

論じて曰く、この文の中に就いて則ち三門あり、云何が三とする、一には直問信心品類門、二には直問修行品類門、三には略答顯示信心門なり、これを名けて三と爲す、直問信心品類門と言ふは所謂總じて信心の量を問ふが故に本の如し何等信心の故に、直問修行品類門といふは、所謂總じて修行の量を問ふが故に本の如し

云何が修行の故に、第三の門の中に就いて卽ち三門あり、云何が三とする、一には惣答門、二には惣問門、三には廣荅門なり、惣答門といふは所謂惣じて其の所說を荅するが故に本の如し、略して信心を說くに四種あるが故に、惣問門といふは所謂惣じてその所說を問ふが故に本の如し、云何が四とするが故に第三の門の中について故四種の門あり、云何が四とする、一には信本令心平等門、二には信佛欣有功德門、三には信法精進修行門、四には信僧令心無諍門なり、これを名けて四となす、信本令心平等門といふは所謂樂つて自の根本たる眞如の理法を信じて無明の力に由て種種に差別なる一切の諸心を皆こと〴〵く一に會して平等ならしむるが故に本の如し、一には根本を信ず所謂樂んで眞如の法を念ずるが故の故に、信佛欣有功德門といふは所謂樂んで無上大覺如來世尊を信じて所有の無量無邊の一切の功德を欣求するが故に本の如し。二には佛は無量の功德ありと信じて常に念じて親近し供養恭敬して善根を發起し一切智を願求するが故に、故に信法精進修行門といふは所謂樂んで三世の諸佛を自の恩父となし自の恩母となし自の恩師となし改壞すること能はず、虛空金剛の不動、生滅すること能はず、の軌則なり、不可思議の中の不可思議殊勝の利益なりと信じて常恒に轉轉して一

切時に於き一切處に於て一切の助道品を修行するが故に本の如し。三には法に大利益ありと信じて常に念じて諸波羅蜜を修行するが故の故に、信僧令心無諍門といふは、所謂樂つて一切無量の菩薩僧衆は兩つの勝行を以て自の內德となすと信じて若しは遠若しは近、自の聞く時に隨ひ自の見る時に隨ひ自の思ふ時に隨ひ僧の所に往詣し心を至して種種の深經、種種の深論、種種の深理、種種の妙事を聽受して斷絕せざるが故に本の如し。四には僧能く正しく自利利他を修行すと信じて常に樂んでもろ〳〵の菩薩衆に親近して如實の行を求學するが故の故に、已に信心品類分剖門を說きつ。次に修行方便善巧門を說かん。

本に曰く修行に五門ありて能く此の信を成ず、云何が五とする、一には施門、二には戒門、三には忍門、四には進門、五には止觀門なり、云何が修行施門、若し一切を見來たりて求索せんをば所有の財物力に隨つて施與して以て自ら慳貪を捨て彼れをして歡喜せしむ、若し厄難恐怖危逼を見て己が堪任せるに隨つて無畏を施與す、若し衆生の來たつて法を求むるあらば己が能く解するに隨つて方便をもて爲に說いて名利恭敬を貪求すべからず、唯し自利利他を念じて菩提に廻向するが故に、云何が修行戒門、所謂殺さず、盜まず、婬せず、兩舌せず、惡口せず、妄言せず、綺語せず、貪嫉欺詐諂曲瞋恚邪見を遠離す、若し出家ならば煩惱を折伏せんが爲の故に、亦憒鬧を遠離して常に寂靜に處すべし、少欲知足にして頭陁等の行を修習して乃至小罪心に怖畏を生ず慚愧改悔して如來所制の禁戒を輕しむることを得ざれ、當に譏嫌を護て衆生をして妄りに過罪を起さしめざるべきが故に、云何が修行忍門所謂他人の惱を忍んで心に報を懷せざるべし、亦當に利衰毀譽稱譏苦樂等の法を忍ぶべきが故に、云何が修行進門所謂もろ〳〵の善事に於て心懈退せず立志堅强にして怯弱を遠離す當に念ずべし過去久遠より已來虛しく一切の身心の大苦を受けて利益あることなし、この故にもろ〳〵の功德を勤修し自利利他速に衆苦を離るべし、また次に若し人信心を修行すと雖も、先世より已來多く重罪の惡業障あるを以ての故に、魔邪諸鬼の爲に惱亂せられ或は世間の事務のために種種に牽纏せられ或は病苦の爲に惱まさる、是くの如く等の衆多の障碍あり、この故に應當に勇猛精進にして晝夜六時に諸佛を禮拜し誠心に懺悔勸請し隨喜して菩提に廻向すべし、常に休廢せざれば諸障を免るゝことを得て善根增長するが故に、云何が修行止觀門、言ふところの止とは謂く一切の境界の相を止めて奢摩他に隨順する觀の義の故に、言ふところの觀とは謂く因緣生滅の相を分別

して毘跋舍那に隨順する觀の義の故に、云何が隨順、この二義を以て漸漸に修習し相捨離せずして雙べて現前するが故に、若し止を修せば靜處に住し端坐し正意にして氣息にも依らず、形色にも依らず、空にも依らず、地水火風にも依らず乃至見聞覺知にも依らず一切の諸想と隨念と皆除き亦除想をも遣る以なり、一切の法は本より來た無想にして念念不生念念不滅なり、亦心に隨つて外に境界を念ずることを得ざるを後には心を以て心を除く、心若し馳散せば卽ち當に攝束して正念に住すべし、この正念とは當に知るべし、唯心にして外の境界なし卽ちまた此の心も亦自相なくして念念不可得なり、若し坐起去來進止の所作に從うて一切の時に於て常に方便を念じて隨順し觀察すべし、久習淳熟すれば、その心住することを得、心住するを以ての故に漸漸猛利にして眞如三昧に隨順し得入す、深く煩惱を伏し信心增長して速に不退を成ず、唯し疑惑不信誹謗重罪業障我慢懈怠を除く、かくの如く等の人は入ること能はざるところなり、また次に是の三昧に依るが故に則ち法界の一相を知る、謂く一切諸佛の法身と衆生の身と平等無二なるを則ち一行三昧と名く、當に知るべし眞如はこれ三昧の根本なり、若し人修行すれば漸漸に能く無量の三昧を生ず。

論じて曰く、此の文の中に就いて卽ち五門あり、云何が五とする、一には惣標答前所問門、二には通達惣問所說門、三には略答建立門數門、四には略問廣答散說門、五には讚歎三昧殊勝門なり、これを名けて五と爲す、惣標答前所問門といふは所謂惣じて波の前の問ひを答るが故に本の如し、修行に五門あり能くこの信を成ずるが故に、通達惣問所說門といふは所謂惣じて其所說を問ふが故に本の如し、云何が五の爲の故に、略答建立門數門といふは所謂大門の數を建立するが故に本の如し、一には施門、二は戒門、三には忍門、四には進門、五には止觀門の故に、何が故にか次第是くの如くなる、謂く修行者の六度の次第法かくの如くなるが故に。次に略問廣答散說門の中に就いて故に五門あるが故に、故に五門あり、審に觀察すべし、この五種の門の中に各各に二門を具す、云何が二とする、一には略問門、二には廣答門なり、これを名けて二と爲す、その次第の如く數量を亂らず審に思擇すべし。第一の修行施門の中に云何が修行施門と言ふは、卽ちこれ略問門なり、所謂問ひを開くが故に、徑徑の諸門かくの如く知るべし、廣答門の中に就いて卽ち三種の施あり、云何が三とする、一には、財物施、二には隨應施、三には敎法施なり、財物施といふは謂く若し衆生あつて我が所に來到し

て我が所有を乞はば則便ち疑はず時に隨ひ處に隨つて皆悉く施與して顧惜するところなきが故に、何等の物をか名けて財物とするや、幾く種の物かあるや、所謂二種の財物あるが故に、云何が二とする、一には內物、二には外物なり、これを名けて二と爲す、內物の中に就いて亦二種あり、云何が二とする、一には無色、二には有色なり、無色と言ふは則ちこれ心識なり、有色と言ふは則ちこれ諸根なり若し衆生あつて我が所に來到して我が心識を乞はば則便ち惜まず、時に隨つて施與して彼れをして歡喜せしむ、若し衆生あつて我が所に來到して其の所用に隨つて我が一一の有色の妙根を乞はば、則便ち惜まず時に隨つて施與して彼れをして歡喜せしむ、これを名けて二種の內財物となす。外物の中に就いて亦二種あり、云何が二とする、一には有識、二には無識なり、有識といふは卽ちこれ妻子奴婢等の類なり、無識といふは則ちこれ宮殿舍宅衣服嚴具等の類なり、若し衆生あつて我が所に來到して此等のものを乞はば則便ち惜まず時に隨つて施與して彼れをして歡喜せしむ、これを名けて二種の外財物と爲す、本の如し、若し一切の來つて求索するものを見ては所有の財物、力に隨つて施與して以て自ら慳貪を捨てゝ彼れをして歡喜せしむ、故に已に財物施を說きつ。次に隨應施を說かん、云何が名けて隨應施とするや、謂く或は衆生あつて五根壞失して具足すること能はず、或は衆生あつて病苦無量にして安穩なることを得ず、或は衆生あつて其の心愚痴にして明了なること能はず、行者そのときに賢士なるを以て則ちその所應に隨ひ、その所當に隨ひ、その所宜に隨ひ、その所用に隨つて能善く簡擇し能善く分別して彼の苦惱を除いて歡喜せしむるがゆゑに、このゆゑに說いて隨應施といふ、本のごとし、若し厄難と恐怖危逼とを見ては己が堪任に隨つて無畏を施與す、ゆゑに已に隨應施を說きつ。次に敎法施を說かん、云何が名けて敎法施とするや、謂く衆生あつて、若しは時不時、若しは親不親、若しは貴不貴、若しは愚不愚、若しは夫不夫、若しは女不女、若しは惡不惡、若しは人不人、かくの如く等の類我が所に來到して法を欲求せん時に則便ち惜まず無量無邊の廣大圓滿の大慈悲心を發起して彼の疑ひを決斷し、分に煩惱を除いて徐く智慧を增し、彼の人を攝取して惡道に墮さず無上大菩提に到らしむるが故に、この故に說いて敎法施といふ、本の如し、若し衆生の來つて法を求むるものあつて己が能く解んに隨つて方便を以て爲に說いて名利と恭敬とを貪求すべからず、唯し自利利他を念うて菩提に廻向するが故の故に、已に修行施門を說きつ。次に修行戒門を說か

ん、此の門の中に就いて則ち四門あり、云何が四とする、一には建立戒相標宗門、二には成就戒品勝處門、三には具足戒行不輕門、四には守護不令誹謗門なり、これを名けて四と爲す、建立戒相標宗門といふは、所謂十種の清淨防轉戒を建立するが故に、本の如し、云何が戒門を修行する、所謂殺さず、盜みせず、婬せず、兩舌せず、惡口せず、妄語せず、綺語せず、貪嫉欺詐諂曲瞋恚邪見を遠離するが故に、成就戒品勝處門と言ふは所謂若し戒品を具足せんがためには常に當に散亂の雜處を遠離すべし、常に當に寂靜勝處に親近し、その中に安住して捨離せざるべきが故に、本の如し、若し出家のものならば煩惱を折伏せんが爲の故に亦憒鬧を遠離すべし、常に寂靜に處するが故に、具足戒行不輕門といふは所謂種種の妙行を修行し深信の心を起して如來所制の師母戒を輕賤することを得ざるが故に本の如し、少欲と知足頭陀等との行を修習す、乃至小罪にも心に怖畏を生じて慚愧し改悔して如來所制の禁戒を輕んずることを得ざるが故に、守護不令誹謗門といふは所謂佛の眼精戒を護持し、終に破失せずして自利を具足し種種の放逸譏嫌の衆生に妄想の過罪を發起せしめずして利他を具足して大覺の海を圓滿し莊嚴するが故に、本の如し、當に譏嫌を護るべし、衆生をして妄りに過罪を起さしめざるが故の故に。已に修行戒門を說きつ。次に修行忍門を說かん、この門の中に就いて卽ち二門あり、云何が二とする、一には顯示略忍伏我門、二には顯示廣忍無我門なり、これを名けて二と爲す、顯示略忍伏我門といふは、所謂若し衆生あつて惡の阿世耶の境を造作して我が心を惱ましめば、行者その時にその心能く忍んで動惱せざるが故に、本の如し、云何が忍門を修行する所謂他人の心を惱ますんを忍ぶべし、報を懷はざるが故に。顯示廣忍無我門といふは所謂或は衆生あつて飲食衣服等の種種の財物を以て我が所に施與して利益し歡樂せしめ或は衆生あつて劒杖等の種種の怖相を以て我が所に來到して我が依正を損滅して自在なることを得ざらしめ、或は衆生あつて麁惡誹謗等の種種の穢語を以て、若しは遠若しは近にして我れを毀嫌し、或は衆生あつて正住等の種種の德を以て我が身を讚歎せん、かくの如く等の種種の事の中に於て、その心平等にして堅固不動なること須彌の如くなるが故に、本の如し、亦當に利衰と毀譽と稱譏と苦樂と等の法を忍ぶべきが故の故に。已に修行忍門を說かん、この門の中に就いて卽ち二門あり、云何が二とする、一には通示修行精進門、二には別釋修行精進門なり、通示修行精進門といふは、所謂もろ〳〵の種種の妙事に於て其の心轉勝し勤

欲精進して終に息まざるが故に、本の如し、云何が進門を修行する、所謂もろもろの善事に於て心懈退せず、志を立つること堅強にして怯弱を遠離するが故に。別釋修行精進門の中に就いて、故に二門あり、云何が二とする、一には無障修行精進門、二には有障修行精進門なり、無障修行精進門といふは所謂行者かくの如くの念を作して我れ無始過去の時より來た唯し虛妄不實の身心をのみ受けて都べて金剛不壞の身心を受くること能はざるは餘の因緣なし、唯し妙行の中に勤行せざるが故なり、我れ若し懈怠にして前の如く行せざれば未來に向つて去るとも亦復都て利益あることなき虛妄の身心を受けて出離の期なけん、我が自身すら尙し出離することを得ずして都べて自利を失す、何に況や所餘の種種の有苦の衆生を救濟して利他を具足せんや、この念を作し已つて則便ち大精進の心を發起して行因の海を修行し、滿德の果を莊嚴す、兩利を建立して缺偏なきが故に、本の如し、當に念ずべし過去久遠より已來虛く一切の身心の大苦を受く、利益あるなしと、この故に勤めてもろ〳〵の功德を修して自利利他の衆苦を速離すべし、故に有障修行精進門といふは所謂若し衆生あつて無始過去の業障を餘すあるが故に魔外道及び惡鬼神のために惱亂せられて修行すること能はず、或は衆生あつて現

在世の種種の事務のために牽纏せられて修行すること能はず、或は衆生あつて一切の諸の種種の病苦のために逼惱せられて修行すること能はず、是くの如く等のもろ〳〵の衆生は耳に軌則の尊辭を聽聞し眼の中に文敎の說相を觀見すと雖も而も勤めて修行し厭求の心を生ずること能はず、然も若しその心勇猛精進にして種種の勝妙の方便を發起し堪任の心を存すれば業障の海漸漸波息み、功德の嶽いよ〳〵峯高うして八風にも飄せられず、九結にも縛せられざるが故に、本の如し、また次に若し人信心を修行すといへども先世より來た多く重罪惡業障なるを以ての故に、魔邪諸鬼のために惱亂せらる、或は世間の事務の爲に種種に牽纏せられ、或は病苦の爲に惱さる、是くの如く等の衆多の障礙あり、この故に應當に勇猛精勤して晝夜六時に諸佛を禮拜し誠心に懺悔し勸請し隨喜して菩提に廻向すべし、常に休廢せざれば諸障を免るゝことを得て善根增長するが故の故に、已に修行進門を說きつ。次に修行止觀門を說かん、この門の中に就いて卽ち四門あり、云何が四とする、一には惣標惣釋止輪門、二には惣標惣釋觀輪門、三には略釋決擇隨順門、四には廣釋決擇止輪門なり、これを名けて四と爲す。惣標惣釋止輪門と言ふは謂く、慮知の心を止め散亂の思ひを礙へ、一中寂靜の

性に安住して一切の境界の相に出でず、定標陀に隨順する阿羅觀の義の故に、本の如し、云何が止觀門を修行する、言ふ所の止とは謂く一切の境界の相を止めて奢摩他に隨順する觀義の故に、故に惣標惣釋觀輪門といふは、謂く明に因緣の道理を簡擇し審に無常の形相を分別し能善く通達し能善く遍知して觀標陀に隨順する阿羅觀の義の故に、本の如し、言ふ所の觀とは謂く因緣生滅の相を分別して毗跋舍那に隨順する觀の義の故に、故に略釋決擇隨順門といふは謂く定に隨ふ時にも彼の觀に則ち順じ、觀に隨ふ時の中にも彼の定に卽ち順じて具足具足し離れずして轉ずるが故に、本の如し、云何が隨順する、此の二義を以てやうやくに修習し相捨離せずして雙べて現前するが故に、故に廣釋決擇止輪門の中に就いて則ち四門あり、云何が四とする、一には成就止輪因緣門、二には直示修行止輪門、三には修行止輪得益門、四には簡入不入分際門なり、これを名けて四となす。第一の成就止輪因緣門の中に就いて則ち十五種あり、云何が十五とする、一には住處寂靜の因緣、二には獨一不共の因緣、三には所居方善の因緣、四には衣服具足の因緣、五には飲食具足の因緣、六には結界護淨の因緣、七には舍宅造立の因緣、八には言語不出の因緣、九には座像造立の因緣、十には坐其座中の因緣、十一には出入時節の因緣、十二には知識善友の因緣、十三には印知邪正の因緣、十四には植善林樹の因緣、十五には字輪服膺の因緣なり。これを十五種の大因緣と名く。住處寂靜の因緣といふは謂く若し彼の止輪門を修せんが爲には山林等の空閑の處の中に居して散亂聚落の處を遠離するが故に、所以何となれば散亂の處の中には彼の止輪門成就し難きが故に。獨一不共の因緣といふは謂く若し彼の止輪門を修せんが爲には一界內の中に二人共住すれば理を得ざるが故に、所以何となれば互に動煩するが故に。所居方善の因緣といふは謂く若し彼の止輪門を修せんがためには東西の兩方の中に居止して南北の方の中には居することを得ざるが故に、所以何となれば覺輪あるが故に。衣服具足の因緣といふは謂く若し彼の止輪門を修せんためには必ず三種の衣を用ふべきが故に、云何が三とする、一には黃色、二には赤色、三には白色なり、かくの如くの三衣は一時に同く用ふるが故に、所以何となれば毘叉羅虫入ること能はざるが故に。飲食具足の因緣といふは謂く若し彼の止輪門を修せんが爲には必ず當に乾練の伽摩伊陀耶を用ふべし、所餘の穀等をば用ふること能はざるが故に、所以何となれば彼の伽摩伊陀耶は仙性あるが故に、また次に若し無くば婆尼羅等を用ふべきが故に、受用の時節は唯

し中よりを用ふる定あることなきが故に。結界護淨の因緣といふは、謂く若し彼の止輪門を修せんが爲には自居の室を離るゝこと一俱盧舍量の中に一百十遍の大神呪を誦ずべし、その相云何ん。謂く卽ち呪を誦して言く、

坦咥嚩那羅帝婆叉尼阿摩嘔迦陀帝婆婆阿婆婆囉陀闍佉那鄔呵伊陀帝奄奄奄奄帝哆跋陀陀嘔摩那尸只帝奢陀尼筏叉羅尼鳩訶阿訶鳩多叩奄阿陀陀帝摩阿伽耶帝摩訶阿伽耶帝鍵多尼阿羅阿羅阿羅阿羅阿羅阿羅阿羅阿羅阿羅阿帝娑婆呵。

若しこの呪を誦じ已訖れば卽便ち結界護淨す、所以何となれば種種の毒類入ること能はざるが故に、舍宅造立の因緣といふは謂く若し修定の舍宅を造らんが爲には當に十事を具すべし、云何が十とする、一には門戶の事、たゞし東方に向つて餘方にあらざるが故に。二には高下の事、東方は漸く高く、西方は漸く下るが故に。三には方角の事、一方の中に於て各一丈なるが故に。四には品重の事、十重を重ぬるが故に。五には作物の事、ただし五種を用ひて餘種にあらざるが故に、云何が五とする、一には金、二には銀、三には銅、四には鐵、五には松木なり、これを名けて五と爲す。六には戶壛の事、その地の量と等くして差別なきが故に。七には戶重の事、十戶を重ぬるが故に。八には戶樞の事、音聲なきが故に。九には壁

牆の事、その高さ一丈にして十重を重ぬるが故に。十には出入の事、かの諸戶の中に各呪を誦ずるが故に、その相云何ん、謂く若し出でんとせんときは卽ち呪を誦じて言く、

喃嚂嚩帝摩訶鳩毘那阿羅婆提陀陀阿伽度般枳阿枳尸遮婆泥諾帝婆枳摩毘嚂婆枳摩阿那阿那尸枳尼尸枳娑婆呵。

若しこの神呪一千遍を誦ずれば卽便ち時に順じて皆悉く開通す、若し入らんとせんときには則ち呪を誦じて言く、

南無喃枳那南無筏尸陀南無諦阿帝南無諦阿嚂那南無鍵陀尼娑婆呵。

若しこの神呪一千五百遍を誦じ已訖れば卽便ち時に順じて皆ことごとく開閉す。言語不出の因緣といふは、謂く若し彼の止輪門を修せんが爲には一切時に於き一切處に於て言を出さざる故に、所以以何となれば其の言說に隨つて心識出るが故に。座像造立の因緣といふは謂く若し修定の座像を造らんが爲には當に五事を具すべし、云何が五とする、一には作物の事、松木を用ふるが故に。二には高量の事自身の半の如くして增減せざるが故に。三には方角の事、一方の中に於て各四尺なるが故に。四には方向の事、唯し東方に向つて餘方にあらざるが故に。五には座上具の

事、唯し黄陀羅帝と及び黄坐具とを用ふるが故に、是を名けて五となす。坐其座中の因縁といふは謂く若し彼の止輪門を修せんが爲には當に十事を具してその座の中に坐すべし、云何が十とする、一には足等の事、兩膝の末に其の兩の母指を中てゝ互相に契當して差なからしむるが故に。二には膝等の事、兩膝を平攝して差ふことなからしむるが故に。三には腰端の事、その腰端直にして䏶䏶なきが故に。四には手累の事、兩手相對して右の手を下になし左の手を上になし、左の手を下になし右の手を上になし、一日を經已つて互互に易變て忘失せざるが故に、亦復その手を根の上に置くが故に。五には頸端の事、その頸の質端直不動にして定めて建立するが故に。六には面端の事、その面の相貌仰がず俯かず平相ならしむるが故に。七には口相の事、その口の相廣からず狹からず中間を開くが故に。八には鼻相の事、その氣息を出すこと差違なからしめて一より出さゞるが故に。九には眼相の事、その眼根の量上げず下げず平等に舒るが故に。十には止眼の事、その眼根を置くところは大虛空字輪の中に安置して恒に離れざるが故に、これを名けて十とす。出入時節の因縁といふは、謂く若し彼の止輪門を修せんが爲には唯し辰と及び午との二時を用ふ、この餘時の中には出入せざるが故に。知識善友の因縁といふは謂く若し彼の止輪門を修せんが爲には深智慧の人を以て友とするが故に。印知邪正の因縁といふは謂く若し彼の止輪門を修せんが爲には其の像の量に隨つて金剛印を須て則便ち邪及び正を了知するが故に、其の相云何ん、謂く則ち呪を誦して言く、

坦咥吡嘛曼那鄔陀帝婆羅枳陀尼遮叩囉哆耶掩阿尸帝那娑婆呵。

若しこの神呪四千六百五十遍を誦じ已訖れば卽ち彼の像の中に二の字輪を付す。謂く若し邪人なれば邪字輪を付し若し正直の人なれば正字輪を付す、これを以て別と爲す。植善林樹の因縁といふは謂く若し止輪門を修せんとする人は自室の前の中に二種の大吉祥草を植うるが故に、云何か二とする、一には松木、二には石榴木なり、これを名けて二と爲す。字輪服膺の因縁といふは謂く若し彼の止輪門を修せんとする人は必ず當に圍字輪を服すべし而已、何れの處にか服するや、謂く方寸の處なるが故に。何の義を以ての故にか必ず此の輪を付する、謂くこの字輪は三世の諸佛と無量無邊の一切の菩薩との大恩の師長、大恩の父母、大恩の天地、大恩の海なるが故に、この因縁の故に、止を修せんとする人は當に此の輪を付すべし、是くの如くの因縁無量なることありと雖も、而も今この摩訶衍論の中には

第一の因緣を明す、餘を明さゞることは初めを擧げて後を攝するが故に是くの如き而已、本の如し、若し止を修するものは靜處に住する故に已に成就止輪因緣門を說きつ。次に直示修行止輪門を說かん、此の門の中に就いて則ち七門あり、云何が七とする、一には存心決定門、不生不滅の眞空の理の中に其の心定まるが故に本の如し端坐して正意の故に。二には不著身體門、能善く此の身は空無にして其れ本より自性不可得なりと通達するが故に、本の如し、氣息にも依らず、形色にも依らず、空にも依らず、地水火風にも依らざる故に。三には不着心識門、能善く慮知の心は自性空無にして所有なしと通達するが故に、本の如し、乃至見聞覺知にも依らず、一切の諸想と隨念とを皆除いて亦除想を遣る故に、これより已下はその身心の空無の因緣を作す、本の如し、一切の法は本來無相にして念念に生ぜず念念に滅せざるを以てなり、亦常に心外に隨つて境界を念ふことを得ざるが故に。四には不著不著門能遣の心をも亦遣除するが故に、本の如し、後に心を以て心を除く故に。五には集散會一門、散動の心を攝して一が中に置く故に、本の如し、心若し馳散するには卽ち當に攝束して正念に住すべきが故に。六には顯示正念門、諸法は唯し一心なることを顯示するが故に、本の如し、この正念とは當に唯心にして外境界なしと知るべし、卽ちまた此の心は亦自相なし念念に不可得の故に。七には不離恒行門、かくの如くの定心は一切時に於き、一切處に於て常恒に相續して捨離せざるが故に、本の如し、若し坐より起つと去來と進止との所作は一切の時に於て常に方便を念じて隨順し觀察せよ　故に已に直示修行止輪門を說きつ。次に修行止輪得益門を說かん、謂く若し人あつて能く此の定を修すれば漸漸に轉轉して煩惱の海を竭くし業障の岳を崩して眞如の定に入り一切の法に達して不退に到るが故に、本の如し、久しく習することを淳熟すればその心住することを得、心住するを以ての故に漸漸に猛利にして眞如三昧に隨順し得入す、深く煩惱を伏し信心增長して速に不退を成ずる故に、已に修行止輪得益門を說きつ。次に簡入不入分際門を說かん、この門の中に就いて卽ち二意あり、云何が二とする一には、入趣意、二には不入意なり、入趣意といふは所謂或は衆生の深法に趣入して心に疑ふところなきあり、或は衆生の甚深の法を聞いて其の心決定して不信を生ぜざるあり、或は衆生の甚深の法を聞いて卽便ち尊重して誹謗を生ぜざるあり、或は衆生の重業障なきあり、或は衆生の我慢の心なきあり、或は衆生懈怠の心なきあり、かくの如くの六人は佛の種性に入るより決定して疑はず、

これを入趣意と名く。不入意といふは、所謂若し衆生あつて此の六と相違すれば永く三寶の種子を斷絶すること決定して疑はず、これを不入意と名く、本の如し、唯し疑惑と不信と誹謗と重罪と業障と我慢と懈怠とを除く是くの如く等の人は入ること能はざる所なり、故に已に略問廣答散說門を說きつ。次に讃歎三昧殊勝門を說かん、此の門の中に就いて則ち二門あり、云何が二とする、一には體大無邊殊勝門、二には眷屬無盡殊勝門なり、これを名けて二と爲す、體大無邊殊勝門といふは此の三昧を修すれば一切の無量の諸法は同體一相にして差別なしと通達するが故に、本の如し、また次に此の三昧に依るが故に則ち法界一相なりと知る、謂く一切の諸佛の法身と衆生の身との平等無二なるを則ち一行三昧と名くる故に。眷屬無盡殊勝門と言ふは、所謂卽ちこの眞如三昧は能く一切の無量無邊の金剛三昧のために正根本と作つて而も能く出生し增長するが故に、本の如し、當に知るべし、眞如はこれ三昧の根本なり、若し人修行する時は漸漸に能く無量三昧を生ずるが故に。

釋摩訶衍論卷第八終

釋摩訶衍論卷第九

龍樹菩薩造

已に修行方便善巧門を說きつ。次に廣釋魔事と對治門とを說かん。本に曰く

或は衆生あつて善根力なければ則ち諸の魔と外道と鬼と神との爲に惑亂せらる、若しは坐の中に於て形を現じて恐怖し、或は端正の男女等相を現ず、當に唯心を念ずれば境界則ち滅して終に惱を爲さず、或は天の像、菩薩の像を現じ、亦は如來の像を作して相好具足し、若しは陀羅尼を說き、若しは布施持戒忍辱精進禪定智慧を說き、或は平等にして空無相と無願と無怨と無親と無因と無果と畢竟空寂なる是れ眞の涅槃なりと說き、或は人をして宿命過去の事を知り亦未來の事を知て他心智を得しめ、辯才無礙にして能く衆生をして世間の名利の事に貪着せしめ、又人をして數瞋り數喜んで性常准なること無く、或は慈愛多く睡り多く病多くその心懈怠ならしめ、或は卒に精進を起して後には便ち休廢して不信を生じ疑多く慮多く、或は本の勝行を捨てゝ更に雜業を修し、若しは世事に着して種種に牽纏す、亦能く人をしてもろ〳〵の三昧を得しむ、少分相似すれば皆これ外

道の所得にして眞の三昧にはあらず、或は復人をして若しは一日若しは二日若しは三日乃至七日定中に住して自然の香美の飲食を得、身心適悅して飢ゑず渴せざらしむ、人をして愛着せしむ、或は亦人をして食に分齊なく乍に多く乍に少くして顏色變異ならしむ、是の義を以ての故に行者常に智慧をして觀察して此の心を邪網に墮せしむることなかるべし、當に勤めて正念なるべし、不取不着なればば則ち能く是のもろ〳〵の業障を遠離す、知るべし外道所有の三昧は皆見愛我慢の心を離れず、世間の名利恭敬に貪着するが故に、眞如三昧とは見相にも住せず、得相にも住せず乃至出定にも亦懈慢無く所有の煩惱漸漸に微薄なり、若しもろもろの凡夫此の三昧の法を習はずして如來種性に入ることを得といはば是の處あることなし、世間の諸禪三昧を修すれば多く味着を起し我見に依るを以て三界に繫屬して外道と共ず、若し善知識の所護を離すれば則ち外道の見を起すが故に。論じて曰く、則ちこの門の中に自ら二門あり、云何が二とする、一には略說略示惣持門、二には廣說廣示散剖門なり、第一の門の中に卽ち五門あり、云何が五とする、一には衆生勝劣不同門、二には能作障事假人門、三には顯示所作業用門、四には顯示對治行法門、五には因治之力得益門なり、これを名けて五とす、衆生勝劣不同門と言ふは、二種の衆生各不同なるが故に云何が二とする、一には因緣具足の衆生、二には因緣闕失の衆生なり、具足の衆生とは五事を具するが故に、闕失の衆生とは四事を闕するが故に、云何が五具、一には信具深く愛樂するが故に、二には人具能く守護するが故に、三には法具能善く正邪の區を通達するが故に、四には時具應に隨つて當るが故に、五には性具眞性あるが故にこれを名けて五とす、若し衆生あつて此の五事を具へつれば終に障碍なし。云何んが四闕謂く彼の前の四と相違するが故に若し衆生あつて眞性ありと雖も此の四事を闕すれば終に障を離るゝことなし、今この文の中には闕を取ること知んぬべし、本の如し、或は衆生あり善根力なきが故に。已に衆生勝劣不同門を說きつ。次に能作障事假人門を說かん、障を作す假人無量なることありと雖も而も四に出でず、云何が四とする、一には魔、二には外道、三には鬼、四には神なり、これを名けて四とす、言ふところの魔とは四種の大魔と三萬二千の眷屬の魔衆となり、外道といふは九十六種のもろ〳〵の大外道と九萬三千の眷屬の外道となり、いふところの鬼とは、十種の鬼と五萬一千三百二種のもろ〳〵の眷屬の鬼となり、言ふところの神とは十五の大神と五萬一千三百二種の諸の眷屬の神となり、是くの如くの諸類は一切

皆悉く正教を礙亂して非道に向はしむるが故に邪道と名く、魔及び外道の名義差別は出現經の中に分明に說くが故に且く略して釋せず、鬼及び神の事は出現經の中に分明なることなき故に更に釋を造作して綱要を略說すべし、十鬼といふは名字云何ん、一には遮毗多提鬼、二には伊伽羅尸鬼、三には伊提伽帝鬼、四には婆那鍵多鬼、五には爾羅爾梨提鬼、六には班尼陀鬼、七には阿阿彌鬼、八には闍佉婆尼鬼、九には多阿多伊多鬼、十には槌惕鬼なり、これを名けて十と爲す、是くの如くの十鬼の用各云何が、若し第一の鬼は或は晝の境を作し或は夜の境を作し、或は日月及び星宿の境を作し、或は節の境を作し應に隨つて變轉す、若し第二の鬼は種種の香味と種種の衣具と種種の草木との境を作して應に隨つて變轉す、若し第三の鬼は地水火風の境を作して應に隨つて變轉す、若し第四の鬼は飛騰境を作して應に隨つて無礙なり、若し第五の鬼はもろ〳〵の根識閉開の境を作して應に隨つて無礙なり、若し第六の鬼は六親眷屬の亦有亦無の境を作して、應に隨つて無礙なり、若し第七の鬼は老少の境を作して應に隨つて無礙なり、若し第八の鬼は有智無智の境を作して應に隨つて無礙なり、若し第九の鬼は無有の境を作して應に隨つて無礙なり、若し第十の鬼は蝎蠅蟻龍虎狼師子の種種の音聲等の境界を作して應に隨つて無礙これを名けて因と爲す、是くの如くの諸用は各何の力に因てか而も成就することを得る、各三事に因て而も成就することを得、云何が三とする、一には師、二には敎、三には習なり、師は謂く敎人、敎は謂く所學、習は謂く宿熏なり、これを名けて三とす、是くの如くの十鬼は恒に一切の時に相捨離せず俱行俱轉して障礙の事を作す之を用ふる名字は增に從つて建立す、第一の稱の如し、十五の神とは名字云何ん、一には筏羅羅鍵多提神、二には阿只陀彌梨尼神、三には補多帝陀訶訶婆神、四には闍毗摩只尼神、五には那多婆奢神、六には多多地地神、七には阿里摩羅神、八には尸叉尼帝婆蒭那神、九には班彌陀羅鄔多提神、十には唵唵吟吟神、十一には阿訶訶帝神、十二には修利彌尼神、十三には頭頭牛頭神、十四には婆鳩神、十五には精媚神これを十五と名く、この十五の神用各云何が、若し第一の神は聰明の境を作し、若し第二の神は闇鈍の境を作し、若し第三の神は樂有光明の境界を作し、若し第四の神は樂空光明の境界を作し、若し第五の神は浮散の境を作し、若し第六の神は專注の境を作し、若し第七の神は惡空善有の境界を作し、若し第八の神は一切覺者の境界を作し、若し第九の神は我覺他惑の境界を作し、若し第十の神は具に修行せざる境界

を作し、第十一の神は無の無境を作し、第十二の神は速に進退する境界を作し、第十三の神は移轉の境を作し、第十四の神は堅固の境を作し、第十五の神は應時の境を作し、是くの如くの十五の大神王は恒に一切の時に相捨離せず、俱行俱轉して而も碍事を作して行者を惱亂す、魔と及び外道とは云何が差別なる、いふところの魔とは惡事を作さしむ、外道といふは善事を捨てしむ、二種の差別是くの如く知るべし、鬼と並に及び神と云何が差別なる、身を障ふるを鬼とし、心を障ふるを神とす、二種の差別是くの如く知るべし、是くの如くの四障當に云何が對治すべき、此の中の對治に卽ち四種あり、云何が四とする、一には隨順隨轉對治、二には相逆相違對治、三には俱行對治、四には俱非對治なり、隨順隨轉對治といふは、卽ち、これ無碍自在對治なり、所謂若し彼の外人是くの如くの事を作して行者の心を亂らば所亂の行者卽ち是の念を作すべし無始より來た、此の事是くの如くなれども終に破せざる事なり、所以何となれば是くの如くの諸見は本有本覺の自家の實德にして過患にあらざるが故に、若し是の解を作せばもろ〳〵の邪見の類伏從して化の如し、所以何となれば見の增損に隨つて無漏の性德亦大小なるが故に是を隨順隨轉對治と名く、相逆相違對治といふは、則ちこれ簡擇別相對治なり、所謂若し彼の外人是くの如くの事を作して行者の心を亂らば所亂の行者則ち方便を求めて逆廻し違移し相反相違して簡擇せしむるが故に是を相逆相違對治と名く、俱行對治といふは卽ちこれ具足俱轉對治なり、所謂一時に逆順二の治を具足して離れずして轉ずるが故にこれを名けて俱行對治の相と爲す、俱非對治といふは卽ちこれ無念無依對治なり、所謂一切の法に於て所念あること無く、所慮あること無く、所着あることなく、所求あること無し、その心寂靜にして無住に住するが故にこれを名けて俱非對治の相と爲す、是くの如く對治の相は後の文の中に於て說相明なるが故にこの決擇の中には略去するのみ、本の如し、卽爲諸魔外道鬼神の故に、已に能作障事假人門を說きつ。次に顯示所作業用門を說かん、此の門の中に就いて卽ち二種あり、云何が二とする、一には是惣、二には是別なり、惣相門の中に卽ち二門あり、云何が二とする、一には惣相所作業用門、二には通達對治行法門なり、第一の門とは其の相云何ん、所謂如上所說の一切の邪類六道の像を現じて行者の心を亂るが故に今當に釋を作して分明に散說すべし、若し鬼と及び神とは多分地獄餓鬼畜生阿修羅の四道を造作して、行者の心を亂す、本の如し、若し坐中に於て形を現じて恐怖の故に、若し魔は多分天道を造作して行者

の心を亂る、本の如し、或は端正の故し若し外道の衆は多分人道を造作して行者の心を亂る本の如し男女を現ずる故に、等相といふは則ちこれ同相なり、所謂同品の依正を造作して行者の心を亂るが故に、已に惣相所作業用門を說きつ。次に通達對治行法門を說かん、謂く衆生あつて是くの如くの觀を作す、一切の諸法は唯一心量にして心外の法なし、已に無外法豈に一心の法と一心の法と障碍の事を作し、亦一心の法と一心の法と解脫の事を作さんや、障碍あること無く解脫あること無き一心の法は一卽ちこれ心、心卽ちこれ一なり、一に無く別の心、無心に別の一一に法界を攝し、心に法界を攝す、無量無邊の妄想の境界寂靜にして起することなく、中中にして相を離れたり、一切の諸法は平等一味にして一相無相なり、一種の光明を作す心地の海には風風永く止むて波波盡く住る是れを通達對治の相と名く、所以何となれば一切の行者若し此の對治門に飯せざれば以て邪道を摧き謬執を伏すること無きが故に、本の如し、當に唯心の境界を念ずべし、則ち滅して終に惱を爲さざるが故に、已に通達對治行法門を說きつ。次に別相所作業用門を說かん、この門の中に就いて則ち八門あり、云何が八とする、一には出現人相令信門、二には出現言說亂識門、三には得三世智惑人門、四には不離世間縛纏門、五には心性無常生亂門、六には令得邪定非眞門、七には勸請行者離邪門、八には簡擇眞僞令了門なり、これを名けて八と爲す、その次第の如く說相觀つべし、第一の門の中に就いて卽ち三種の人あり、云何が三とする、一には天人、二には菩薩、三には如來人なり、これを名けて三とす、若し外道の人、三の像を作さんとするには各幾くの門をか用ふる、各六門の故に、云何が六と爲る、一には造像門、二には禱祀門、三には神呪門、四には誦經門、五には阿呼門、六には勸請門なり、これを名けて六と爲す、造像門といふは何れの人の像をも用ひん處に隨つて其の人の像を作すが故に、禱祀門といふは、種種の飲食と種種の衆生の身命とを以て而も祀事を作すが故に、神呪門といふは應に隨ひ處に當つて陀羅尼を誦ずるが故に、誦經門といふは八陀多等の諸經を讀誦するが故に阿呼門と言ふは所作の事に隨つて餘語を須ひず、唯し是の言を作して阿呼阿といふが故に、勸請門といふは自ら世尊に向つて神力を勸請するが故に、造像といふは其の相云何ん、且く天像を作す時の中に當に如何がすべきや、謂く頭面眼耳鼻舌身手足の此の九種の處の中に各各に一萬八千遍陀羅尼呪を誦じて此の處を成立す、謂く若し眼の像を作さんとする時の中には卽ち呪を誦じて言く

遮阿那尸帝筏鄔多阿碓娑阿碓叉娑帝跋遲帝多陀陀那尸娑尸叉那鄔咤鄔邇尸羅々々
々々々々々々諾々々々々々々々跋多跋多帝佉只囉迦結那囉囉佉只那遮尸訶訶帝
加加加遮跋尸毗鍵々々尸那叉婆々々鍵跋帝阿多那尸阿多那尸跋多那尸跋多那尸訶
娑訶伊多梨梨婆梨帝遮々々々伊々々々多々々々尸々々雕々々々尸嵐々々
々帝帝帝那尸那阿伊阿伊跋阿帝跋多提多多跋多提娑婆阿訶訶

若し此の神咒一萬八千遍を誦じ已訖れば即ち眼の像清淨に具に成じて精動し根轉じて更に轉明利なり、若し耳の像を造作せんとする時の中に即ち呪を誦じて言く

唵嚤娑只伊那唵嚤娑只伊多跋陁々提鄔阿鄔阿那掲囉掲那那那囉々那那囉阿々々々
々々々々呵々々々々々々々遮々々々々々々々陁々々々々々只々々
々々々々帝々々々々哪々々々々嚟々々々々陁㖿陁㖿陁陁㖿鄔哆提
鄔哆提跋陁鄔多提毗嚟娑嚤阿咹陁婆掲那那尸娑婆訶阿呵

若しこの神咒一萬八千遍を誦じ已訖れば即ち耳の像清淨に具に成じて開動し理轉じて更に轉明利なり、若し鼻の像を造作せんとする時の中には即ち呪を誦じて言く

婆枳囉囉帝阿摩𡅏陁碓嵐婆阿尸提枳鄔掲哪尸呼々々呵呵毗遮鍵那尸提樓摩々尸
摩囉鄔遮哪薩婆提梨帝鄔陁尼堨坦哆陁毗尸那遮訶𡅏帝阿呵阿呼那囉那囉尸枳阿𡅏
嚟婆叉々々々々々々々婆叉阿陁哆伊那嘶々々々々々々々々々々鍵々々々々
々々々々々々々阿呵婆婆々々阿訶訶枳㖿摩枳㖿陀枳㖿阿尸帝鍵婆嚟闍々々々𡅏々
々々娑跋尸吐吐娑婆訶阿呵

若しこの神呪一萬八千遍を誦じ已訖れば即ち鼻の像清淨に具に成じて隨動し導轉して更に轉明利なり、若し舌の像を造作せんとする時の中には即ち呪を誦じて言く

阿摩阿伊㖿佉那尸帝提跋多提阿枳婆哆哆摩陀哆阿囉帝哪鄔婆哪鄔々々尸鄔々枳跋
伊坦提阿枳阿枳尼毗奢鄔枳那𡄈々々々哪舒帝鄔舒帝阿哆枳槃哆枳尸呵㖿摩闍阿哆
帝堨那呵婆那訶鄔尸帝尸帝迦毗提那阿枳陁摩那尸摩那尸闍枳闍枳毗闍枳娑婆訶阿
呵

若しこの神呪一萬八千遍を誦じ已訖れば即ち舌の像清淨に具に成じて了動し業轉して更に轉明利なり、若し身の像を造作せんとする時の中には即ち呪を誦じて言く

佉阿伊帝迦伊阿迦伊阿迦伊婆婆毗婆婆々々々提舒鄔摩舒鄔跋哆阿跋堨婆掲哪訶

伊訶伊訶々々々伊毗鄔帝嚩那尸剖帝哆佉枳嚩鄔帝嚦々婆嚦々阿嘀尼婆婆阿嘀尼闍訶摩闍訶婆帝堨那尸阿嚩帝阿嚩囉娑婆阿訶阿訶阿訶阿訶

若しこの神呪一萬八千遍を誦じ已訖れば卽ち身の像淸淨に具に成じて方作し面變す、若し手の像を造作せんとする時の中には卽ち呪を誦じて言く

掩嚩鄔喉帝阿喉阿嘍哆鄔哪婆毗哪尸舒囀婆迦囉嚩鄔訶陁羺尸嚩嚩尸嚩尸嚩尸嚩尸枳毗帝婆毗摩阿毗嚩訶鍵跋帝鄔哆那婆咃那娑婆阿訶阿呵

若しこの神呪一萬八千遍を誦じ已訖れば卽ち手の像淸淨に具に成じて指圓かに爪具す、若し足の像を造作せんとする時の中には卽ち呪を誦じて言く

抲伊喉摩伊喉堨囉帝婆囉帝鍵那鍵那鳩摩鳩帝鳩摩跋帝阿枳娑阿枳婆呵那呵那娑婆訶阿訶阿呵

若し此の神呪一萬八千遍を誦じ已訖れば卽ち足の像淸淨に具に成じて指圓かに爪具す。若し頭面を造作せんとする時の中には其の次第の如く、初の二の神呪初を以て後と爲し、後を以て初と爲して逆に次第に一萬八千遍を誦じ已訖れば卽ち頭面の像淸淨に具に成じて好妙相好なり、若し種種の根造作已訖れば卽ち輪呪を須ひて心識を付せしむ謂く方寸の所の中に欟堨那羅字輪を付す、卽ち呪を誦じて言く

⑨⑨⑨⑨⑨⑨⑨⑨⑨⑨⑨⑨⑨⑨⑨⑨於呼反〓々々々々々々々々々々々々々々々
々々那闍反〓〓々々々々々々々々々々々々々々伊因反〓〓々々々々々々々々々々々々
々々々々々毗入反娑婆阿訶阿呵

若し此の神呪一萬八千四百五十返を誦し已訖れば卽ち心量具に了せざるところなし、已に造像門を說きつ。次に禱祀門を說かん、天像を成ぜんとするには神呪門を以ふるに圓かに具して闕けたること無し、何の不足あつてか更に祀門を以ふる、神呪門を以ふるに其の理足れりと雖も而も時節の量久しく住することを得ず、唯し七日量にして此れに過ぎざるが故に、若し祀門を以ふれば其の像を止住せしむること或は十七日或は百七日乃至千日なるが故に此の義を以ての故に禱祀門を以ふる、禱祀門とは其の相云何ん、謂く像を造り已ぬれば彼の像の前の中に種種の供を以て而も祀事を作す、祀事已に訖んぬれば則ち彼の面像喜樂し受用す、受用已に訖つて卽ち人に告げて言く一日二日三日四日五日六日七日及び一百日乃至千萬億日の中に我が身心を住めて汝が所樂に隨ひ、汝が所求に隨つて隨順して逆はじと、今この事を以て門の要と爲す、已に禱祀門を說きつ。次に神呪門

を説かん、前の二門を以ふるに其の理圓滿して闕失するところなし、何の義を以ての故にか更に神呪を須ふる、所謂二種の事闕失するが故に、云何が二とする、一には莊嚴、二には往來なり、此の義を以ての故に神呪門を立つ、若し天上の種種の妙莊嚴の具を成立せんが爲には當に何等の神呪を須ふべきや、謂く若し天莊嚴の具を作さんが爲には即ち呪を誦して言く

唵嚩啼帝嗙哆闍毗那阿呵尸鍵鄔嚩迦尸帝彌佉尸陀叉羅阿嚩伊嚩嚩嚩㖡鄔呵那鄔呵
々々々々々鄔呵那阞々々々々々々々々阻立反　跋阿跋阿、阿々々々々跋摩尸嚚々々
々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々反語巾　娑婆訶阿訶阿呵

若し此の神呪二萬三千遍を誦じ已訖れば便ち時に從つて種種の勝妙の天の莊嚴の具皆悉く出現して餘なく現前す、出現し已訖ぬれば即ち當處に隨つて身分の中に至つて周遍し莊嚴す若し往來に障碍あることなからんが爲には當に何等の神呪を須ふべきや、謂く若し自在に往來せんと欲ふが爲には即ち呪を誦じて言く

阿婆々々、㗚那囉、呵囉啼、鳩那尸、嚩呵陁喃、訶㗚伊㖡、阿喃阿㗚伊耶、阿
阿喃阿喃、阿々々㗚耶、婆婆阿喃、阿阿耶、尸那尸那、嚩尸那嚩尸那、哆陀帝、
揭囉揭囉婆揭那、陁陁帝哆哆提、坦坦那娑婆訶、阿阿訶呵

若しこの神呪二萬一千遍を誦じ已訖れば所造の像或は往き或は來り、或は飛び或は騰つて、時に隨ひ處に隨ひ求むるに隨ひ樂ひに隨つて障碍する所なく自在に往來す、今此の事を以て門の要と爲す、已に神呪門を説きつ。次に誦經門を説かん、何の義を以ての故にか此の門を建立する、謂く威德方を增さしめんが爲の故に此の事、云何ん彼の佛弟子種種の門を以て對治する時の中に若し此の誦經門を須ひざれば、力對し難きが故に若し是くの如くならば何等の經を誦ずる、謂く八陁多經、魔頭陁經、婆鄔舍經等なり、此れ等の經を誦じて以て對門と爲す、此の義を以ての故に誦經門を立つ、已に誦經門を説きつ。次に阿呼門を説かん、何の義を以ての故にか、此の門を建立する、謂く能く事を成ずる要の言説なるが故に、この義云何ん、若し事を成ぜんが爲には餘の言語を須ふれば即ち成就せず、若し事を成ずる時は是くの如くの説を作して阿呼阿と呼べば即便ち成就す、所以何となれば不共説なるが故に、この義を以ての故に阿呼門を立つ。已に阿呼門を説きつ。次に勸請門を説かん、何の義を以ての故にか此の門を建立する、禮を作さんが爲の故に此の義云何ん、爲す所あらんが爲には自の上人を仰いで更に勸請するが故に、この義を以ての故に勸請門を立つ、已に造作天像差別門を説きつ。次

に造作菩薩形相門を說かん、此の門の中に就いて亦六門を具す、然して通と及び別と差別なるのみ、通は謂く禱祀門、神呪門、阿呼門、勸請門なり、別は謂く造像門、誦經門なり、別相の二の中に初め造像門その相云何ん、謂く前の說の如く九種の處の中に各陁羅尼神呪を誦ずるが故に各その相云何ん、若し頭像を造作せんとする時の中には卽ち呪を誦して言く

哆々々々阿哆々々帝婆々々々伊婆々々々帝叉娑叉娑囉羅帝罰々々々々々々々嚩呵帝娑婆訶阿阿訶呵

若しこの神呪八千四百五十遍を誦じ已訖れば卽ち頭の像具足し成立す、若し面の像を造作せんとする時の中には卽ち呪を誦じて言く

叩哪鄔婆帝呵々々々那々々々嚩佉嗢鳩馱尸陁帝摩呵阿嚩呵吸鄔帝娑婆訶阿阿訶呵

若しこの神呪三千七百遍を誦じ已訖れば卽ち面の像具足し成立す、若し眼の像を造作せんとする時の中には卽ち呪を誦じて言く

馱跋尸哪嚩尼佉娑坦囉帝遮闍哆毗坐嘿阿嚩尸陁嚩尸陁尼迦哪迦哪僧佉哪訶娑尼娑婆訶阿呵

若しこの神呪八千四百五十遍を誦じ已訖れば卽ち眼の像具足し成立す、若し耳の

像を造作せんとする時の中には卽ち呪を誦じて言く

阿嚩々伊嚩々婆嚩々哆嚩々鍵鳩提迦鳩帝毗那尸迦々々々々々々婆婆訶阿阿訶呵

若しこの神呪一萬一千遍を誦じ已訖れば卽ち耳の像具足し成立す、若し鼻の像を造作せんと爲る時の中には卽ち呪を誦じて言く

婆々々々毗婆々々帝鍵那尸婆婆訶阿阿訶呵

若し此の神呪十萬八千遍を誦じ已訖れば卽ち鼻の像具足し成立す、若し舌の像を造作せんと爲る時の中には卽ち呪を誦じて言く

羆帝羆帝罰帝罰帝那陀那陀鄔提鄔提婆婆訶阿阿訶呵

若し此の神呪五萬七千遍を誦じ已訖れば卽ち舌の像具足し成立す、若し身の像を造作せんとする時の中には卽ち呪を誦じて言く

坦毗提坦毗提哆哆坦毗提那囉尸帝婆婆訶阿阿訶呵

若し此の神呪十萬四千遍を誦じ已訖れば卽ち身の像具足し成立す、若し手の像を造作せんと爲る時の中には卽ち呪を誦じて言く

陀提陀提喃帝喃帝叩陀叩陀哪囉哪囉婆婆訶阿阿訶呵

若し此の神呪八萬一千遍を誦じ已訖れば卽ち手の像具足し成立す、若し足の像を

造作せんとする時の中には即ち呪を誦じて言く

嚩吱陀嚩吱陀佉枳囉嚤呵尼咤喃尸囉囉囉囉娑婆訶阿阿訶呵

若し此の神呪三萬二千一百遍を誦じ已訖れば即ち足の像具足し成立す。根を造作し已ぬれば即ち輪呪を須ひて心識を付せしむ、謂く方寸の所の中に欄揭那羅字輪を付す、即ち呪を誦じて言く

(内)(内)(内)(内)(内)(内)(内)(内)(内)(内)(内)(内)隱天反　啞々々々々々々々々々々々々於阿反　呇呇
々々々々々々々々々々々々弗八反　昊々々々々々々々々々々々去言反　娑婆訶阿
阿訶呵

若し此の神呪二萬三千遍を誦じ已訖れば即ち心識具して了せざるところなし、已に造像門を說きつ。次に誦經門を說かん、その相云何ん謂く毗舍闍尼經、阿佉多陀經、優婆羅尸經、提叉佉羅經等を誦ずるが故に、已に造作菩薩形相門を說きつ。次に造作如來形像門を說かん、此の門の中に就いて亦六門を具す、然れども通と及び別と不同なりのみ、別は謂く造像門なり、通は謂く所餘の五門なり、造像門とは其の相云何ん、謂く前の說の如く九處の呪の中に其の次第の如く各一句を加ふ、若し心に付する呪は各別なり而已、加ふる所の句とは其の相云何ん呪に言く

那那阿那羅婆婆嚩哆帝鳩奢陁尼嚤呵尸咤娑闍尼枳陁帝嚩哆帝汝郞提陁陁帝叉婆尼なり心を付する呪その相云何ん、呪に言く

幽々々々々々々々々々々々々々々伊入反　䭲々々々々々々々々々々々々々々阿含反　罧々
々々々々々々々々々々々々々只因反　䰛々々々々々々々々々々々々々伊九反

若し此の神呪一萬八千遍を誦じ已訖れば即ち心識具して了せざる所なし、已に所治を說きつ。次に能治を說かん、若し清妙の天子天女の像、行者の所に來到せん時邪正の差別云何が知るや、此れは何かんぞ疑ふ雜亂に由るが故に此の義云何ん、謂く無量光明契經の中に是くの如くの說を作す、若し修行者その心清淨なれば無量無邊のもろ〳〵の天子、無量無邊のもろ〳〵の天女種種の妙花を雨らし、種種の所有の名香を燒き、種種の微妙の妓樂を出現し、種種の勝妙の莊嚴の具を開布して甚だ愛樂すべき貌にして行者の所に來到して行者を供養す、所以何となれば其の法を重ずるが故なり、彼の外道の人亦天象を作して行者の所に來到すること前の如く異なることなくば其の邪正の差別了[illegible]きこと難きが故に此の疑を解釋するに則ち六門あり、云何か六とする、一には呪知根壞不壞門、二には嚴具圓珠有無門、三には身光眼入不入門、四には頭髮末結不結門、五には雙背無所

取着門、六には俱取攝不除遣門なり、これを名けて六となす、言咒知根壞不壞門とは謂く對治の陀羅尼呪を誦ずるに若し眞實の天は其の根を壞せず、若し虛僞の天は諸根壞失して皆所有なり、之を以て別と爲し呪を誦する形相その相云何ん、謂く二意あるが故に云何が二とする、一には外呪を誦ずるが故に、二には內呪を誦ずるが故に、外呪を誦ずる時、若し眞實の天は增減異なること無し、若し虛僞の天は其の諸根の相漸漸に增長す、神呪を誦する相その次第の如く數量を超えず、如如に誦ずるが故に之を以て別と爲す、內呪といふは其の相云何ん、謂く且く眼を呪ずるときは卽ち呪を誦じて言く

坦陞哆嚩呵鳩尸帝迦那毗只帝嚩多尼嘶鄔婆呬陀尼娑坦奢毗呵哪帝阿枳尼嚩枳尼陀帝娑婆呵帝嚩呵娑婆訶帝娑婆呵

若しこの神呪三七遍を誦ずれば眼根壞失して皆所有なし、所餘の諸處にも名神呪あり、而れども要なきが故に略去して釋せず、已に呪知根壞不壞門を說きつ。次に嚴具圓珠有無門を說かん、その相云何ん、謂く若し眞實の天は其の莊嚴の具の中に十の圓珠あり、若し虛僞の天は其の莊嚴の具の中に此の珠なきが故に之を以て別と爲す、已に嚴具圓珠有無門を說きつ。次に身光眼入不入門を說かん、其の相云何ん、謂く且く彼の行者目を閉づる時の中に若し眞實の天は其の身光明、眼の內に入る、若し虛僞天は眼の內に入らず、之を以て別と爲す、已に身光眼入不入門を說きつ。次に頭髮末結不結門を說かん、其の相云何ん、謂く髮相を見るに若し眞實の天は兩の末相結へり、若し虛僞の天の兩の末互に解けたり、之を以て別と爲す、已に頭髮末結不結門を說きつ。次に雙背無所取着門を說かん、その相云何ん、謂く若しは眞實の天にもあれ若しは虛僞の天にもあれ唯し自の妄心の現量の境界なり、その實あることなしと觀じて所著なきが故に、之を以て治と爲す、已に雙背無所取著門を說きつ。次に俱取攝不除遣門を說かん、その相云何ん、謂く若しは眞實の天にもあれ若しは虛僞の天にもあれ皆一眞如なり、皆一法身なり、別異あることなしと觀じて斷除せざるが故に之を以て治と爲す、已に對治天像除遣門を說きつ。次に對治菩薩形像門を說かん、この門の中に就いて卽ち二門あり、云何が二とする、一には誦呪了知邪正門、二には智慧觀察無著門なり、誦呪門といふはその相云何ん、謂く且く心を呪ずるときは卽ち呪を誦じて言く

坦阿哆那毗提嚩鳩帝娑尸婆婆尼嘶呶提闍那那尸鄔嚩阿只陀阿只陀娑婆呵

若しこの神呪八百十遍を誦じ已訖れば則ち彼の菩薩漠漠として動せず、譬へば木

石の如し、之を以て治と爲し、一切の根及び莊嚴の具の中に名神呪等の多種の門あり而れども要なきが故に略して而も說かず、已に呪了知邪正門を說きつ。次に智慧觀察無有門を說かん、その相云何ん、謂く智慧を以て諸法の空無相の理を觀察して執着なきが故に、已に對治菩薩形像門を說きつ。次に對治如來形像門を說かん、其の相云何ん、此の門の中に就いて亦二門を具す、名前の說の如し、神呪門といふは其の相云何ん、謂く且く光明を呪するときは卽ち呪を誦じて言く

哆咥坦唵那羅帝瓮枳羅叩馱尼闍鍵尼婆鍵尼摩那鄔婆帝闍摩羅婆婆呵

若しこの神呪四百遍を誦ずれば若し實の如來はその身の光明則ち損減せず、若し僞の如來は其の身の光明則便ち損減して闇の色を爲す、之を以て別と爲す、彼の第二の門は前きに說くことろを觀じて審に思惟すべし、外道の人あつて一切種種の異類を造作して行者の所に來到して行者の心を亂らば爾の時に當に各何等の呪を誦ずべき、謂く神呪あり、これ通にして別にあらず、所謂如來惣持法藏因緣契經の中に說く所の神呪大陀羅尼なり、彼の契經の中に如何んが說くや、謂く彼の契經の中に是くの如くの說を作す、爾の時に文殊師利則ち佛に白して言さく、世尊一切種種の邪道の類行者の所に來到して行者の心を亂らん時當に何等

の門を須ひてか而も以て除遣すべき、於是如來則ち文殊師利に告げて言はく、深法門あり、能善く通じて一切の邪道を治す、所謂諸佛無盡藏無碍自在印陀羅網隨順隨轉惣持大陀羅尼法門なり、文殊師利　諦に聽き諦に聽き善く思ひ之を念せよ、我れ當に汝が爲に分別し解說すべし、文殊師利言ふところの通達無碍自在惣持大陀羅尼法門とは十方三世の一切諸佛の護念したまふところの寶藏なり、十方三世の一切菩薩の常に誦持したまふところの大軌なり、則ち十方三世の一切の神王及び一切天人の皆悉く禮拜し供養する所の廣大の福田なり、是於世尊卽ち呪を誦じて言はく

坦咥哋那羅尸伽諾鄔帝瓮嚩哆娑毗提阿呵囉陀尼婆伽尸帝馱馱鄔摩嚩闍那筏尼帝伽坦尼娑哪哆鳩嚧那婆提娑訶摩伊婆哆尼毗舒訶鄔佉哆陀尼罷罟提叉阿哪鍵那尸娑婆呵

若しこの神呪八千七百五十一遍を誦し已訖れば其の所應に隨つて一切の邪類ことく退失して惱亂すること能はざるが故に、本の如し、或は天像と菩薩像とを現じ亦如來像とを作つて相好具足の故に已に出現人相合信門を說きつ。次に出現言說亂識門を說かん、此の門の中に就いて則ち三門あり、云何が三とする、一には

說陀羅尼門、二には說修行因門、三には說果滿德門なり、是を名けて三とす、是くの如くの三說は各何れの人說くぞや、所謂若し天の像は多く陀羅尼を說き、若し菩薩の像は多く行因を說き、若し如來の像は多く果德を說く、所以何となればば各自得を說けば行者信ずるが故に、所說の陀羅尼當に其の相云何ん、所謂而も能く光明連續陀羅尼を說く○が故に、若し此の呪を誦じては當に何なる利かあるべきや、謂く若し此の呪を誦ずれば自身の光明、他身に續くが故に、この故に天像到來して彼の修行者の所の中に此の陀羅尼門を說き已訖れば卽ち彼の行者古は光明なけれども今光明あつて極めて歡喜するが故に、是くの如くの念を作す、我れ今修行の力を承くるが故に今是くの如くの殊勝の光明ありと自の正行を亂して外の邪網に入る、此の義を以ての故に彼の天像、陀羅尼門を說く、則ち呪を誦じて曰く

阿嚩哆嚩嚩阿婆尸那佉耶鄔婆娑尼帝佉唧呵囉伽帝怛哆婆尸呵筏那鳩筏帝迦摩嚈囉叉囉怛尼陀唧哆陀尼娑婆呵囉婆々々々呵囉阿哆尼婆哆尼娑婆阿呵

若し此の神呪五千三百遍を誦じ已訖れば卽ち光明相續して一と作る、その時に行者卽ち呪を誦じて言ふ

坦咥哆漕嚈尼阿婆囉陀帝叉跋那尸唧嚩鄔提婆佉那羅帝毗呵鄔帝跋跋那提多筏陀阿摩囉娑婆呵

若し此の神呪一百遍を誦ずれば彼の身の光明斷絕して着かず終に惱を爲さず、本の如し、若し陀羅尼を說くが故に、已に說陀羅尼門を說きつ。次に說修行因門を說かん、修行因門、無量なることありと雖も而も六種の波羅蜜に出でず、この故に彼の像、修行者の爲に六の資粮を說いて彼の行者を亂して邪網に入れしむ、彼の外道の人當に何の利あつてか是くの如くの說を作して行者を亂しむ、彼の修行者當時意樂、一切の惡を斷じ一切の善を修し因行を圓滿せんとして闕失する所なきをもつて彼外道の人同心を示現して正道を捨離し邪道に趣向せしむるが故に、本の如し、若しは布施と持戒と忍辱と精進と禪定と智慧とを說く故に、已に說修行因門を說きつ。次に說果滿德門を說かん、圓滿果門、無量なることありと雖も而も寂靜涅槃界に出でず、この故に彼の像、修行者の爲に涅槃の德を說いて彼の行者を亂して邪網に入れしむ、彼の外道の人當に何の利あつてか是くの如くの說を作して行者を亂るや、彼の修行者因を修する意趣は當に果を證すべきが故に、この故に外道行者の欲求するところ、殊勝の果德を出現して彼の行者の心をして能

く邪道に愛着し趣向せしむ、本の如し、或は平等の空と無相と無願と無怨と無親と無因と無果と畢竟空寂なるこれ眞に涅槃なりと説くが故に、已に出現言説亂識門を説きつ。次に得三世智惑人門を説かん、是くの如くの三達智各その相云何ん、所謂もし過未の二達智は各自境に達すること其の最遠際は八萬劫量なり、その最近際は能善く經一生のことを通達す、本の如し、或は人をして宿命の過去の事を知り亦未來のことを知らしむる故に、現達智といふは則ち是れ他心智なり、所謂而も能く現在の人の種種の心に達するが故に、本の如し、他心智を得るが故に、已に得三世智惑人門を説きつ。次に不離世間縛纏門を説かん、謂く外道の人、一億四萬六千種のもろ〳〵の世論の辯と十萬八千種のもろ〳〵の戲論の才とを成就して衆生を縛纏し世間に止住して出離し得ざらしむるが故に、本の如し、辯才無碍能く衆生をして世間の名利の事に貪着せしむるが故に、已に不離世間縛纏門を説きつ。次に心性無常生亂門を説かん、所謂堅固の信を破壞して而も能く無常の心を發して修行の足を斷ち趣入の路を絶つて邪網に引入し無性に及ばしむるが故に本の如し、又人をして數瞋り數喜んで性常准なることなく、或は慈愛多く睡多く病多く其心をして懈怠ならしむ、或は卒に精進を起して後に便ち休廢して不信を生ぜしむ、疑多く慮多からしむ、或は本の勝行を捨て、更に雜業を修す、若し世事に着して種種に牽纏するが故に、已に心性無常生亂門を説きつ。次に令得邪定非眞門を説かん、謂く外道の人二十一種の邪三昧を得しめて修行者を亂して邪網に入るが故に、本の如し、亦能く人をしてもろ〳〵の三昧の少分の相似を得しむ、皆これ外道の所得なり、眞の三昧にはあらず、或は復人をして若しは一日若しは二日若しは三日乃至七日定の中に住せしめて自然の香美飲食を得て身心適悅して飢せず渴せざらしめて人をして愛着せしむ、或は亦人をして食に分齊なくして乍に多く乍に少くして顏色變異ならしむるが故に、已に令得邪定非眞門を説きつ。次に勸請行者離邪門を説かん、勸請行者離邪門といふは智慧を勸修し諸善分別をもて愚痴の病を除いて邪論の謬を遣るが故に、本の如し、この義を以ての故に行者常に應に智慧を以て觀察して此の心をして邪網に墮せしむることなかれ、當に正念を勸めて不取不着にして能くこのもろ〳〵の業障を遠離するが故に、已に勸請行者離邪門を説きつ。次に簡擇眞僞令了門を説かん、所謂世間の中に隨順するを僞の三昧と名け、若し出世間の中に隨順するを眞の三昧と名く、二種の三昧是くの如く知るべし、本の如し、應に知るべし外道所有の三昧は

皆こと〳〵く見愛我慢の心を離れず、世間名利恭敬に貪着するが故に、眞如三昧とは見相にも住せず、得相にも住せず乃至出定にも亦懈慢なし、所有の煩惱漸漸に微薄なり、若し諸の凡夫此の三昧の法を習はずして如來種性に入ることを得といはば是の處り有ることなけん、世間の諸禪三昧を修して多く味著を起せば我見に依つて三界に繫屬することを以て外道と共せり、若し善知識の所護を離れぬれば外道の見を起すが故に、故に已に廣釋魔事對治門を說きつ。次に讃歎三昧功德門を說かん、

本に曰く復次に精勤して專心に此の三昧を修學するものは現世に當に十種の利益を得べし云何が十と爲る、一には當に十方の諸佛菩薩の爲に護念せらる、二には諸魔惡鬼の爲に能く恐怖せられず、三には九十五種の外道と鬼と神との爲に惑亂せられず、四には甚深の法を誹謗する重罪業障を遠離して漸漸に微薄なり、五には一切の疑ともろ〳〵の惡覺觀とを滅す、六には如來の境界に於て信じて增長することを得、七には憂惱を遠離し生死の中に於て勇猛にして怯からず、八には其の心柔和にして憍慢を捨て、他人の爲に惱まされず、九には未だ定を得ずと雖も一切の時一切の境界の處に於て則ち能く煩惱を損減して世間を樂はず、十には若し三昧を得ればの一切の音聲の爲に驚動せられず。

論じて曰く此の文の中に就いて卽ち二門あり、云何が二とする、一にはこれ惣標門、二にはこれ散說門なり、惣標門といふは惣じて所說を標するが故に、本の如し、復次に精勤して專心に此の三昧を修學するものは現世に當に十種の利益を得べきが故に、散說門の中に自ら二門あり、云何が二とする、一にはこれ惣問門、二には是れ別說門なり、惣問門といふは惣じて所說を問ふが故に、本の如し、云何が十とするが故に、別說門の中に就いて故に十種の勝妙の功德あり、一の眞定に由て成就する所なり、云何が十とする、一には守護の功德常に一切無量無邊の諸佛菩薩の爲に護念せらる、が故に、本の如し、一には常に十方諸佛菩薩の爲に護念せらる、が故に。二には怖魔の功德能善く一切の魔を降伏するが故に、本の如し、二には諸魔惡鬼の爲に能く恐怖せられざるが故に。三には出道の功德能善く一切の外道ともろ〳〵の邪道とを出離するが故に本の如し、三には九十五種の外道鬼神の爲に惑亂せられざるが故に。四には離謗の功德能善く大乘等を誹謗する諸罪を遠離するが故に、本の如し、四には甚深の法を誹謗することを遠離すれば重罪業障漸漸に微薄の故に。五には決疑の功德能善くもろ〳〵の疑惑を決斷するが故に、

本の如し、五には一切の疑と諸の惡覺觀とを滅すが故に。六には深信の功德、勝妙の境に於て樂信の心を起して更に轉深きが故に本の如し、六には如來の境界に於て信じて增長することを得るが故に。七には勇猛の功德、衆生界を緣して大悲心を起し萬行を集成して懈怠なきが故に、本の如し、七には憂惱を遠離して生死の中に於て勇猛不怯の故に。八には無我の功德能善く一切我慢の作意を斷除す、皆これ佛の淸淨の意なるが故に、本の如し、八には其の心柔和にして憍慢を捨てゝ他人の爲に惱まされざるが故に。九には未だ定を得ずと雖も一切の時一切の境界の處に於て能く煩惱を損滅して世間を樂はざるが故に。十には寂靜の功德、一切のもろ〳〵の散動の境界に於て其の心安定にして動あることなきが故に、本の如し、十には若し五味を得れば外緣の一切の音聲の爲に驚動せられざるが故に、其の次第の如く數量を飽さず、心の波を止めて審に思擇すべし。

釋摩訶衍論卷第九　終

釋摩訶衍論卷第十

龍樹菩薩造

已に讃歎三昧功德門を說きつ。次に兩輪具闕益損門を說かん、本に曰く

また次に若し人唯し止をのみ修すれば、則ち心沈沒し或は懈怠を起し衆善を樂はず大悲を遠離す、この故に觀を修すべし、觀を修習すとは當に一切世間有爲の法は久しく停ることを得ることなし須臾に變壞し一切の心行は念念に生滅す、是れを以ての故に苦なりと觀ずべし、過去所念の諸法悅忽として夢の如しと觀ずべし。現在所念の諸法は猶し電光の如しと觀ずべし、未來所念の諸法は猶し浮雲の忽爾に而も起するが如しと觀ずべし。世間一切の有身はことゞく皆不淨なり種種の穢汙一として樂ふべきことなしと觀ずべし。是くの如く當に念ずべし。一切衆生は無始世より來た皆無明に熏習せらるゝに因るが故に心をして生滅せしめて已に一切の身心の大苦を受く、現在にも卽ち無量の逼迫あり、未來の世苦も亦分齊なし、捨て難く離れ難く而も覺知せず衆生是くの如し甚だ愍むべしと爲す。この思惟を作して卽ち勇猛に大誓願を立つべし願くは我が心をして分別を離れしむるが

故に遍く十方に於て一切の諸善功德を修行して其の未來を盡くし無量の方便を以て一切の苦惱の衆生を救拔して涅槃第一義の樂みを得しめんと、是くの如くの願を起すを以ての故に一切時一切處に於て所有の衆善己が堪ふるに隨つて能く捨てずして修學し心に懈怠なく唯し坐時に止を專念するをば除く、若し餘の一切には悉く當に應作不應作を觀察すべし。若しは行若しは住若しは臥若しは起皆止觀俱行すべし、所謂諸法は自性不生なりと念ずと雖も而も復乃ち因緣和合善惡の業と苦樂等の報とは不失不壞なりと念ずべし。因緣善惡の業報を念ずと雖も亦卽ち性不可得なりと念ずべし。若し止を修するものは凡夫の世間に住着するを對治し能く二乘の怯弱の見を捨つ、若し觀を修するものは二乘の大悲を起さざる狹劣の心過を對治し、凡夫の善根を修せざるを遠離す、この義を以ての故にこの止觀門をば共に相助成して相捨離せざるべし、若し止觀具せざれば卽ち能く菩提の道に入ること無し。

論じて曰く、この文の中に就いて卽ち六門あり、云何が六とする、一には示闕觀止輪失門、二には顯示修行觀輪門、三には緣衆生界立願門、四には兩輪俱轉不離門、五には顯示兩輪所治門、六には惣結兩輪俱轉門なり、これを名けて六と爲す。第一の門の中に就いて則ち四の過失あり。云何が四とする、一には沈淪の過失、その心昧略にして覺了すること能はざること摩鍵訶尸闍室の中に入るが如くなるが故に、本の如し、又次に若し人唯止を修すれば心沈沒の故に。二には不勤の過失、その心懈怠にして精進なること能はず、阿那毗提人の如くなるが故に、本の如し、或は懈怠を起す故に。三には背善の過失、その心專一にして應作不應作を分別すること能はざること摩訶彌尸人の如くなるが故に本の如し、衆善を樂まざる故に。四には離悲の過失、その心安寂にして大慈悲心を發起すること能はざること、壞根の人の所自欲の中に更に增さゞるが故に本の如し大悲を遠離する故にこの故に觀を修すとは卽ちこれ觀と俱轉するなり。已に示闕觀止輪失門を說きつ。次に顯示修行觀輪門を說かん、この門の中に就いて則ち三門あり云何が三とする、一には苦相觀門、二には無常觀門、三には不淨觀門なり、これを名けて三となす、初めの苦相觀門の中に就いて則ち二種あり、云何が二とする、一には壞苦、二には行苦なり、壞苦とは一切の有爲清淨の法は能く一切の不清淨の法を壞し亦一切のもろ〳〵の不清淨の法は能く一切の清淨の法を壞するが故に、また次に二種の世間は互相に破壞するが故に、云何が二とする一には具足一切世間、二には

妄想有爲世間なり、かくの如くの二種の世間の法は相に破壞するが故に、この故に說いて壞苦といふ而已、若しこの觀を修しては當に何の利をか得べき所謂一自作一の甚深の法を成就するが故に、本の如し、觀を修習すとは當に觀ずべし、一切世間の有爲の法は久しく停ることを得るなり、須臾に變壞の故に。行苦といふは一切の心行は念念の中に於て常恒に遷轉して速生速滅す、この處より彼の處に至ることと能はざるが故に、本の如し、一切の心行は念念に生滅す、これを以ての故に苦の故に已に苦相觀門を說きつ。次に無常觀門を說かん、この門の中に就いて則ち三種あり、云何が三とする、一には已過の無常過去の諸法は前には有れども後には無し、譬へば彼の夢の熟眠のときには有れども已に乃ち覺悟しぬるときには有なること無きが如くなるが故にと。二には今有の無常現在の諸法は古は無けれども今は有なり、譬へば電光の卽時に便ち滅して久しく停ること能はざるが如くなるが故に、本の如し、觀ずべし現在の所念の諸法は猶し電光の如くなるが故にと。三には當有の無常未來の諸法は自性あることなけれども而も忽然として至る、譬へば浮雲の有所を知らざれども而も忽然として起して十方に遍ずるが如くなるが故に、本の如し、觀ずべし未來の所念の諸法は猶し浮雲の忽然に而も起るが如くなるが故に、已に無常觀門を說きつ。次に不淨觀門といふは種種の身を緣じて不淨の解を作す。貪を遠離するが故に、本の如し、觀ずべし世間一切有身は皆ことごとく不淨にして種種の穢汙として樂ふべきなきが故に、已に顯示修行觀輪門を說きつ。次に緣衆生界立願門を說かん、この門の中に就いて卽ち二種あり、云何が二とする、一には緣衆生作思惟門、二には建立誓願遍布門なり、これを名けて二と爲す、緣衆生作思惟門といふは所謂三界の中の無量無邊の一切衆生を緣じて是くの如くの念を作す、無始より來た根本無明に覆藏せらるゝが故に、自の本覺淸淨の佛を棄背して原に歸るに日なく無明藏を出ること更にまた時遠し、我れ若し悲心を發さずして攝取せざれば又之き又之いて唯し劫數を過ぐとも正覺を取らん期實に其の際なきをもて無邊の大悲心を發起するが故に、本の如し、是くの如く當に念ずべし一切衆生は無始世より來た皆無明に因て熏習せらるゝが故に心をして生滅せしめ已に一切の身心の大苦を受く、現在に則ち無量逼迫あり未來の世苦も亦分齊なし捨てがたし離れがたくして覺知せず、衆生の是くの如くなる甚だ愍むべしと爲す故に、建立誓願遍布門と言ふは所謂かくの如くの思惟を作し

已訖つて則ち大誓願を立つ、十方世界の微塵數の光明般若を起し、十方世界の微塵數の種種の心相に達し、十方世界の微塵數の一切のもろ〳〵の煩惱業鄣の海を對治し、十方世界の微塵數の行因海を圓滿し、十方世界の微塵數の果德を證得して皆ことゞく餘なからしむるが故に、本の如し、此の思惟を作して則ち勇猛に大誓願を立つべし、願はくは我が心をして分別を離れしむるが故に十方に遍じて一切の諸善功德を修行するに其の未來を盡くして無量の方便を以て一切の苦惱の衆生を救拔して涅槃第一義の樂みを得しむるが故に、已に緣衆生界立願門を說きつ。次に兩輪俱轉不離門を說かん。所謂かくの如くの願を起し已訖て則ち直に行因の海を修習するが故に、若し願海を起して勤に修行せざれば圓滿の果を莊嚴することを能はざるが故に、若し修行を爲さんには當に如何んすべきや。謂く兩輪を具して偏なることを無からしむるが故に、兩輪を具する相は何れの契經の中にか分明に顯示する、謂く文殊師利發起十萬一千種甚深廣大圓滿陀羅尼開問問大覺尊益大衆海契經なり、彼の契經の中に如何が說くや、所謂彼の契經の中にかくの如くの說を作す、その時に文殊師利卽ち佛に白して言さく、世尊云何が名けて止觀俱行不相離門とする、我れ及び一切の無量無邊の大衆の海皆ことゞく不知不覺無明の海に入て通達することを能はず、如宜く世尊我等諸の迷へる子女を欲ふが爲に分明に顯示したまへ。

その時に世尊卽ち文殊師利に告げて言はく、諦に聽き諦に聽き善く思ひ之を念せよ、我れ當に汝がために分別し解說すべし。於是に世尊則ち伽陀を說いて言はく。

譬へば翼闕けたる鳥と一輪の車と一足の人同分と眼闕けて險に之く馬との高く遠く翔けり所應に隨つて運載し其の道路を遊行し惡趣の坑に墮ちざるあることなきが如く、若し一輪を具足して一輪を闕せる行者も亦復かくの如く知るべし、それ實に法性の虛空の中に乘じて量智、法藏海に翔けり入て義理の寶を運載するが如く、眞如平道の中に周遍く通じて遊行し、一切の魔と外道との邪見の深坑の中に坑に倒墮せざるあることなきを以ての故に、この故にもろ〳〵の行者、兩輪具足し轉じて終に捨離すべからず、若し修行者あつて此の兩輪を具せざれば終に無上大覺地に通達することを能はずと。

今この經文は何の義を明さんとする、謂く三昧を修習して寂靜の境に達し智慧を修習して散動の境を照して寂靜の中にありとも常に動を捨てず、散亂の中に

あれども常に寂を捨てずして而も相捨離せず俱行俱轉することを顯示せんが爲の故に、また次に三昧を修習して空無の境に達し智慧を修習して在有の境を照らして空にあつて有に着せず、有にあつて無に染せず、有無雙照し、偏邊あること無うして而も相捨離せず。俱行俱轉することを顯示せんと欲ふが爲の故に。また次に三昧を修習して平等の理に達し智慧を修習して差別の事を照らして理事雙べて達し偏邊あること無くして而も相捨離せず俱行俱轉することを顯示せんと欲ふが爲の故に。また次に止は當に觀を待つて方に建立することを得べし、自性の止にあらず、觀は當に止を待つて方に建立することを得べし、自性の觀にあらず、亦止あることなければ亦觀なきことを顯示せんと欲ふが爲の故に。また次に止則ちこれ觀なり、觀則ちこれ止なり、止觀一體にして差別なきことを顯示せんと欲ふが爲の故に。其の次第の如し審に思擇すべし、本の如し、是くのごとくの願を起すを以ての故に一切時に一切處に於て所有の衆善は己が堪能に隨つて修學を捨てず心に懈怠なし、唯坐時の止を專念するをば除く、若し餘の一切には悉く當に應作と不應作とを觀察すべし、若しは行、若しは住、若しは臥、若しは起皆止觀俱行すべし、所謂諸法の自性不生を念ずと雖も復則ち因緣和合の善惡の業と苦樂等の報とは失せず壞せずと念ず。因緣の善惡の業報を念ずと雖も亦則ち性不可得を念ずるが故に、已に兩輪俱轉不離門を說きつ。次に顯示兩輪所治門を說かん、若し行者あつて止輪を修習しては當に何れの過失を對治せんとかすべきや。謂く凡夫の衆生の着有の過失と二乘の衆生の樂空の過失とを對治して俱に絕離せんが爲の故に、本の如し、若し止を修せば凡夫の世間に住着するを對治し能く二乘の怯弱の見を捨つるが故に。若し行者あり觀輪を修習しては當に何れの過失を對治せんとするや、謂く二乘の衆生の遠離の大悲を對治して衆苦を救はざる下劣の過失は凡夫の衆生の常恒に懈怠にして精進なること能はず善品を修ぜず惡過失を樂ふ俱に出離せんが爲の故に、本の如し、若し觀を修するものは二乘の大悲を起さざる狹劣の心過を對治し、凡夫の善根を修せざるを遠離するが故に、已に顯示兩輪所治門を說きつ。次に惣結兩輪俱轉門を說かん、所謂惣じて如上所說の輪闕の行者の大なる過失を結するが故に、本の如し、この義を以ての故にこの止觀の門をば共に相助成して相捨離せず、若し止觀具せざれば則ち能く菩提の道に入ることなきが故に。已に兩輪具闕益損門を說きつ。次に勸劣向勝不退門を說かん。本に曰く、

また次に衆生初めてこの法を學して正信を求めんと欲ふに其の心怯弱なり、此の娑婆世界に住するを以て自ら常にもろ〳〵の佛に値うて親承し供養すること能はじと畏れ、懼らくは信心成就すべきことかたしと謂ふ、意退せんと欲はば當に知るべし如來に勝方便あつて信心を攝護したまふ、謂く意を專にして佛を念ずる因緣を以て願に隨つて他方の佛土に生ずることを得て常に佛を見るが故に求く惡道を離る修多羅に說くが如し、若し人西方極樂世界の阿彌陀佛を專念して所修の善根を廻向して彼の世界に生せんことを願求すれば卽ち往生することを得て常に佛を見るが故に終に退することあることなし、若し彼の佛の眞如法身を觀じて常に勤めて修習すれば畢竟じて生ずることを得て正定に住するが故に。

論じて曰く、この文の中に就いて卽ち七門あり、云何が七とする、一には顯示趣向假人門、二には歸依所學敎法門、三には厭惡處所退信門、四には如來方便殊勝門、五には承力得勝妙處門、六には得善處定不退門、七には引經證自所說門なり、

これを名けて七と爲す。顯示趣向假人門といふは所謂十信の位前の四種の心を得て更に勝進せざる下品の衆生を顯示するが故に、本の如し、また次に衆生の故に歸依所學敎法門といふは彼の十信の位の下品の衆生は甚深無極の大乘に歸依して初めて學習するが故に所謂一切諸佛の師としたまふところなり、三世も動せず四相も遷さず自然常住なる地前地上の大道路なるが故に、本の如し、初めて是の法を學ぶが故に、厭惡處所退信門といふは、彼の十信の位の下品の衆生は親り甚深の法門を聽受すと雖も而もその心根極めて下劣なるが故に、二の大事を怖れて勝進すること能はずして退せんと欲ふが爲の故に、云何が二とする、一には國土、二には勝緣なり、國土といふは卽ちこの娑婆世界は處所麁惡に衆生濁亂なり、淨心を發起して勤ろに修行せんとす、甚深切難なるが故に、所以何となれば彼の心中に於て違逆の境界、一切時に於き一切處に於て常恒に現前し心面の中に進んで捨離せざるが故に、勝緣といふは此の世界に於て依止濁亂し一切諸佛の出世することを極めて尠く無量の菩薩の感に赴く時節極めて遠し諸佛菩薩の世に出現したまふことは淸心の鏡の淨不淨に隨順するが故に、此の義を以ての故に、彼の修行者勝緣に値はざることは極めて怖畏するが故に退意を發するのみ本の如し、正信を求めんと欲ふにその心怯弱なり、この娑婆世界に住するを以て自ら常に諸佛に値うて親承し供養すること能はじと畏れ、謂うて信心成就すべきことかたしと懼れ、意に退せんと欲ふが故に。如來に方便殊勝門といふは謂くもろ〳〵の如來

に不可思議の甚深極妙の大方便あるが故に、能善く彼の人の信心を攝護したまふは轉勝進するが故に、云何なるをか名けて勝妙の方便とする所謂如來を專念するは方便なり、云何が專念、謂く專注の意をもて他方淨土の種種の依正を憶念す、その念を相續して絕たざらしむるが故に、本の如し、當に知るべし如來は勝方便に有して信心を攝護したまふ。謂く意を專にして佛を念ずる因緣を以ての故に、承力得勝妙處門といふは諸の如來の不可思議の方便力を以ての故に自の所願に隨つて則ち妙樂の土に往生することを得るが故に、本の如し、願に隨つて他方の佛土に生ずることを得るが故に、得善處定不退門といふは彼の土に生じ已つて眼に如來の相好を具したまへる像を見、耳に聖の深妙を說きたまふ梵音を聞いて永く惡名を離る、定めて動ぜざるによりて心海澄淨に身體明白なり、妙により正淸きが故に、本の如し、常に佛を見たてまつり永く惡道を離るるが故に、引經證自所說門といふは所謂說相屬當せる經本の辭を該攝して自の所說の解釋の文を贊するが故に、所引の經文は說明明なるが故に重釋を須ひず、本の如し、修多羅に說くが如し、若し人專ら西方極樂世界の阿彌陀佛を念じて修する所の善根廻向して彼の世界に生ぜんと願求すれば則ち往生することを得て常に佛を見たてまつるが故に終に退することなし、若し彼の佛の眞如法身を觀じて常に勤めて修習すれば畢竟じて生ずることを得、正定に住するが故の故に。

已に修行信心分を說きつ。次に勸修利益分を說かん。

本に曰く、是くの如くの摩訶衍は諸佛の秘藏なり我れ已に總說しつ。若し衆生あつて如來甚深の境界に於て正信を生ずることを得、誹謗を遠離し大乘道に入らんと欲はば當にこの論を持して思量修習すべし、究竟じて能く無上の道に至る、若し人この法を聞き已つて怯弱を生ぜずば當に知るべし此の人は定めて佛種を紹ぎ必ず諸佛の爲に授記せらるべし、假使人あつて能く三千大千世界の中に滿てる衆生を化して十善を行はしめんよりは、如かじ人あつて一食の頃に於て正しく此法を思はんには、前の功德に過ぎたり喩となすべからず。また次に若し人この論を受持し觀察し修行せんこと若しは一日、一夜せんに所有の功德無量無邊にして說くことを得べからず、假令十方一切の諸佛各無量無邊阿僧祇劫に於て其の功德を歎くとも亦盡くすこと能はじ、何を以ての故に、謂く法性の功德は盡くることあることなきが故に、この人の功德も亦復かくの如し、邊際あることなし、それ衆生あつて此の論の中に於て毀謗して信ぜざらん所獲の罪報は無量劫を經て大苦惱

を受くべし、この故に衆生但し仰信すべし、誹謗すべからず、深く自を害し亦他人を害し一切三寶の種を斷絶するを以てなり、一切の如來も皆この法に依て涅槃を得たまふ故に、一切の菩薩もこれに因つて修行して佛智に入るを以ての故に、當に知るべし過去の菩薩も已にこの法に依て淨信を成ずることを得、現在の菩薩も今この法に依つて淨信を成ずることを得、未來の菩薩も當にこの法に依て淨信を成ずることを得べし、この故に衆生勤めて修學すべし。

論じて曰く、この文の中に就いて則ち八門あり、云何が八とする、一には擧前所說惣結門、二には擧益勸人令修門、三には顯離疑信功德門、四には比類爲對示勝門、五には擧受持功讃揚門、六には擧誹謗過令怖門、七には殊勝廣說離謗門、八には惣結修行勸人門なり、これを名けて八とす。擧前所說惣結門といふは謂く一の惣の字を以て八種の摩訶衍を惣結するが故に、何が故にか餘法を略して結せざるや、所謂本を擧げて其の末を攝するが故に、本の如し。かくの如くの摩訶衍は諸佛の秘藏なり我れ已に惣說の故に。擧益勸人令修門といふは所謂行因の海を集成して而も法身の果を莊嚴せんが爲には此の論を受持して義理を思惟し常恒に相續して斷絶せざるが故に、本の如し、若し衆生あつて如來の甚深の境界に於て正信を生ずることを得て誹謗を遠離して大乘道に入らんと欲はば當に此の論を持ちて思量し修習して究竟して能く無上の道に至るべきが故に。顯離疑信功德門といふは謂く衆生あつて此の摩訶衍の甚深極妙の廣大の法門を聞き已つて卽ち其の心の中に亦疑畏せず亦怯弱せず亦輕賤せず亦誹謗せず決定の心を發し堅固の心を發し尊重の心を發し愛信の心を發さば、當に知るべし、是の人は實に眞の佛子なり法種を斷せず僧種を斷せず佛種を斷せず、常恒に相續し轉轉增長して未來を盡くし亦諸佛の爲に親り授記せられ亦一切無量の菩薩のために護念せらるゝが故に、本の如し、若し人この法を聞き已つて怯弱を生ぜざれば當に知るべし是の人は定めて佛種を紹いで必ず諸佛の爲に授記せらるゝ故に。比類爲對示勝門といふは謂く若し人あつて能善く三千大千世界の中に遍滿せる衆生を攝化して皆悉く餘なくして十善を行ぜしめ、或は衆生あつて一食の頃に於て此の甚深の法に於て觀察し思量せん、若し此の二人の功德を校量せば彼の第一の人の所得の功德は甚極微少なること譬へば芥子を碎きて百分になせる一分の量の如し。この第二の人の所得の功德は甚極廣大なること譬へば十方世界を碎ける微塵數量の如くなるが故に、本の如し、假令人あつて能く三千大千世界の中に滿てる衆生を化して十善

を行せしめんよりは、如かじ人あつて一食の頃に於て正しく此の法を思へば前の功德に過たること喩となすべからざるが故に。擧受持功讃揚門といふは謂く若し人あつて此の論を受持し義理を觀察せんこと若しは一日、若しは一夜の中間所得の功德無量無邊にして言說すべからず、思量すべからず、若し假使十方三世の一切の諸佛十方三世界微塵數の舌を以て各各に皆悉く十方世界の微塵數の量の不可說劫に於て其の人の所有の功德を讃揚すとも亦盡くすこと能はず、所以何となれば法身眞如の功德は虛空界に等しうして邊際なきが故に何に況や凡夫二乘の人能くこれを稱歎せんや、一日一夜の多からざる、中間受持の人すら尙所得の功德不可思議なり、何に況や若しは二日若しは三日乃至百日の中に受持讀誦思惟觀察せば不可思議の中の不可說の中の不可說の故に、本の如し、また次に若し人この論を受持し觀察し修行せんこと若し一日一夜せん所有の功德無量無邊にして說くことを得べからず、假使十方一切の諸佛各無量無邊阿僧祇劫に於て其の功德を歎くとも亦盡くすこと能はじ、何を以ての故に謂く法性の功德は盡くることあること無きが故に、この人の功德も亦復かくの如し邊際あること無きが故に。擧誹謗過令怖門といふは謂く衆生あつて此の論敎に於て不信の心を生じ破謗して行せざらん。是くの如くの衆生の所得の罪報はもろもろの不可說不可說劫の中に於て苦の中の重き大苦を受くべきが故に、本の如し、其れ衆生あつて此の論の中に於て毀謗して信せざれば獲るところの罪報、無量劫を經て大苦惱を受くるが故に、この故に衆生但し仰信すべし誹謗すべからずとは則ちこれ惣結して上の決擇を說く、行者を勸請するなり、これより已下は其の因緣を作して重き過失を示す、謂くこの法の中に於て信せずして誹謗すれば自の善根を失し他の功德を損し、一切三寶の種を斷絕して續く期無きが故に、本の如し、深く自ら害し亦他人を害し、一切三寶の種を斷絕するを以ての故に、殊勝廣說離謗門といふは謂く十方三世のもろ〳〵の如來は一切皆悉く摩訶衍を以て其の根本と爲して正覺を成じたまふが故に、十方三世の無量の菩薩一切皆ことごとく摩訶衍を以て其の根本となして因海を具するが故に、是くの如くの重深の摩訶衍の法を若し衆生あつて不信の心を生じて誹論し誹謗せん、是くの如くの衆生をば亦一切の諸佛を斷伐すと名け、亦一切の菩薩を斷伐すと名け、亦自の如來藏の本覺の佛を斷絕すと名くるが故に、本の如し、一切の如來も皆この法に依て涅槃を得るを以ての故に、一切の菩薩もこれに因て修行して佛智に入るが故に、當に知るべ

し過去の菩薩も已に此の法に依て淨信を成ずることを得、現在の菩薩も今この法に依て淨信を成ずることを得、未來の菩薩も當に此の法に依て淨信を成ずることを得べきが故に、この故に衆生勤めて修學すべし。卽ちこれ惣結修行勸人門なり、審に思擇すべし。

已に勸修利益門を說きつ。次に迴向遍布門を說かん、本に曰く、

諸佛と甚深と廣大義と、我れ今分に隨つて惣持して說きつ、この功德を如と法と性とに迴して、普く一切の衆生界を利せん。

論じて曰く、此の一頌の中に就いて卽ち三種の門あり、云何が名けて三種の門とするや、一には攝前所說惣結門、二には展舒功德令廣門、三には施於衆生普利門なり、これを名けて三と爲す。初門の中に就いて則ち二種あり、云何が二とする、一には通惣攝前所說門、二には顯示能說字相門なり、その次第の如く審に觀察すべし。諸佛甚深廣大義とは則ちこれ通惣攝前所說門なり、所謂通じて三十三種の本數の法を攝するが故に、この義如何、諸佛といふは則ちこれ不二摩訶衍の法なり、所以何となれば此の不二の法を彼の佛に形ぶるに其の德勝れたるが故に、大本花嚴契經の中に是くの如くの說を作す、その圓圓海は諸佛を德すること勝れたり、其の一切の佛は圓圓海を成就すること能はず劣なるが故に、若し爾れば何が故にか分流花嚴契經の中に是くの如くの說を作す、盧遮那佛は三種世間を其の身心となしたまふ、三種世間に法を攝すること餘なし、彼の佛の身心も亦復攝せざるところあることなし。盧遮那佛は三世間を攝すと雖も而も攝と不攝との故にこの故に過なし、甚深といふは卽ちこれ兩重の八種の摩訶衍の本法なり、何の義を以ての故にか名けて甚深とする、是くの如くの兩重の摩訶衍の法は能入門に望むるに極めて甚深なるが故に、この義を以ての故に甚深の稱を立つ審に思擇すべし、廣大義といふは則ちこれ兩重の能入門の法なり、何の義を以ての故にか廣大義と名くる、かくの如くの兩重の能入門の法は皆悉く各各に能く自法を廣し能く自法を大にし能く自法のために名義と作るが故に、此の義を以ての故に廣大義の名字を建立す。已に通惣攝前所說門を說きつ。次に顯示能說字相門を說かん、我れ今隨分惣持說といふは、卽ちこれ顯示能說字相門なり、謂く惣の字を以て通じて一切種種の說を持するが故に、立義分の中に摩訶衍とは惣といふは則ちこれなり、何が故にか一字に通じて諸說を持するや、摩訶衍論は如意論なることを顯示せんと欲ふ爲の故に、已に攝前所說惣結門を說きつ。次に展舒功德令廣門を

說かん。迴此功德如法性といふは則ちこれ展舒功德合廣門なり、謂く自所作の功德を三處に迴向する故に、云何が三とする、一には眞如、二には一心法、三には本覺の佛性なり、これを名けて三と爲す、何の義を以ての故にか三處に迴向する、謂く自所作の功德を平等ならしめんと欲ふがための故に眞如に迴向す、或ひは自所作の功德を廣大ならしめんと欲ふがための故に一心に迴向す、或は自所作の功德を明了ならしめんと欲ふがための故に本覺に迴向す、是くの如く知るべし、是くの如く觀ずべし、是くの如く迴向するに何の利益かある。謂く衆多の故にこの義云何ん。譬へば一微塵を以て大地の中に置くに、置く所の微塵と彼の大地と等しうして差別なきが如く、迴向の法門も亦是くの如くなるが故に、又譬へば一注の水を用て大海の中に置くに置く所の水注と彼の大海と等しうして差別なきが如く迴向の法門も亦是くの如くなるが故に、又譬へば一の小有を破れば卽便ち大虛空と等うして差別なきが如く、迴向の法門も亦是くの如くなるが故に、已に展舒功德合廣門を說きつ。次に施於衆生普利門を說かん。普利一切衆生界といふは則ちこれ施於衆生普利門なり、謂く廣大圓滿の功德を擧げて周遍く衆生界を利益するが故に。歡喜大士心を至して無量の佛子衆海の中に勸む。我れ已に毛頭三角を超え、生死の四根を過ぎたり、第一無數粗滿し訖つて、第二僧祇に始めて無に入る。如宜しく汝等諸の佛子、左右の兩手を以て本釋の明鏡を捧げて、七識散盧の面に臨んで、六塵境界の垢を見て、法執人我の咎を洗ふべし。汝等佛子若しかくの如くせば法身應化の三身、伊字を舒ぶるが如く圓に現前し、常樂我淨の四德、達池に入るが如く具に出生せん。我れ四王自在處より、下大海の龍宮殿に入て、隨分にもろ〳〵の契經海を窺ふ、惣じて一百洛叉數あり、是くの如くの諸經の眞實の法、無量無邊の差別の義、摩訶衍論の立義の中に該攝し安立し具足して說けり、善男子善女人ありて若し自手に斯の論卷を捧ぐれば、百洛叉の經を捧ぐるものと名け、若し自口に本分を經誦せば百洛叉の經を誦ずるものと名けん、此の人所得の功德は十方世界の微塵數の諸佛及び大菩薩衆、名微塵數の舌相を出して、是くの如くの微塵數劫の中に息まず稱說すとも盡くすこと能はじ、何に況や其の義理を觀察し文の下の所詮を思惟せんをや、善男子善女人あつて、不信の心を生じて斯の論を謗せん、この人の得る所の罪業は、十方世界の微塵數の諸佛及び大菩薩衆、各微塵數の舌相を出して、かくの如くの微塵數劫の中に、息まずして過を說

きたまふとも盡くすこと能はじ、この人の往罪は滅するにところ無く、一切の諸佛も救ふこと能はじ、この故に行者本原に歸せんとおもはば、當に斯の論により修行すべし、實に不信の心を生じて、甚深の大乘敎を誹謗すべからず、當に願くは此の勸遠く流布し、重重不説の刹に遍ずべし。

釋摩訶衍論卷第十終

唯識三十頌

世親菩薩造

稽首唯識性　滿分清淨者　我今釋彼説　利樂諸有情

由假説我法　有種種相轉　彼依識所變　此能變唯三

謂異熟思量　及了別境識　初阿賴耶識　異熟一切種

不可知執受　處了常與觸　作意受想思　相應唯捨受

是無覆無記　觸等亦如是　恒轉如暴流　阿羅漢位捨

次第二能變　是識名末那　依彼轉緣彼　思量爲性相

四煩惱常俱　謂我癡我見　幷我慢我愛　及餘觸等俱

有覆無記攝　隨所生所繫　阿羅漢滅定　出世道無有

次第三能變　差別有六種　了境爲性相　善不善俱非

此心所遍行　別境善煩惱　隨煩惱不定　皆三受相應

初遍行觸等　次別境謂欲　勝解念定慧　所緣事不同

善謂信慚愧　無貪等三根　勤安不放逸　行捨及不害

煩惱謂貪瞋癡慢疑惡見誑諂與害憍放逸及失念散亂不正知無慚無愧

乃至未起識義

初即依此三性依他起自性依圓成實於彼遍計所執盡前異熟既皆無二定俱不定掉舉與惛沈忿

此諸法相勝義

是諸識轉變常現起識

意識常現起識

依止根本識

由一切種識遍計所執性

由諸業習氣

由彼彼遍計種種物俱

故此與依他起性

依他起自性

五識隨緣現

二取習氣

分別緣所生

除生無想天

分別所分別

非異

非不異

分別緣所生

如是如是變

亦次第自然性

亦即無自性

求住唯是眞如性

立彼三無性

非異

非不異

立彼三無性

隨煩惱謂忿覆惱嫉慳悔眠沈掉舉與惛沈

或俱或不俱

及無心二定

由此彼皆無力故

以展轉力故

後由遠離前說

如無常等性

故佛密意說

於二取隨眠故

如其性

恨覆惱嫉慳悔眠沈

不信懈怠

尋伺二各二

如濤波依水

睡眠與悶絕

故一切唯識

彼彼分別生

彼復生餘異熟

自性無所有

非常遠離前性

一切法無性

所執我法性

即唯識性

猶未能伏滅

大乘百法明門論

世親菩薩造
三藏法師玄奘奉詔譯

本地分中略錄名數。如世尊言。一切法無我。何等一切法。云何爲無我。一者略有五種。一眼識。二耳識。三鼻識。四舌識。五身識。六意識。七末那識。八阿賴耶識。二者略有八種。一眼識。二耳識。三鼻識。四舌識。五身識。六意識。七末那識。八阿賴耶識。三者略有八種。一眼識。二耳識。三鼻識。四舌識。五身識。六意識。七末那識。八阿賴耶識。四者略有八種。一眼識。二耳識。三鼻識。四舌識。五身識。六意識。七末那識。八阿賴耶識。五者略有八種。一眼識。二耳識。三鼻識。四舌識。五身識。六意識。七末那識。八阿賴耶識。六者略有八種。一眼識。二耳識。三鼻識。四舌識。五身識。六意識。七末那識。八阿賴耶識。七者略有八種。一眼識。二耳識。三鼻識。四舌識。五身識。六意識。七末那識。八阿賴耶識。八者略有八種。一眼識。二耳識。三鼻識。四舌識。五身識。六意識。七末那識。八阿賴耶識。

末那識。八阿賴耶識。第二心所有法略有六種。謂遍行有五。別境有五。善有十一。煩惱有六。隨煩惱有二十。不定有四。遍行五者。一作意。二觸。三受。四想。五思。別境五者。一欲。二勝解。三念。四三摩地。五慧。善十一者。一信。二精進。三慚。四愧。五無貪。六無瞋。七無癡。八輕安。九不放逸。十行捨。十一不害。煩惱六者。一貪。二瞋。三慢。四無明。五疑。六不正見。隨煩惱二十者。一忿。二恨。三惱。四覆。五誑。六諂。七憍。八害。九嫉。十慳。十一無慚。十二無愧。十三不信。十四懈怠。十五放逸。十六惛沈。十七掉擧。十八失念。十九不正知。二十散亂。不定四者。一睡眠。二惡作。三尋。四伺。第三色法略有十一種。一眼。二耳。三鼻。四舌。五身。六色。七聲。八香。九味。十觸。十一法處所攝色。第四心不相應行法有二十四種。一得。二命根。三衆同分。四異生性。五無想定。六滅盡定。七無想事。八名身。九句身。十文身。十一生。十二老。十三住。十四無常。十五流轉。十六定異。十七相應。十八勢速。十九次第。二十時。二十一方。二十二數。二十三和合性。二十四不和合性。第五無爲法有六種。一虛空。二擇滅。三非擇滅。四不動。五想受滅。六眞如。言無我者略有二種。一補特伽羅無我。二法無我。

中論八不偈

龍樹菩薩造

不生亦不滅　不斷亦不常　不一亦不異　不來亦不去
能說是因緣　漸滅諸戲論　我稽首禮佛　諸說中道義
因緣所生法　我說即是空　亦爲是假名　亦是中道義

立義分

馬鳴菩薩造

摩訶衍者。惣說有二種。云何爲二。一者法。二者義。所言法者。謂衆生心。是心則攝一切世間法出世間法。依於此心顯示摩訶衍義。何以故。是心眞如相。即示摩訶衍體故。是心生滅因緣相。能示摩訶衍自體相用故。所言義者。即有三種。云何爲三。一者體大。謂一切法眞如平等不增減故。二者相大。謂如來藏具足

無量性功德故。三者用大。謂能生一切世間。出世間善因果故。一切諸佛本所乘故。一切菩薩皆乘此法。到如來地故。諸佛。甚深。廣大義。我今隨分惣持說。廻此功德如。法。性。普利一切衆生界。

密嚴院發露懺悔の文和譯

興敎大師撰

我等懺悔す無始より來た。妄想に纏はされて衆罪を造る。身口意業常に顚倒して誤つて無量の不善業を犯す。珍財を慳悋して施を行せず。意に任せて放逸にして戒を持せず。屢忿恚を起して忍辱せず。多く懈怠を生じて精進せず。心意散亂して坐禪せず。實相に違背して慧を修せず。恆に是の如くの六度の行を退して。還つて流轉三途の業を作る。名を比丘に假つて伽藍を穢し。形を沙門に比して信施を受く。受くる所の戒品は忘れて持せず。學すべき律儀は廢して好むこと無し。諸佛の厭惡する所を慙ぢず。菩薩の苦惱する所を畏れず。遊戲笑語して徒に年を送り、諂誑詐僞して空しく日を過ぐ。善友に隨はずして癡人に親しみ。善根を勤めずして惡行を營む。利養を得んと欲して自德を讃し。勝德の者を見ては嫉妬を懷き。卑賤の人を見ては憍慢を生ず。富饒の所を聞いては希望を起し。貧乏の類を聞いては常に厭離す。故に殺し誤つて殺す有情の命。顯はに取り密に取る他人の財。觸れても觸れずしても非梵の行を犯す。口四意三互に相續し。佛を觀念する時は攀緣を發し。經を讀誦する時は文句を錯る。若し善根を作せば有相に

住し。還つて輪廻生死の因と成る。行住坐臥知ると知らざると。犯す所の是の如くの無量の罪。今三寶に對して皆發露す。慈悲哀愍して消除せしめたまひ。皆悉く發露し盡く懺悔す。乃至法界の諸の衆生。三業に作る所の此くの如くの罪。我れ皆相代つて盡く懺悔す。更に亦その報を受けせしめざれ。

障子の文和譯

興敎大師撰

大乘深祕の說、萬法は一心の作なり、心常に佛境に遊ばゞ、身何ぞ迷界に住せん、若し爲に十方三世の佛を皈敬せんと欲はゞ、必ず應當に六道四生の類を尊重すべし、豎には過去の四恩、及び未來の五佛、橫には十方の諸尊、並に兩部の三寶なり、有有は空空が有なり、空空は有有が空なり、空有空は俱に空なり、有空有は同じく有なり、非有亦非空、一中にして二邊を離る、これ空復たこれ有、二諦卽ち一法なり。

夢裏の有無は、有無同く無なり、迷中の是非は是非共に非なり、濁水の清澄なるは既に是れ珠の力なり、妄去り眞來るは、豈に智用にあらずや。

五輪九字明祕密釋一卷和譯

亦は頓悟往生祕觀と名く　興教大師撰

竊に惟れば二七の曼荼羅は、大日帝王の内證、彌陀世尊の肝心、現生大覺の普門、順次往生の一道なり、所以何となれば、纔見纔聞の類は、見佛聞法をこの生に遂げ、一觀一念の流は離苦得樂を卽身に果す、況やまた信根清淨にして慇懃に修行すれば、これ卽ち大日如來の覺位、證得を反掌に取り彌陀善逝の淨土、往生を稱名に期す、稱名の善猶かくの如し、觀實の功德豈虛からんや、顯敎には釋尊の外に彌陀あり、密藏には大日卽ち彌陀、極樂の敎主なり、當に知るべし十方淨土は皆これ一佛の化土、一切如來は悉くこれ大日なり、毘盧彌陀は同體の異名、極樂密嚴は名異にして一處なり、妙觀察智の神力加持を以て、大日の體の上に彌陀の相を現ず凡そ是くの如くの觀を得れば、上諸佛菩薩賢聖を盡くし、下世天龍鬼八部に至るまで大日如來の體にあらざること無し、五輪門を開いて自性法身を顯はし、九字門を立てて受用報身を標す、既に知んぬ、二佛平等なり、豈終に賢聖差別あらんや、安養都率は同佛の遊處、密嚴華藏は一心の蓮臺なり、惜いかな古賢難易を兩土に諍ふこと、悅ばしいかな今愚往生を當處に得ること、重ねて祕釋を述る意ただ此にあり、往生の難易、有執の然らしむるなりのみ、方に今この眞言を釋するに略して十門を作す。

擇法權實同趣門、正入祕密眞言門、所獲功德無比門、所作自成密行門、纔修一行成多門、上品上生現證門、覺知魔事對治門、卽身成佛眞行門、所化機人差別門、發起問答決疑門。

第一に擇法權實同趣門とは、若しこの最上祕密不二大乘に入て修行せんと欲するものは、先づ須く深般若の心を發起すべし、然して後に當に三密の行を修すべし、若し善男善女あつて纔にこの門に入れば、則ち八萬四千の迷軍は黨を率して皈伏し、一百六十の妄賊は伴を引いて馳走す、四重八重の群山は風に隨つて飄去し、三障五障の衆海は波に應じて消滅せん、これに由て流轉生死の業縛は解脫を刹那に證し、沈淪苦海の因絢は破壞を須臾に成ず、加之、五種有爲の妄風は厭はざるに自滅し、三部無相の覺寶は求めざるに忽に得、豈に妙ならざらんや、快からざらんや、是くの如くの深義、何れの經論に依てか此の心の義を說くや、頌に曰く、

佛道權實の岐を簡擇して劣を捨て勝を取るを勝義と名け、法界淺深の區を分別

して妄執を起すこと無きを般若と稱す、自性法身遍照尊、受用變化諸佛陀、金剛薩埵妙德尊、古佛龍猛菩薩等、かくの如くの變化の佛菩薩の所說の經論に分別して說きたまへり、若し頓悟成佛せんと欲するものは、應當にこの心に依て修行すべし。

問ふ、佛道に何等の數あつて幾くか權、幾くか實、何れか淺、何れか深なる、頌に曰く、

異生羝羊は惡に躭る基、愚童持齋は善を修する始め、嬰童無畏は卽ち天乘、唯蘊無我はこれ聲聞、拔業因種は緣覺の城、他緣大乘は法相の家、覺心不生は三論の宗、一道無爲は法華の宮、極無自性は華嚴の敎、秘密莊嚴は眞言の法なり、前の九の住心を淺權と名け、後の一の心佛を深實と號す、各妙覺と稱すれども、實の佛にあらず、水中の圓鏡何の實かあらん、並に圓敎と名くれども皆半乘なり、池上の玉泡その眞なし、淺より深に向ふ次第の路は、劣を捨て勝を取る相續の位なり。

問ふ、前の九種の敎道の佛と、後の一種の眞言證道の尊と、何の差別かある、頌に曰く、

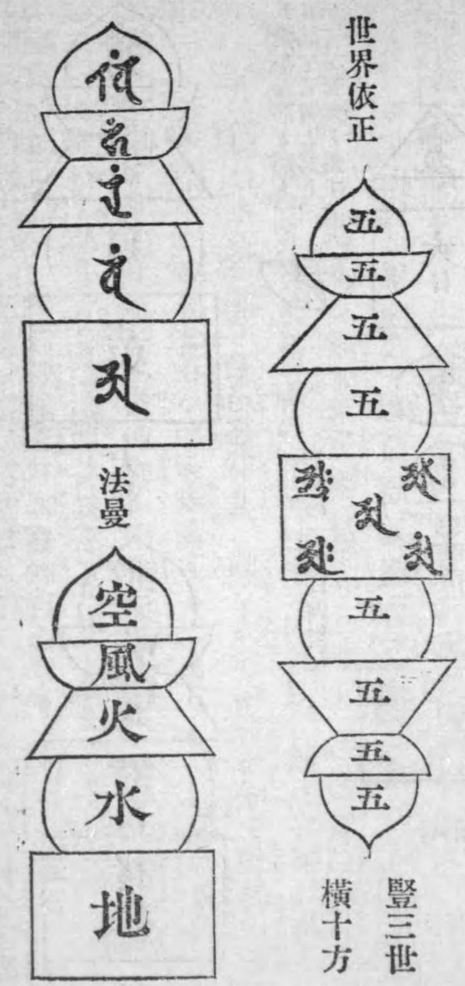
顯佛は俱に無明にして明にあらず、密佛は迷妄を盡くして餘なし、顯敎は應化二身の說、密敎は法身一佛の說なり、顯敎は隨他意の敎を立て、密は判じて隨自意の敎と爲す、顯敎は方便權施の敎、密敎は眞實理盡の敎なり、顯敎は三劫を經て成佛し、密敎は一生に佛道を證す、顯は一二の法身の名を說き、密は略すれば四五廣すれば無際なり、顯は一分の理秘を說くに似たり、密は事理俱密の相を說く、顯は遮情門の義を說くに似たり、密は兼て具に遮表の德を說く、顯敎をば名けて散善門と爲す、眞言は唯三摩地を說く、顯敎は因分可說の談、眞言は果分可說の談なり、顯敎は修行種因海、眞言は性德圓滿海なり、顯は一心眞如の本を說き、密は三密平等の旨を說く、顯佛は諸の一心を說かず、密は無量の一一心を說く、顯佛は無量の如を說かず、密は重重帝網の理を說く、顯は理を以て衆色の本と爲し、密は色を壞せずして是れ理なりと說く、顯は理は定めて言語なしと說き、密は理に無量の語ありと說く、顯敎は法身說法せず、密敎は四身同く說法す、顯は四弘を說いて行願を盡くし、密は五誓を立て、行願と爲す、顯は法身獨にして眷屬なし、密は四種法身の伴を具す、顯は理智の佛は利生なし、密は恒に三世に衆生を度す、顯佛は一眞如の理を證し、密は過恆重重の理を證す、顯は重障を

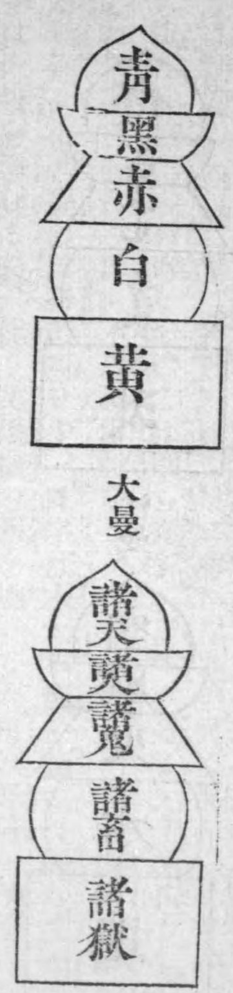
具すれば佛を見ず、密は設ひ具すと雖も必ず佛を見る、顯は智觀にあらされば成佛せず、密は唯呪を誦じて亦成佛す、顯宗は菩薩人師の說、密藏は四種法身の說なり、顯敎は正像末の興廢あり、眞言は常住不變の敎なり、顯敎は因緣所生の法、密敎は法爾自性の法なり、顯敎は多名句を以て一を說き、密は一字門に諸義を含す、顯敎は他受應化の說、密敎は自受法樂の說なり、顯は理一事多の義を說き、密敎は俱同俱別の談なり、顯敎は纔に字相門を說く、密敎は字相字義の理なり、顯は四印を說かず密は說く、顯は五相を說かず密は說く、顯は五智を說かず密は說く、顯は六大は淺く密は深廣なり、顯は三密に暗く密は明明なり、顯は三部に暗く密は能く達す、顯は兩界を闕し密獨說く、顯は一觀成佛の義なし、顯は觀字成佛の門なし、顯は結印成佛の義なし、顯は五百塵點の始を指し、密は本不生の成道を談ず、如上の差別を勝義と名く。

第二に正入秘密眞言門とは此に三門あり、一には身密修行門、二には語密修行門、三には意密修行門なり、今且く語密修行門について亦三門あり、一には誦持門、二には觀字門、三には解字門なり、誦持門とは懃にその明を暗誦して文句をして謬誤せしめざるが故に、觀字門とは明の字字の形相を觀ずるが故に鼻端の𑖌𑖼字を觀じて後夜分に於て菩提を得るが如くなるが故に、解字門とは一一の字門の如實の義門を解了するが故に、この解了字義門の中に就いて亦分ちて二と爲す、一には略釋各各字義門、二には總攝法界法身門なり、初は五輪五智法身門、後は九字九品報身門なり、且く法身門とは摩訶毘盧遮那本地法身、一切如來一體速疾力三昧に入て法界體性三昧を說いて曰はく、我れ本不生を覺り語言の道を出過し諸過解脫を得、因緣を遠離し空は虛空に等しと知る、又毘盧遮那佛、降伏四魔金剛戲三昧に住して四魔を降伏し六趣を解脫する滿足一切智智金剛の句を說きたまふ、𑖡𑖦𑖾𑖭𑖦𑖡𑖿𑖝𑖤𑖲𑖟𑖿𑖠𑖯𑖡𑖯𑖽𑖀𑖾𑖪𑖰𑖨𑖮𑖳𑖽𑖏𑖽、この五字は卽ち是れ四魔降伏する眞言の句なり、初の句は歸命三寶等の義、𑖀𑖾字は是れ行の義本不生なり、傍の二點はこれ淨除の義、能く四魔を降伏し一切の苦を除く。廣く釋すること下の如し、地の萬物を生ずるが如く𑖀字大地の六度萬行を出生することも亦復是くの如し、地とは堅固の義なり、大菩提心堅固不退にして必ず萬德の果を結ぶ、若し眞言行者、投華を得る時に於て𑖀字の心地本有の菩提心の上に於て始覺の菩提心の種を植ゑて永く疫病等の橫墮の因を離れて速に無上菩提に至る、當に知るべし、この人は一字頂輪王の種姓なり、故に己身を輕んぜずして菩提の行を行ずべし、この眞言法に

於ては疑謗の逆縁猶三乘教の順行に勝れたり、何に況んや投華を得るをや、何に況んや修信の行人をや、これ則ち𑖭字生長の義なり、𑖀字はこれ縛なり畫はこれ無礙三昧なり即ち不思議解脫なり、𑖨字は水大、能く煩惱の塵垢を洗つて心身精進して菩提の萬行散亂せず、𑖨字は水大不散の義これ則ち性德圓海なり、𑖨字は六根を淨むる義、能く業煩惱の薪を燒いて六根の罪障を淨除し菩提の果を證す、𑖩字に三義あり𑖩𑖭𑖨なり、具には吽字義の如し、また三解脫門なり、風大の能く輕重の塵類を掃ふが如く𑖩字の風大も能く八萬の塵勞を掃つて四涅槃の理を證す、𑖩字因緣の風止息する時これを大涅槃安樂と名く、𑖀字は大空の義、周遍法界等空無礙の義なり、空大の能く萬有を障へずして生長するが如く𑖀字の空大も淨穢の國に遍して能く凡聖の依正を成ず、善無畏三藏の云く、金剛頂の肝心、大日經の眼精、最上の福田、殊勝の功德ただ五字金剛の眞言にあり、若し受持することあれば所獲の功德、比量すべからず、永く災障及びもろ〳〵の病苦なく重罪を消滅し衆德を雲集す、又父母所生の身に速に大覺の位を證す、若し日に一遍を誦じ或は二十一遍乃至四十九遍を誦ずる、一遍を校量するに藏經一百萬遍十二分教を轉ずるが如しと、この眞言の能讚の文なり。

五大、五輪、六大法界、十界輪圓、一切衆生、色心實相、自身成佛の圖に云く。





右五輪の名また頂輪、面輪、胸輪、腹輪、膝輪と名くるは行者によって名を立つ、金剛界には𑖀字の一字を以て變じて五輪を成じ、胎藏界には𑖀字の一字を以て五輪を現ず、或は共じて𑖀𑖀𑖀𑖀𑖀を以て五輪世界を成ず、若し行者に約せば白淨信心を以て五輪の種子と爲す、白淨信心とは淨菩提心なり、これ則ち如實知自心なり、竪には十重の淺深を顯はし、横には塵數の廣多を示す、余生國を出でし時の如きは三毒の罪業羝羊の妄想に任せば三途八難に墮すべし、實の如く自心の惡業を知て無明の父母の家を別れしより已來更に名利の心を捨て、深く無盡莊嚴恒沙の己有を信ず、これ則ち一重の如實知自心なり、周處が三害を離れ未生の三途を悔いしが如きは、實の如く持齋節食の理を知て時時八關を受け倍倍成果を願ふ、然りと雖も紫宸殿は前生の舊所、五欲の妙境は眼前に厭ふ所と、實の如く自心を知る、初禪の高臺は過去の慢所、離生喜樂は久しく受けて新ならずと、實の如く嬰童の自心を知り、漸く火宅の薪を知て聲緣の室に眠る、實の如く二乘の小滅を知て生空の理に味著することなし、他緣の廢詮は性に差別あり覺心の不生は獨空慮絕す、實の如く有病空疾を知て三大の遠路を出で芥石の盡きんことを期す、法華の本佛は猶五百の始を指し華嚴の果佛は亦不談の說に留る、これ分の如實知自心にして未だ滿の如實知自心ならず、五相五智の祕密、智界理界の莊嚴、自覺本初の住心これを自然覺と名け、又は如實知自心と名く、深義更

に問へ、一切衆生の色心の實相は無始本際より毘盧遮那の平等智身なり、色とは色蘊、開いて五輪と爲す、心とは識大、合して四蘊と爲す、これ則ち六大法身法界體性智なり、五輪各衆德を具す、故に名けて輪と爲す、體相廣大なれば稱して大の名と爲す、五佛は自覺覺他の故に名けて佛と爲す、五智は簡擇決斷の故に名けて智とす、色は心に離れざれば五大卽ち五智なり、心は色に離れざれば五智卽ち五輪なり、色卽是空なれば萬法卽ち五智なり、空卽是色なれば五智卽ち萬法なり、色心不二なるが故に、五大卽ち五藏、五藏卽ち五智なり圖に云く、

肝の藏は眼を主どる、阿賴耶識、大圓鏡智、寶幢佛、阿閦、藥師、發菩提心、東、木、春、青、

肺の藏は鼻を主どる、意識、妙觀察智、轉法輪智、無量壽、證菩提果、西、金、秋、白、

心の藏は舌を主どる、末那識、平等性智、華開敷、寶生、多寶、行菩提行、南、火、夏、赤、

腎の藏は耳を主どる、五識、成所作智、不空成就、釋迦、天鼓音、入涅槃理、北、水、冬、黑、

脾の藏は口を主どる、奄摩羅識、法界體性智、毘盧遮那佛、具足方便、中央、土用、黃、

已上善無畏三藏の傳

土、地、鎭星、中央、黃、土公、堅牢地神、水、水、辰星、北方、黑、水天、龍神、江河水神、

火、火、熒惑星、南方、赤、火天、火神、
金、風、太白星、西方、白、金神、風天、
木、空、歲星、東方、青、木神、虛空天、空神、

已上不空三藏の傳

阿自心發菩提、大圓鏡智、寶幢、阿閦、東方、
吽即心具萬行、平等性智、華開、寶生、南方、
麼見心正等覺、妙觀察智、阿彌陀佛、西方、
斫證心大涅槃、成所作智、天鼓、不空、釋迦、北方、
惹發起心方便、法界體性智、大毘盧遮那佛、中央、

密嚴淨土理智不二の五佛五智、金剛界に即してこれ胎藏の五佛五智なり。

阿發菩提心、大圓鏡智、阿閦、
羅行菩提行、平等性智、寶生、
薩成菩提果、妙觀察智、阿彌陀佛、
婆入涅槃理、成所作智、不空、
訶方便具足、法界體性智、大日如來、

金剛界不二摩訶衍の五佛心王、これ胎藏に即して即ちこれ金剛界不二の五佛五智なり、この阿字の五輪を知るが如く餘の字母も亦復かくの如し、各具五智の故に亦無際智あり、圓鏡力の故に實覺智なり、これを自心成佛と名く、若し行者四時の中に於て間斷せしめず眠にあつても覺にあつても觀智離れずして三摩地に順ずれば即身成佛この生に難きにあらず。

行者觀、

阿、肝、
羅、腎、
心、
吽、
麼、五佛、
訶、虛空部、五佛、
惹、
薩、
婆、寶部五佛、
訶、羯磨部、五佛、
阿、脾、
羅、肺、
麼、
吽、
阿、

三藏の云く、余金剛智三藏に依て、この五字を傳へて信を起し、これを修して千日に及ぶ、秋夜の滿月に於て忽然として除蓋障三昧を得云、これに由て弟子この秘訣を聞くことを得て深く信じ多年これを修して既に初位の三昧を得たり、有信の禪徒、疑惑を生ずることなかれ、若し阿が言虛ならば、これを修して自知せよ、唯願はくば一生をして空しく過さしむることなかれ、復次に阿字は金剛部阿閦、肝

の藏、眼識を主どる、所謂丸字は卽ちこれ大日如來の理法身、自性淸淨畢竟本不生不可得空なり、大悲地輪の種子、金剛部の曼荼羅なり、若し色法に約せば、(色法破地獄の軌には名色に作る)地はこれ色法なり、五陰の中の識陰の心地を持す、其種子不淨を施せば、地識動取して能く愛有を招く、風空は能犯の體、火地は所犯の門なり、水空識の種子を下して子宮の中に住して悉く五藏と成る、この五藏(藏軌には陰に作る)の中の識陰の心、發するが故に地と名くこれ色法なり、今肝は魂を主どる、魂神の氣を東方と木精と爲す、青色なり、空は靑なり、その靑色は木より生ず、木は水より生ず、肝は靑氣及び腎より生ず、その形蓮華葉の如し、その中間に團珠を著く、團肉は胸の左にあり、肝出でて眼と爲る筋を主どる、筋窮つて爪と爲る、覺禪師の(覺禪師、智覺の宗鏡錄二十八に出づ)云く、肝華は八葉靑色にして五色を具すと、丸字は蓮華部阿彌陀佛、肺の藏鼻識を主どる所謂丸字はこれ第十一の轉聲なり、(字はこれ第三の轉なり、卽ち大日如來の智水、彌陀の大悲、水輪の種子なり、神通自在の法なれば法身と名く、柏應相對なれば亦報身と名く蓮華部の曼荼羅なり、肺の藏は魄を主どる、魄神の形體は、それ鼻體の如し(如鼻體軌には如華に作る)西方金行なり、秋を主どる、其色白色なり、肺鼻の中に自然に風息あり、卽ちこれ風大なり、五陰の中の想陰の心風を持す、想陰の心は識より生ず、識心は過去の二因より生ずる現在の五果なり、謂く無明行より識名色等を生じて妄想展轉して輪轉無際なり、卽ちこれ十二因緣なり、肺の藏、意識を主どる、意識、妄想を生ず、妄想の因緣を以て輪轉す、白氣及び肺、辛き味多く肺に入れば肺を增し肝を損す、若し肺の中に魄神なければ恐怖癲病し、心、肺を害し病を成す、火の金を尅するが若如く、心强く肺弱ければ當に肺を心に止むべし、白氣を以て赤氣を攝取すれば肺病則ち差ゆ、白氣とは肺の名字なり、肺華は三葉白色にして半月の形なり、第口の推の左右一寸五分これ所在なり、丸字は寶部寶生尊、心の藏口內を主どる、所謂丸字はこれ大日如來の智火、寶生の大悲、福德身の曼荼羅、火大の種子なり、一切衆生の無始の間隔無明妄執の塵垢を焚燒して菩提心の芽種を出生す、卽ちこれ如來福德の身、實智の火を以て貧窮の業因を燒き、福德自在ならしむ、心火は夏を主どる、その色赤し、赤色より火を生ず、火は木より生ず、五陰の中の受陰の心、火を持す、受心は想心より生ず、又心は赤氣及び肝より生ず、心出でゝ舌と爲る血を主どる、血窮つて乳と爲る、又耳識を主どる、鼻喉鼻梁額頤等を轉じて苦き味多く心に入れ